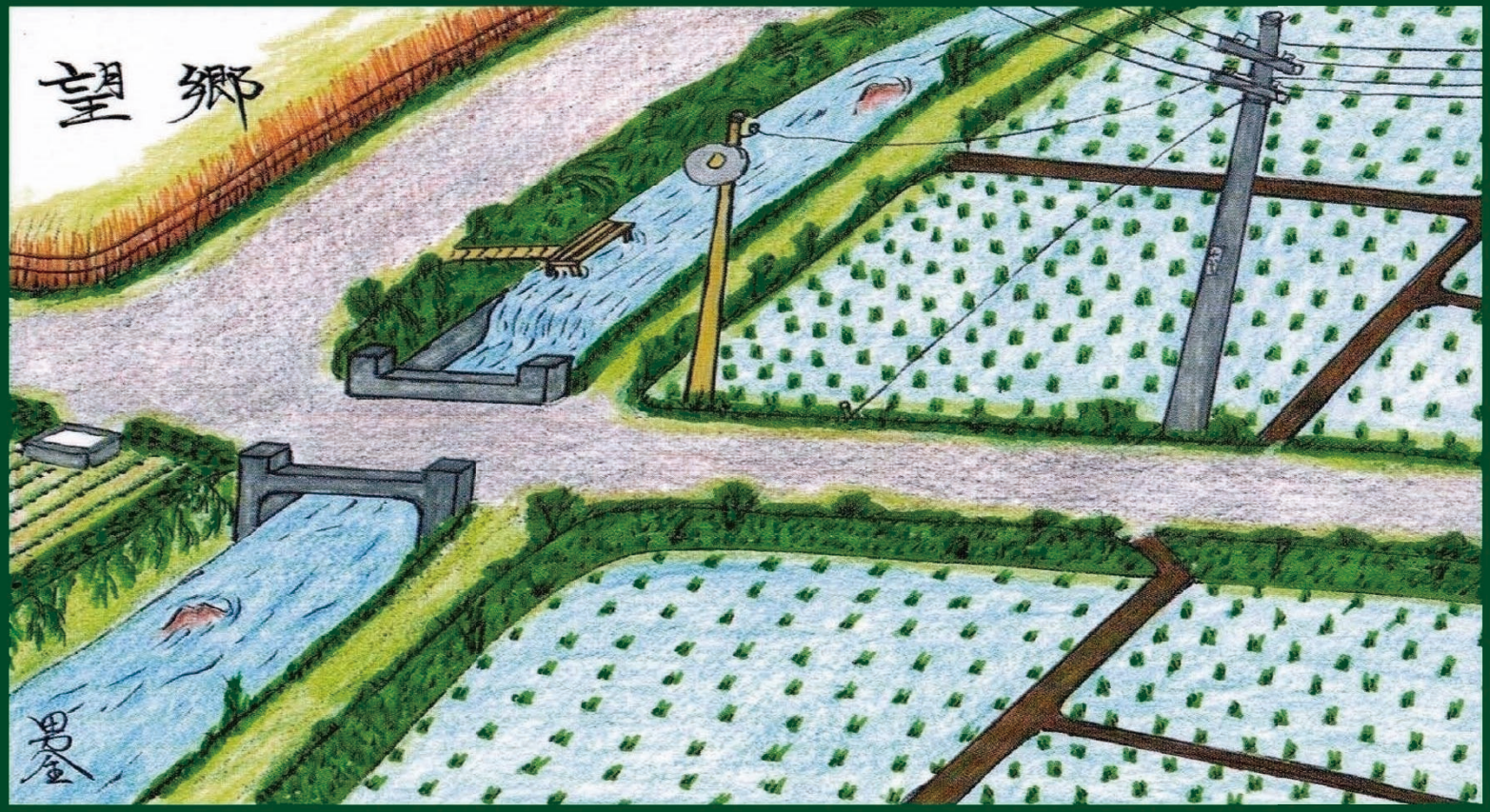
失われたものの記録

望　郷

文・絵　男全富雄　港北ニュータウン記念協会編



望郷（港北ニュータウン記念協会編）

まえがき

男全冨雄氏の著作に「望郷」があります。その中には氏が生まれ育った北山田地域における住民の生活を港北ニュータウン開発前の大正時代から開発開始までを描いたものが掲載されています。なお、氏は同書掲載以外にも多数描いています。今回はそれらの絵を生活状況で分類し、ご本人からの説明をいただき一冊の本として編集したものです。

平成 22 年 4 月 1 日

特定非営利活動法人　港北ニュータウン記念協会

望郷 失われたものの記録 —— 筑区北山田の開発前の暮らしから —— 《目次》

Ⅰ 望郷 …… 4
001 田圃 …… 5
002 村の風景 …… 6
003 戦前の山田富士 …… 7
004 農家の家―春 …… 8
005 農家の家―秋 …… 9
006 釣瓶井戸 …… 10
007 農家の縁側 …… 11
008 柿の巨木 …… 12

Ⅱ 農家の仕事 …… 13
009：米作り① 田起こし …… 14
010：米作り② 共同で田起こし …… 15
011：米作り③ 雨の日の田起こし …… 16
012：米作り④ 耕運機で田起こし …… 17
013：米作り⑤ 牛を使った代かき …… 18
014：米作り⑥ 道具を使った代かき …… 19
015：米作り⑦ クロヌリ …… 20
016：米作り⑧ クロヌリの仕上げ …… 21
017：米作り⑨ 稲の種蒔き …… 22
018：米作り⑩ 苗取り …… 23
019：米作り⑪ 畑苗代 …… 24
020：米作り⑫ 苗運びと田植え …… 25
021：米作り⑬ 田植え …… 26
022：米作り⑭ 豆の種蒔き …… 27
023：米作り⑮ 田の草取り …… 28
024：米作り⑯ 雨乞い―山田富士に水を担ぐ …… 29
025：米作り⑰ 雨乞い―頂上で祈祷 …… 30
026：米作り⑱ 雨乞い―水を掛け合う …… 31
027：米作り⑲ お茶の時間―代かきの頃 …… 32
028：米作り⑳ お茶の時間―田の草取りの頃 …… 33
029：米作り㉑ 共同で薬剤散布 …… 34
030：米作り㉒ 稲刈り …… 35
031：米作り㉓ かなこぎを使った脱穀 …… 36
032：米作り㉔ 足踏み機を使った脱穀 …… 37
033：米作り㉕ 動力を使った脱穀 …… 38
034：米作り㉖ 籾の乾燥 …… 39
035：米作り㉗ くるり棒で籾を叩く …… 40
036：米作り㉘ トーミや風車で籾殻を選別 …… 41
037：米作り㉙ かる臼で玄米に …… 42
038：米作り㉚ まんごくで玄米の選別 …… 43
039：米作り㉛ 一升瓶で精米に …… 44
040：米作り㉜ 藁の保存 …… 45
041：米作り㉝ 縄ない …… 46
042：米作り㉞ 米俵作り …… 47
043：米作り㉟ 米俵の積み込み …… 48
044 野菜の苗床作り …… 49
045 山の畑に肥料や水を運ぶ―春 …… 50
046 山の畑に肥料や水を運ぶ―秋 …… 51
047 野菜の種蒔き …… 52
048 蒔いた種を踏む …… 53
049 家族総出で農作業 …… 54
050 肥料担ぎをする姉妹 …… 55
051 農具の手入れ …… 56
052 畑の草取り …… 57
053 農作業の合間の昼寝 …… 58
054 畑で一服―お三時 …… 59
055 さつまいもの収穫 …… 60
056 さつまいもの貯蔵 …… 61
057 麦踏み …… 62
058 麦の土入れ …… 63
059 筍の根埋け …… 64
060 筍の収穫 …… 65
061 茶摘み …… 66
062 茶の製造 …… 67
063 桃の袋掛け …… 68
064 桃の出荷準備 …… 69
065 野菜の出荷準備 …… 70
066 大根を洗う …… 71
067 重代共同出荷場跡 …… 72
068 鎌研ぎ …… 73
069 雨の日の草刈り …… 74
070 酪農の朝 …… 75
071 牛の餌やり …… 76
072 馬の餌やり …… 77

Ⅲ 運搬の変遷 …… 78
073 舟で運ぶ …… 79
074 リヤカーで坂道 …… 80
075 自転車にリヤカー …… 81
076 牛車で野良に−1 …… 82
077 牛車で野良に−2 …… 83
078 馬車を利用 …… 84
079 リヤカーを引く犬 …… 85
080 自転車で運搬 …… 86
081 自転車で荷を競う …… 87
082 三輪トラック …… 88
083 四輪トラックで肥料集め …… 89
084 乗合馬車 …… 90
085 木炭バス …… 91

Ⅳ 働く主婦 …… 92
086 子守りをしながら農作業 …… 93
087 農作業の合間の授乳 …… 94
088 お勝手仕事 …… 95
089 石臼で粉を引く …… 96
090 川で洗濯 …… 97
091 軒先で洗濯 …… 98
092 樽の洗濯機 …… 99
093 子供を背負って野良へ …… 100
094 育児と農作業 …… 101
095 草取りの主婦 …… 102
096 リヤカーの後押し …… 103
097 早く帰ってお勝手 …… 104
098 家路を急ぐ親子 …… 105
099 自転車で医者へ …… 106
100 自転車の親子 …… 107
101 深夜の針仕事 …… 108
102 農家の新妻 …… 109

Ⅴ 行事・生活習慣 …… 110
103 消防団の獅子舞 …… 111
104 寒餅つき …… 112
105 山田富士の桜祭り …… 113

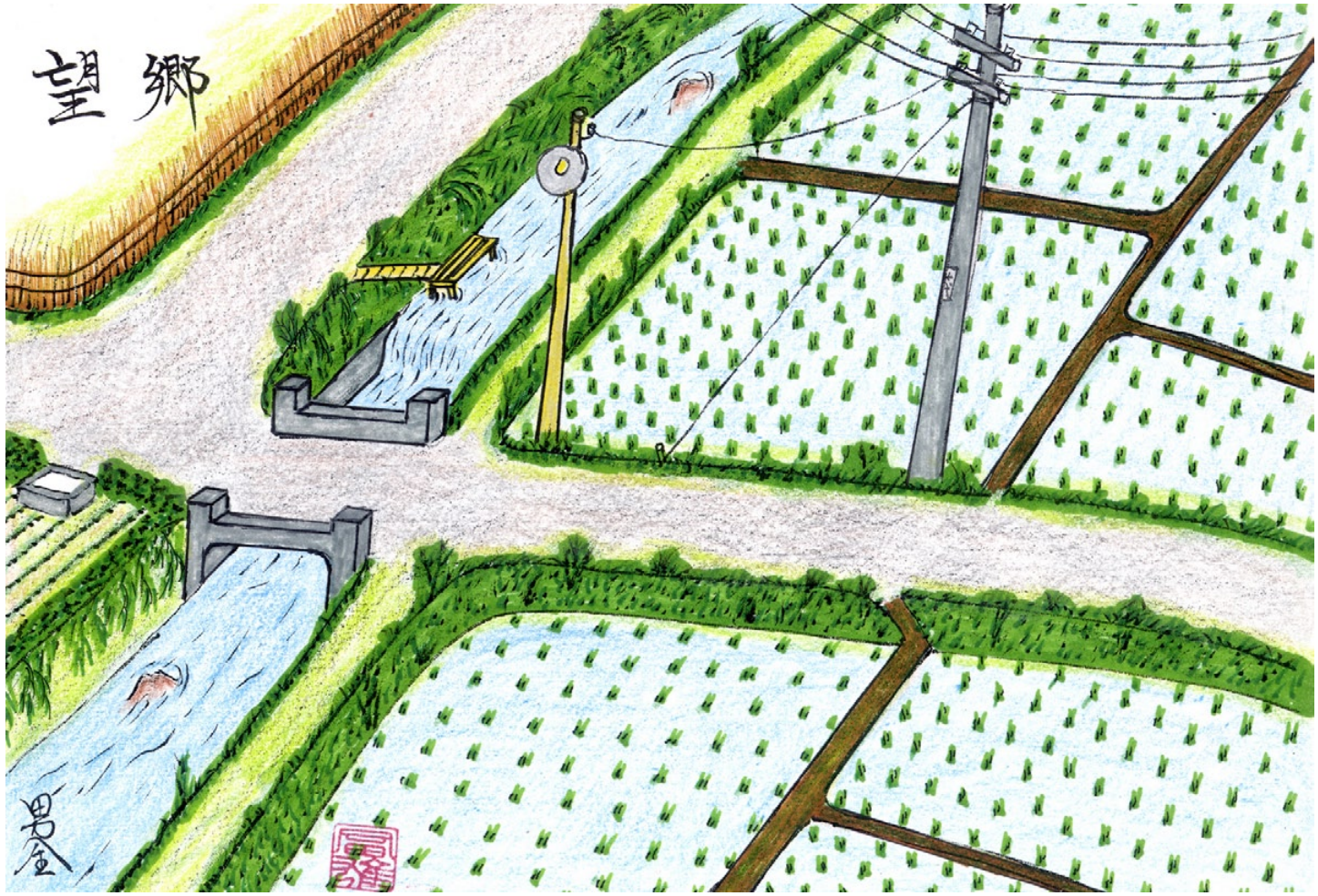
106 五月の節句の鯉のぼり …… 114
107 嫁入り …… 115
108 竹薮の避暑地 …… 116
109 実家へ向かう親子 …… 117
110 トウモロコシ焼き …… 118
111 敬老会の牛乳風呂 …… 119
112 十五夜 …… 120
113 冬の団らん …… 121
114 どぶろく作り …… 122
115 沢庵漬けの準備 …… 123
116 薪作り−1 …… 124
117 薪作り−2 …… 125
118 薪運び …… 126
119 夜回り …… 127
120 戸主消防団の出動 …… 128
121 戸主消防団、手押しポンプで …… 129
122 炊事当番の新米消防団員 …… 130
123 屋根替え用茅刈り …… 131
124 屋根の葺き替え …… 132
125 岩川坂の改修工事 …… 133
126 トロッコが脱線 …… 134
127 多摩川へ砂利の積み込み …… 135
128 トラックの脱輪 …… 136
129 道路普請 …… 137
130 長徳寺の回想図 …… 138
131 のちめ通り …… 139
132 興業館の内部 …… 140
133 魚屋さん …… 141
137 和傘屋さん …… 142
135 青年団の駅伝競争 …… 143
136 優勝パレード …… 144
137 雨の日の農作業姿 …… 145
138 雨の日の農夫 …… 146
139 野良で一服 …… 147
140 立ち話 …… 148
141 バケツに種火 …… 149
142 野良から帰る老夫婦 …… 150
143 昭和初期のバス停 …… 151
144 挨拶 …… 152

Ⅵ 子供たちの暮らし …… 153
145 朝の掃除 …… 154
146 通学風景 …… 155
147 農繁期の通学 …… 156
148 図工の時間 …… 157
149 竹馬作り …… 158
150 手作りの車 …… 159
151 遊びのいろいろ …… 160
152 コマ遊び …… 161
153 女の子の遊び …… 162
154 海老蟹捕り …… 163
155 雀捕り道具―パッチン …… 164
156 ざるで雀捕り …… 165
157 ドジョウ捕り …… 166
158 夜のドジョウ捕り …… 167
159 ウナギ捕り …… 168
160 田圃の水汲み …… 169
161 ホタル狩り …… 170
162 蚊帳 …… 171
163 自転車の横乗り …… 172
164 自転車の三角乗り …… 173
165 野良へお手伝い …… 174
166 水汲みの手伝い …… 175
167 お風呂の水汲み …… 176
168 風呂焚き …… 177
169 子守り …… 178
170 学校で奉仕 …… 179

Ⅶ 戦争の時の話 …… 180
171 奉安殿の遥拝 …… 181
172 小学校の朝礼 …… 182
173 奉安殿より御真影 …… 183
174 講堂で式 …… 184
175 先生も召集 …… 185
176 学校が陸軍兵舎に …… 186
177 銃剣術 …… 187
178 女子部の銃剣術 …… 188
179 暁天動員 …… 189
180 分列行進 …… 190
181 匍匐前進訓練 …… 191
182 山田富士での演習 …… 192
183 北山田に分宿 …… 193
184 竹槍訓練 …… 194
185 軍用馬の調教 …… 195
186 蹄鉄掃除 …… 196
187 出征前夜 …… 197
188 壮行会 …… 198
189 送別会 …… 199
190 辻の別れ …… 200
191 極秘の見送り …… 201
192 故郷を振り返る …… 202
193 離れ難い家族 …… 203
194 駅での見送り …… 204
195 千人針 …… 205
196 演習地への行軍 …… 206
197 神風特攻隊−1 …… 207
198 神風特攻隊−2 …… 208
199 慰問袋 …… 209
200 砲兵隊の演習 …… 210
201 田奈部隊 …… 211
202 田奈弾薬庫 …… 212
203 陸軍照空隊 …… 213
204 松根油の採取 …… 214
205 鉄の供出 …… 215
206 竹の利用 …… 216
207 早渕川沿いの戦車壕 …… 217
208 防空壕 …… 218
209 戦没者の出迎え …… 219
210 無言の帰国 …… 220
211 防空訓練 …… 221
212 北山田の空襲 …… 222

Ⅷ 都市開発 …… 223
213 開発前のすみれが丘 …… 224
214 公団職員による移転交渉 …… 225
215 公民館での説明会 …… 226
216 造成工事 …… 227
217 造成中の山田富士組 …… 228
218 解体前の農家 …… 229
219 見納める老爺 …… 230
220 汗の染みた田畑が埋まる …… 231
221 墓地の移転 …… 232
222 新しい街をつくるために …… 233

Ⅰ　望 鄉



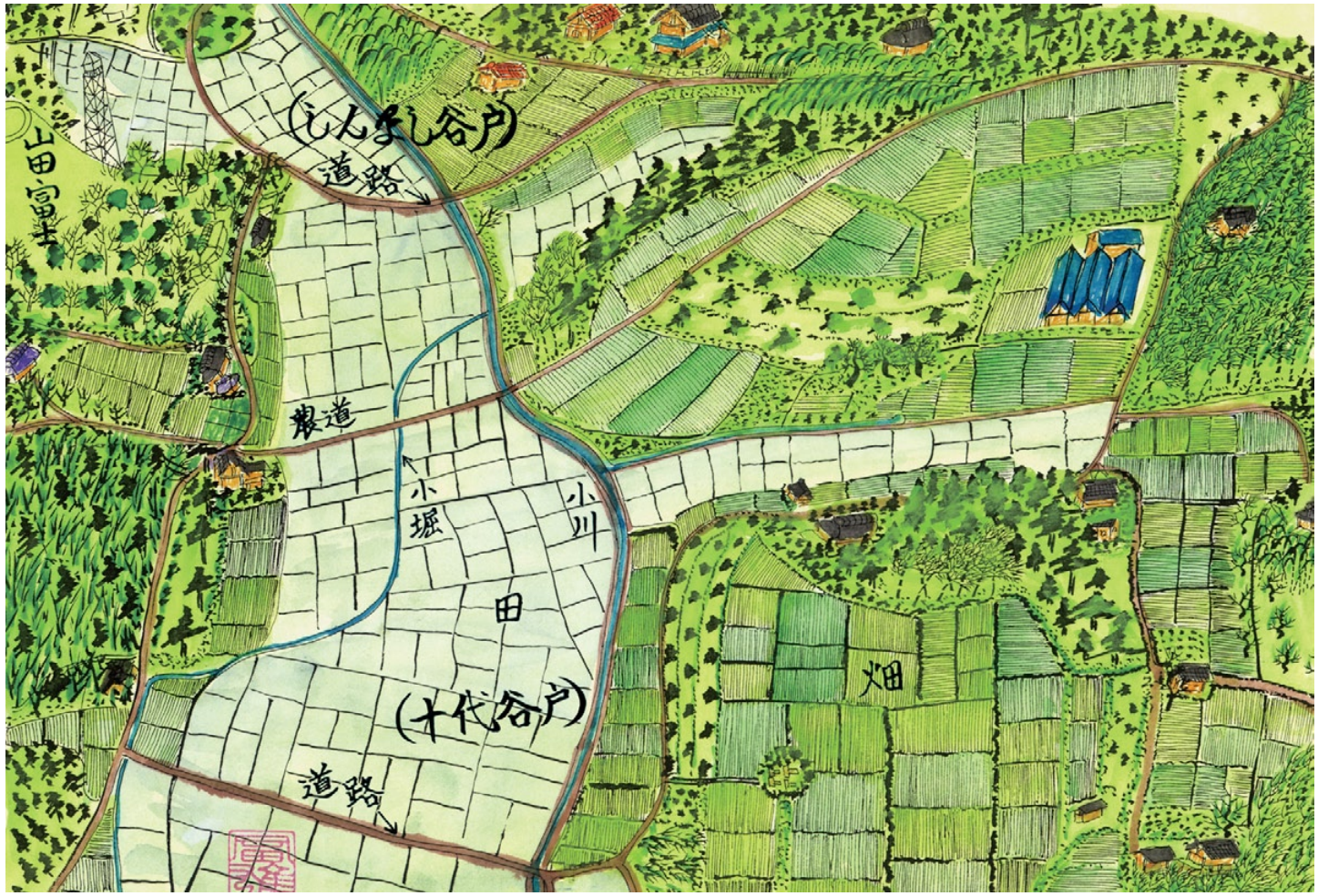
001

田圃

今から約70～80年前、ちょうど昭和初期に都筑区北山田に生まれ育った私には田圃が懐かしく思い出されます。

山から湧き出た清水が小川となり、全部の田圃に水が行き渡るように水路が張り巡らされていました。農道も村道から畔道にと縦横につながっていました。田圃をめぐった水は、早渕川にそそいでいました。

小川にはドジョウ、ウナギ、蟹、カメなどがいて、ホタルやトンボもたくさん飛んでいました。



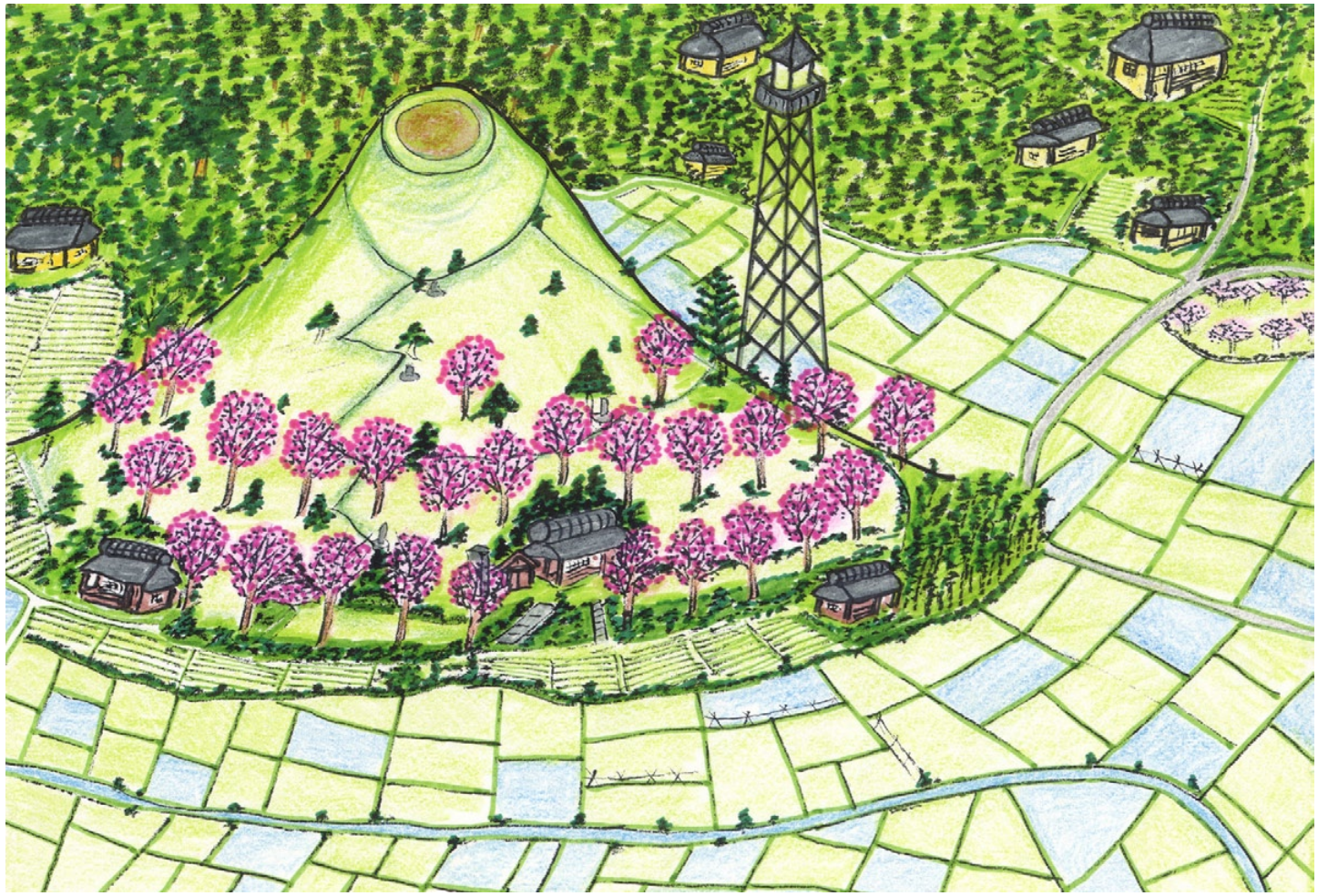
002

村の風景

この絵は開発前の村の様子です。日本のどこにでもある農村風景です。

低地には田圃が広がり、小高い山は畑や雑木林でした。畑では野菜や果物を作り、雑木林は薪を集めたり茸狩りするところで、人々は自然と共に暮らしていました。

家は屋敷林に囲まれ、今のように密集せず、ゆったりと建っていました。



003

戦前の山田富士

開発前の山田富士山です。今は山田富士公園として整備されていますが、造成によって周りの田圃が十メートルも埋められたので低くなってしまいました。

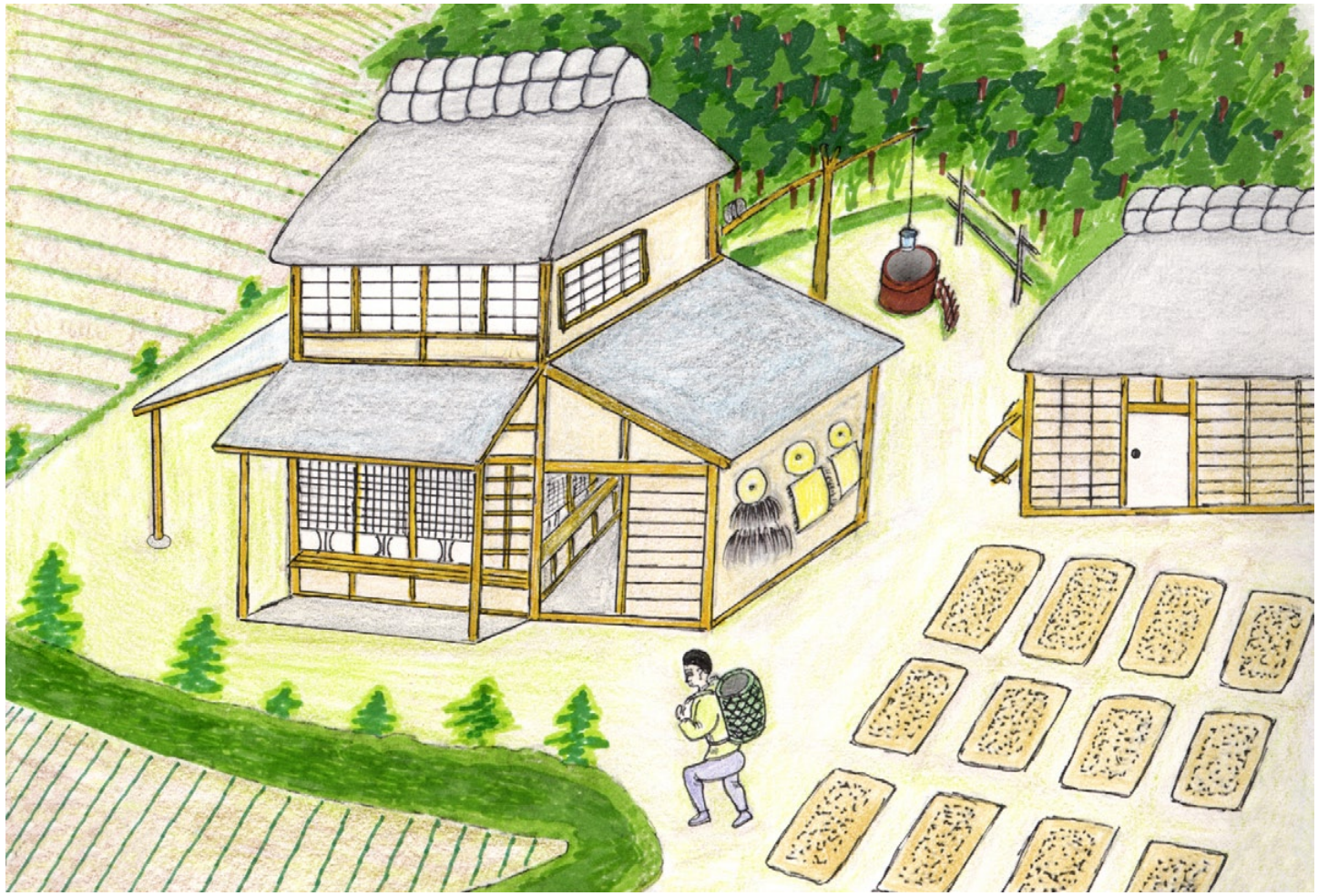
かつての山田富士は高くそびえ村人にとっては信仰の山でした。見事な桜が山裾を覆い、４月の桜祭りは村をあげて行いました。

004

農家の家―春

屋敷は真ん中に母屋があり、母屋を中心に道具や作物を収納する小屋、牛や馬の小屋、厠、釣瓶井戸などが回りに配置され、広い庭は作業場として使われていました。

絵はちょうど春、祖父が天秤を肩にかけて何か運んでいます。畑に出かけるところか、収穫したものを持ち帰ったところです。

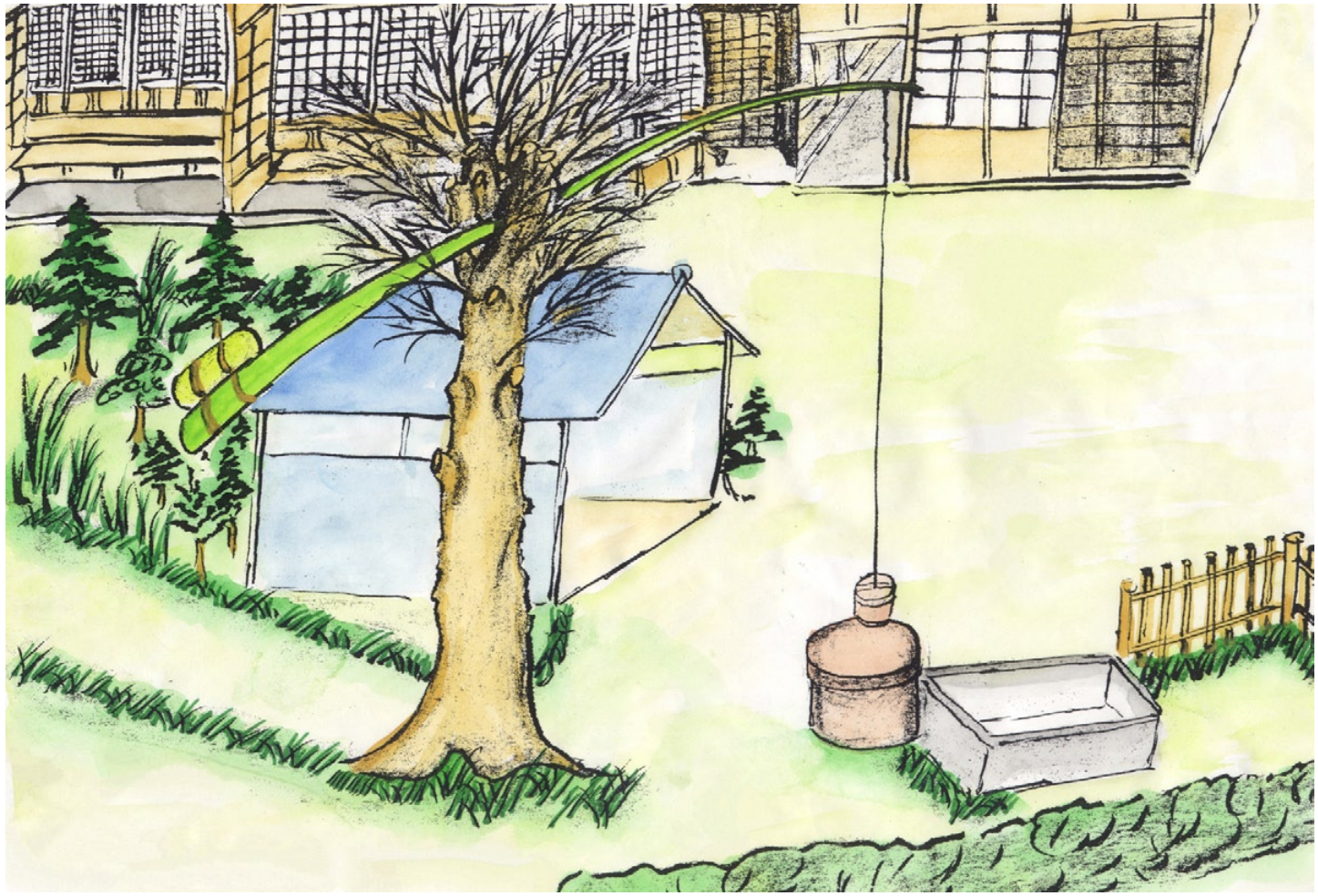


005

農家の家―秋

同じ農家の屋敷ですが、時は秋、庭に作物を干しています。この家は二階建てですが二階は養蚕の部屋として使われていました。母屋の壁には雨天のための蓑や笠がさげてあり、若主人が篭を背負っています。

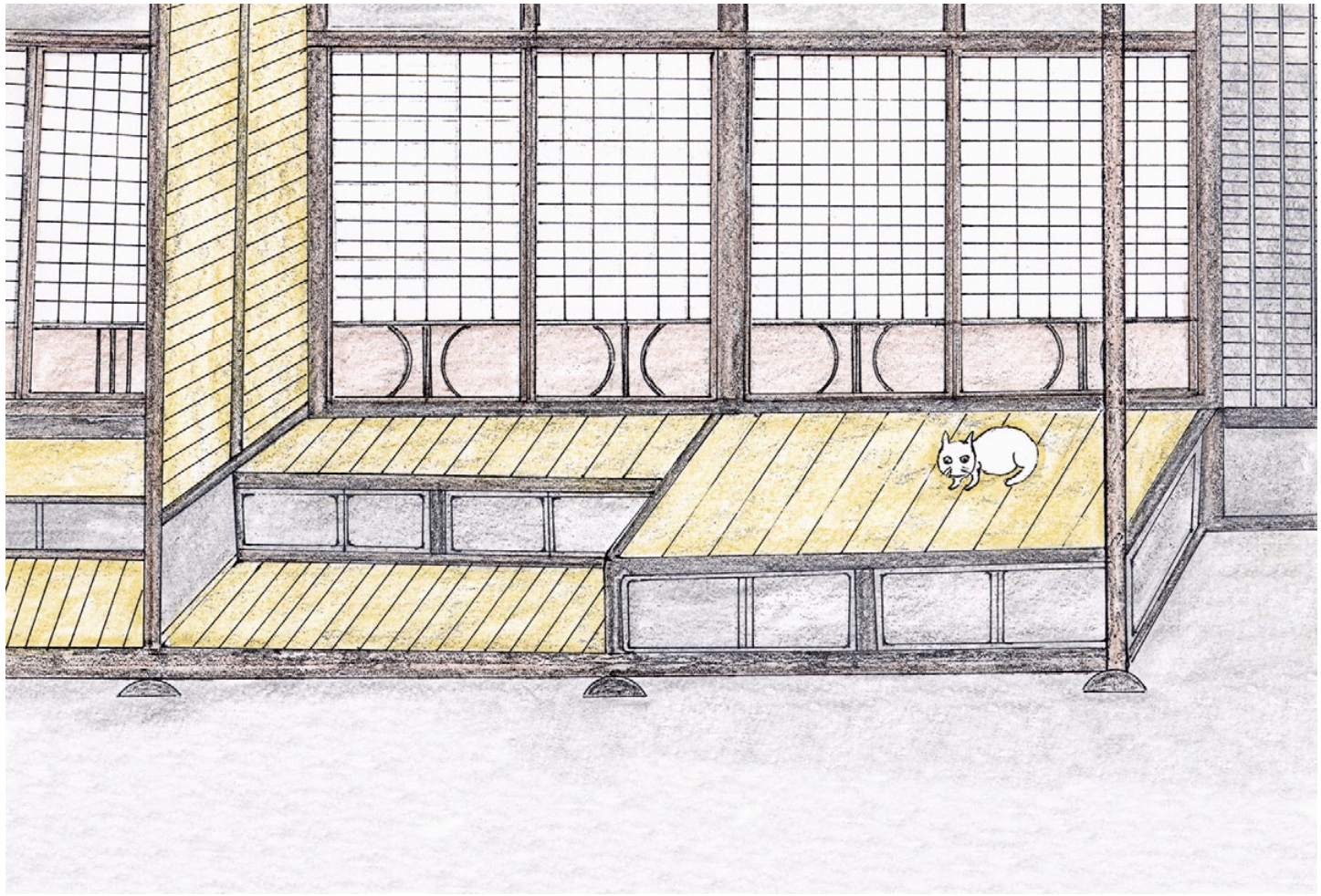
畑はきれいに耕され、種を蒔いたばかりのようです。



006

釣瓶井戸

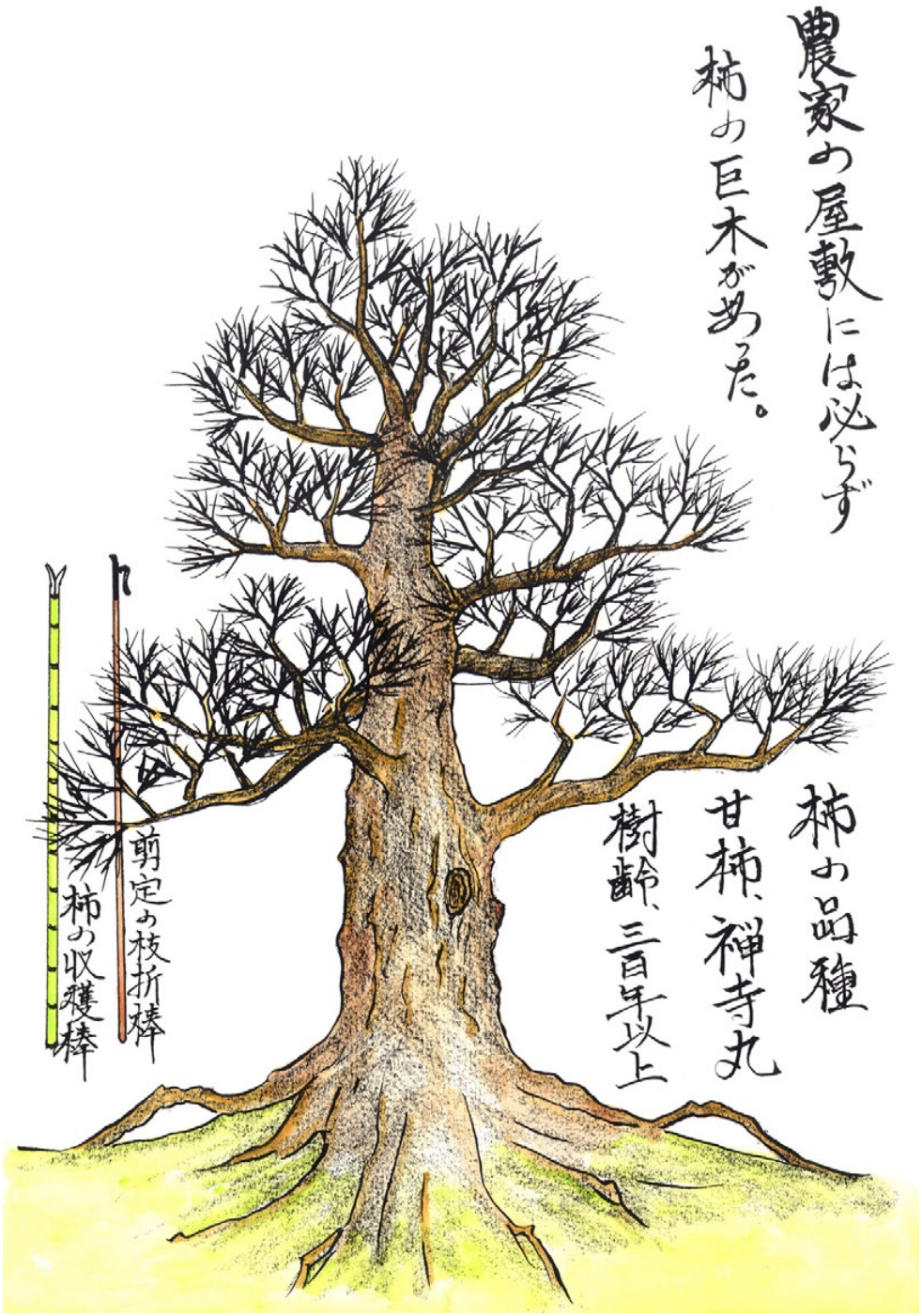
現代のように水道が普及していなかった頃、どの家も井戸を掘り、飲料水にしていました。ケヤキの木を梃子にしていましたが、ケヤキはしっかり根を張り枝も強く重い水を汲み上げるのに役立つ樹木でした。水を汲み上げる時はギッコギッコときしみました。



007

農家の縁側

母屋の縁側は農家にとって応接間でもありました。ここで腰掛けて用件をすませることも多く、時には茶飲み話に花が咲くこともありました。日当たりのよい縁側では猫がよく昼寝をしていました。

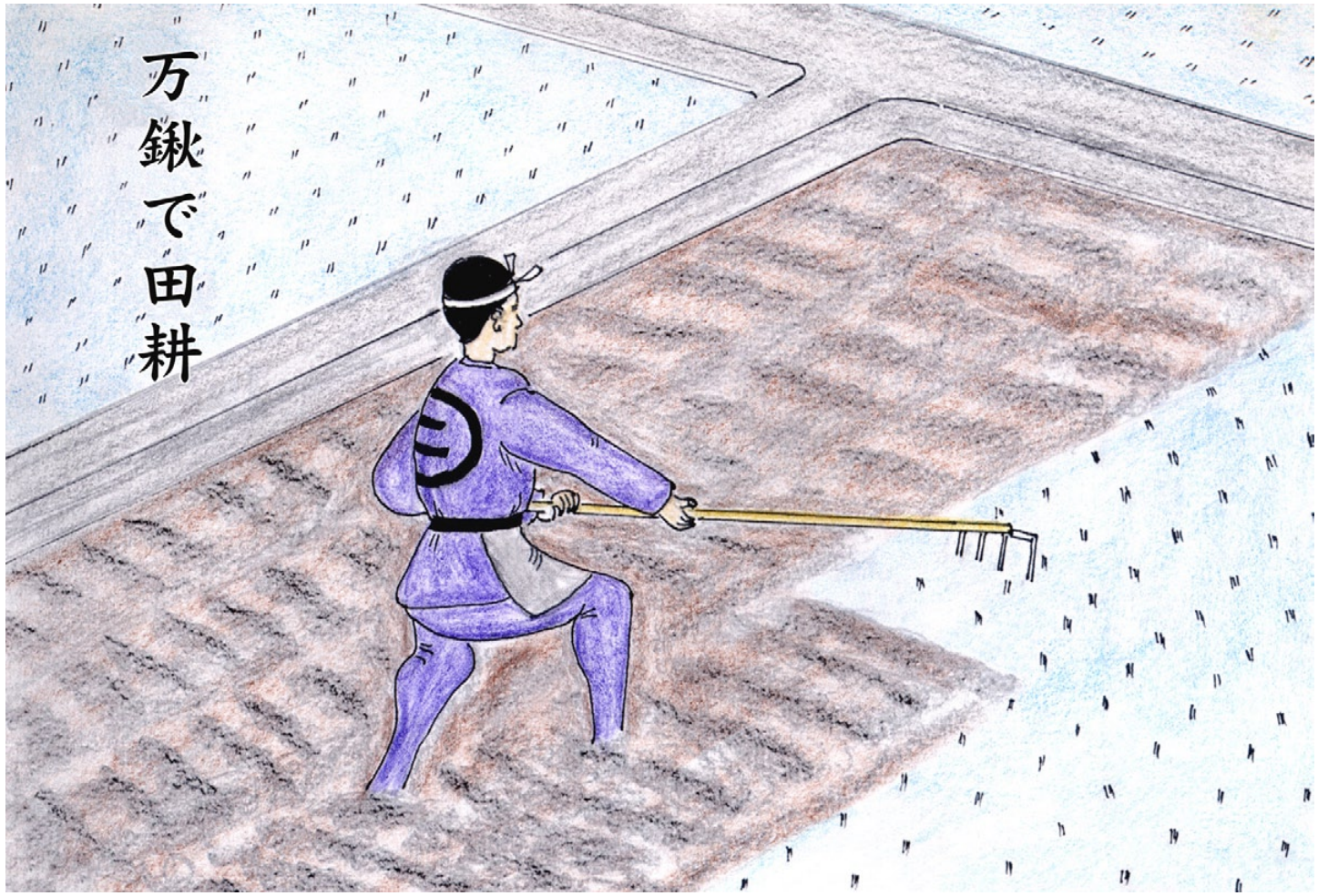


008

柿の巨木

どこの家でも庭に柿を植えていました。柿は甘く、今のようにお菓子の乏しい時代にはたいへん好まれ、吊るして干した柿は接客用のお茶菓子として保存し、たいへん重宝していました。

II　農家の仕事



009：米作り①

田起こし

はじめに農家のもっとも大切な仕事、米作りから話を進めましょう。

春は農作業のスタートの季節です。４月に入ると、まず田起こしをします。冬の間固くなった土をマンノウを使って30センチくらいまで古い稲の株を反転し、土をほぐす仕事です。水田の基礎になるもので、よく掘り返さないとよいお米がとれません。

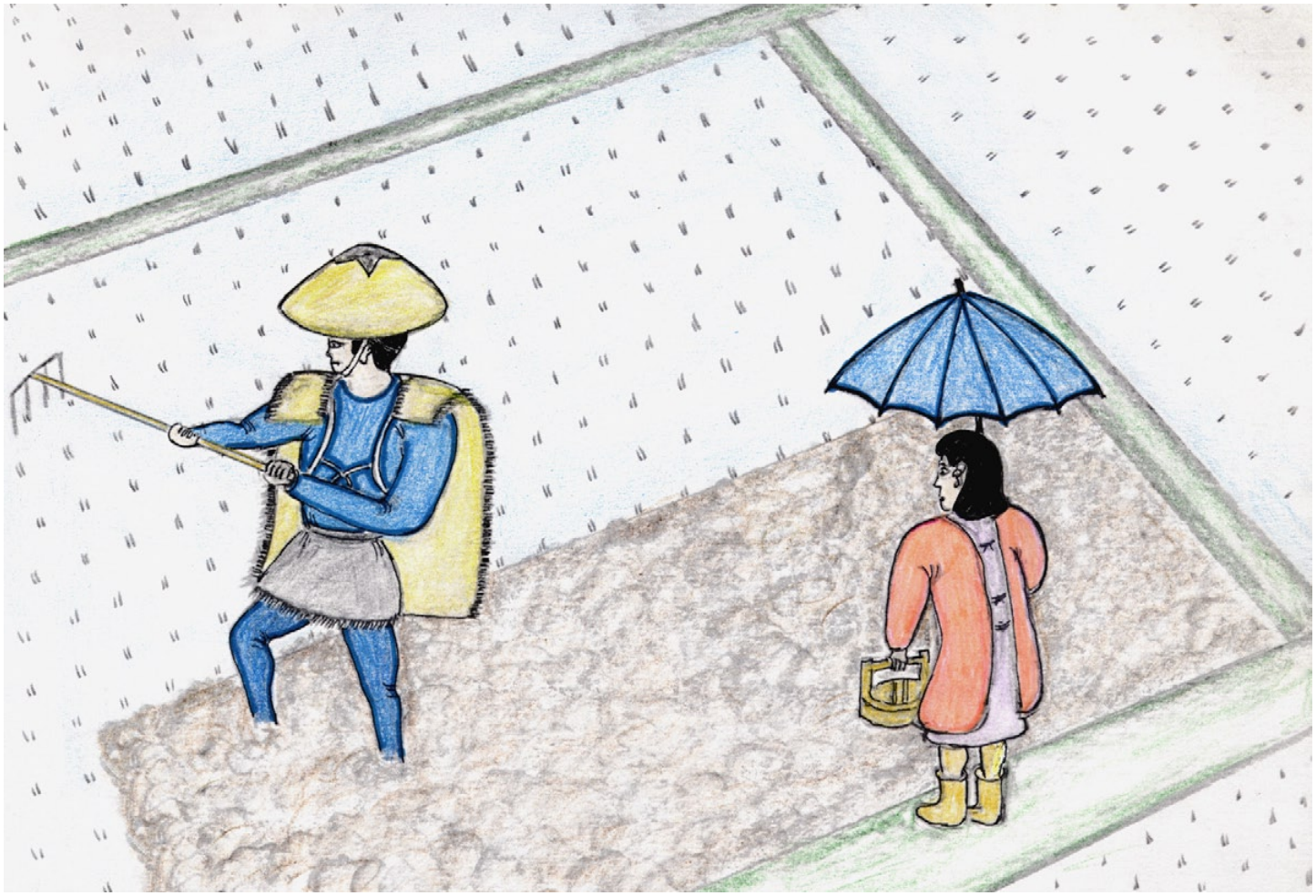
田起しは力のいるたいへんな作業でした。

010：米作り②

共同で田起こし

　米作りは隣近所、親戚どうしで共同で行う作業がいくつかあります。

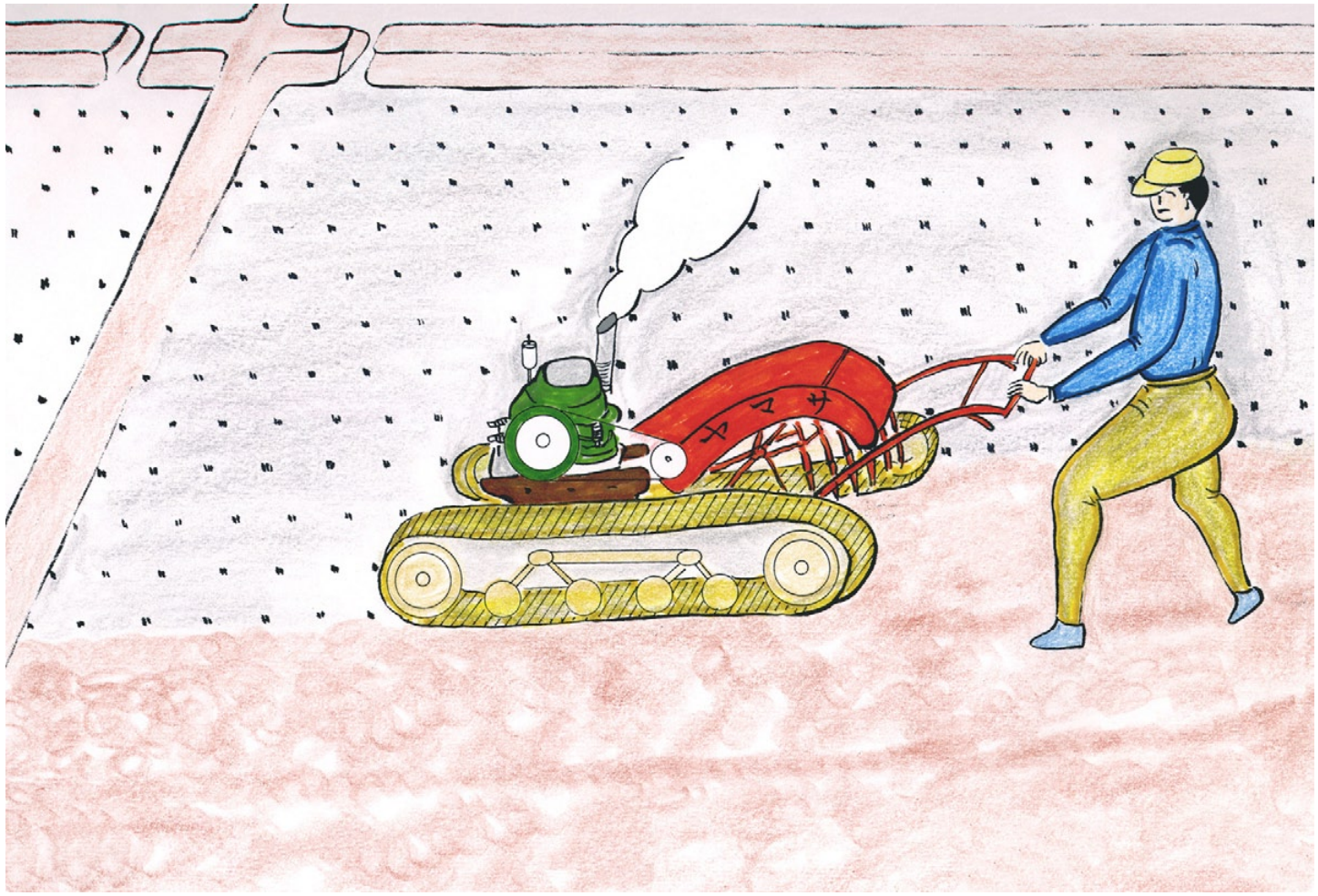
　田起こしもそのひとつです。毎日順番を決めて力を合わせて広い田圃を耕しました。



011：米作り③

雨の日の田起こし

　雨の日でも休めません。休めば仕事が遅れて間に合わなくなるからです。雨具をつけて田起こしをしている夫に妻がお茶の差し入れに来ました。



012：米作り④

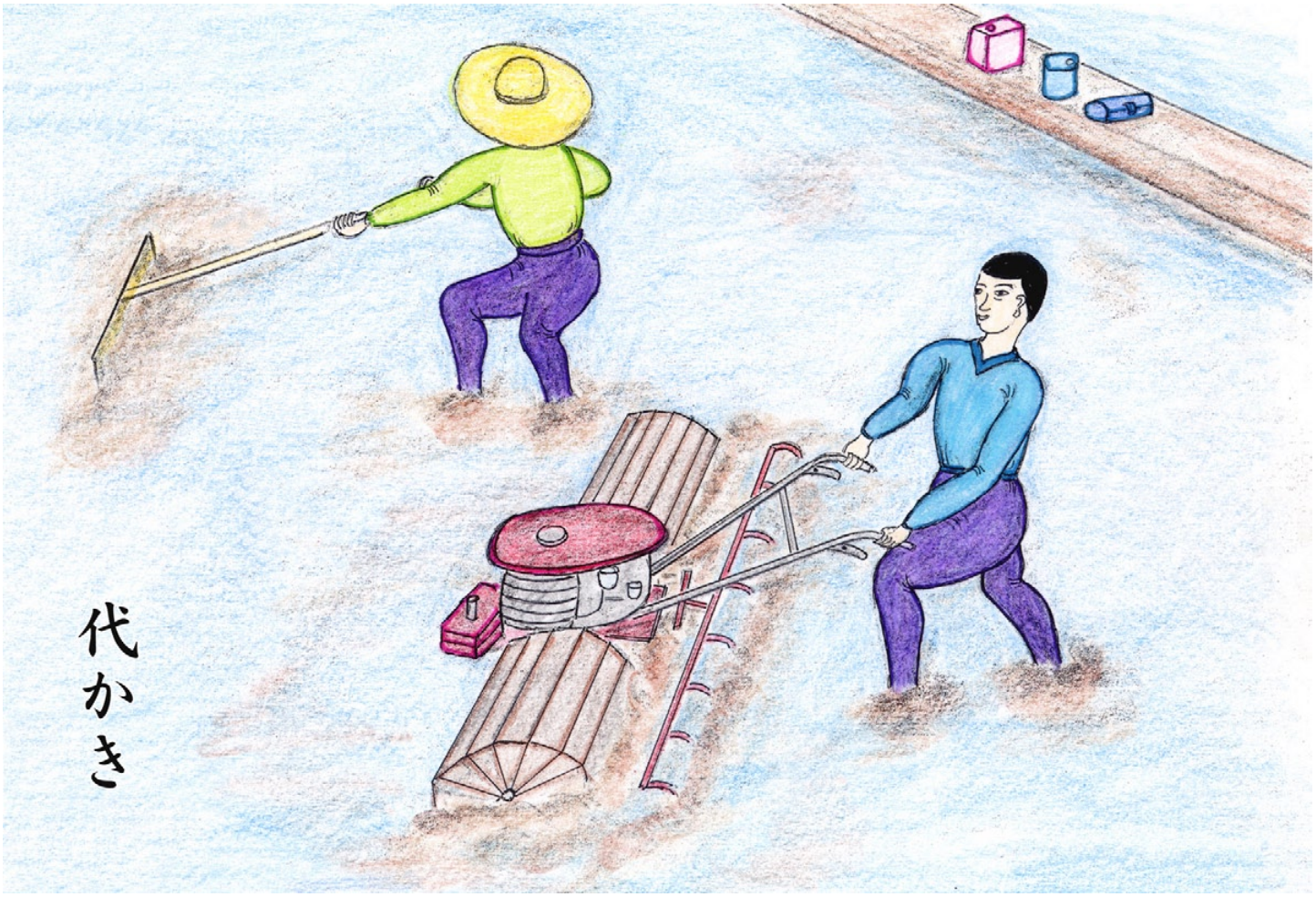
耕運機で田起こし

　田起こしはたいへんな仕事でしたが、やがて耕運機で耕すようになり、作業はずっと早く楽になりました。

013：米作り⑤

牛を使った代かき

田起こしが終わると、田に水を入れ、どろどろに土を溶かし柔らかくします。これを代かきといいます。広い田圃をまんべんなくかきまわすたいへんな仕事で、牛を使って全体をならしました。

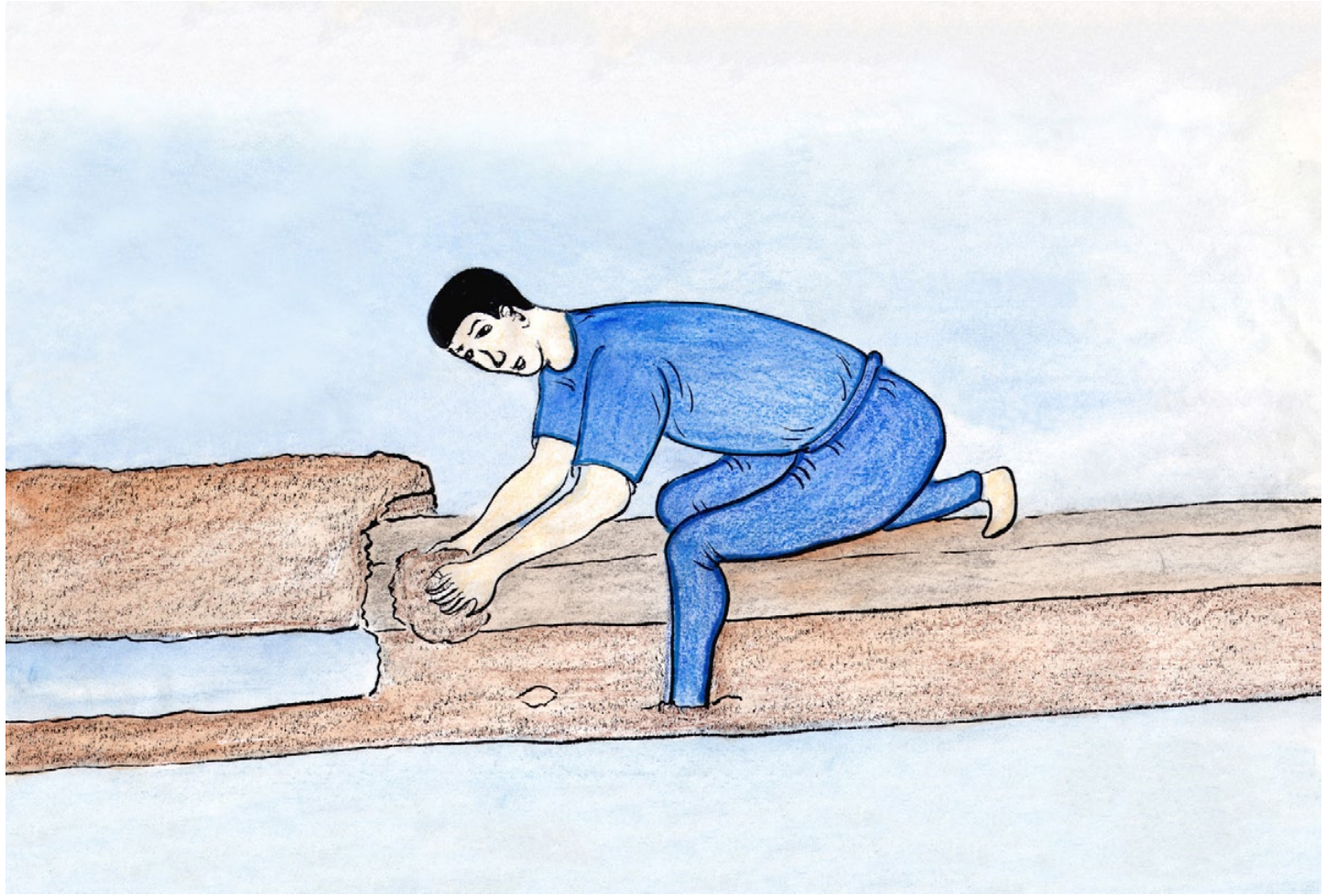


014：米作り⑥

道具を使った代かき

　代かきも道具を使って行うようになりました。耕耘機は一番よく使われ、いろんな作業ができましたので、牛を利用することはなくなりました。

　絵に描いた機械は、丸い筒の中に水車のような羽がついていて、回すとガラガラと音をたて土と水をかき混ぜる仕組みになっています。

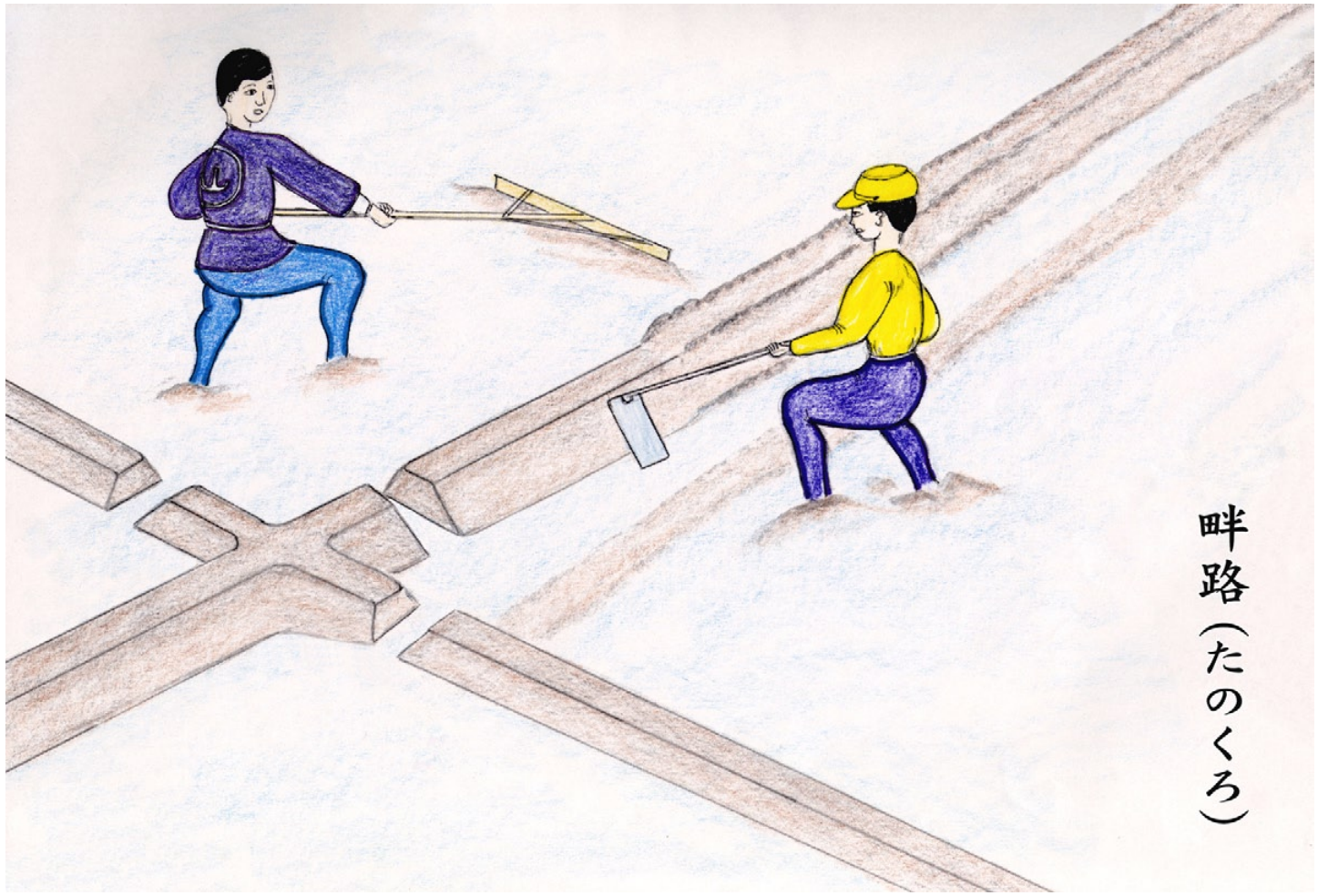


015：米作り⑦

クロヌリ

田の水が漏らないようにする土でできた境をクロといいます。モトグロ（古いクロ）をクワで崩して、その土をクロネカシといって一日放置して水分を含ませ、新しく台状のクロを作ります。

クロとは、部屋の敷居のようなもので、田の区切りです。毎年新しくクロヌリをして、クロの一部を切り、水の入口と出口を作り、水が田の全体に行き渡るようにします。



016：米作り⑧

クロヌリの仕上げ

　クロヌリの仕上げはクワで叩いて固めます。しっかり固めないと崩れてしまいますので、よく叩き、乾けば人が歩けるほどの強固なものになります。

017：米作り⑨

稲の種蒔き

５月の節句の前、種籾を用意します。塩水をはった桶やたらいに種籾をつけ、沈んだよい籾を１週間くらい水につけて発芽を促しますが、これを種つけといいます。

この発芽した種を田の一角に作った苗代に蒔きます。種蒔きは早朝の風のない時間に、種を蒔く人、覆土といって灰をかぶせる人、低圧といって帚で軽く叩き、種を水田になじませる人と役割を分担しながら作業します。

018：米作り⑩

苗取り

種を蒔いて40～45日ほどたった６月中旬頃、苗は20センチほどに育ち、ちょうどよい大きさになります。

苗引きは抜いた苗を直径５センチほどに手際よく束ねて、後ろにポンポンと置いていきます。苗運びの係がそれを篭に入れ、田植えをしている田圃に運ぶのです。短期間の勝負ですから、疲れたなどと言っていられません。

中腰の姿勢は腰が痛くなり、また、長い間水の中に入っての仕事は体が冷え、重労働でした。

019：米作り⑪

畑苗代

　近年は畑で苗代を作りました。稲の成長が早く丈夫に育つといわれました。畑の苗代をハタナエシロといいました。

020：米作り⑫

苗運びと田植え

田植えの風景です。一列に並んで田植えする様子は、今ではあまり見られなくなりました。現代は田植えも稲刈りも全て機械化し、人間は機械を動かすだけになっています。

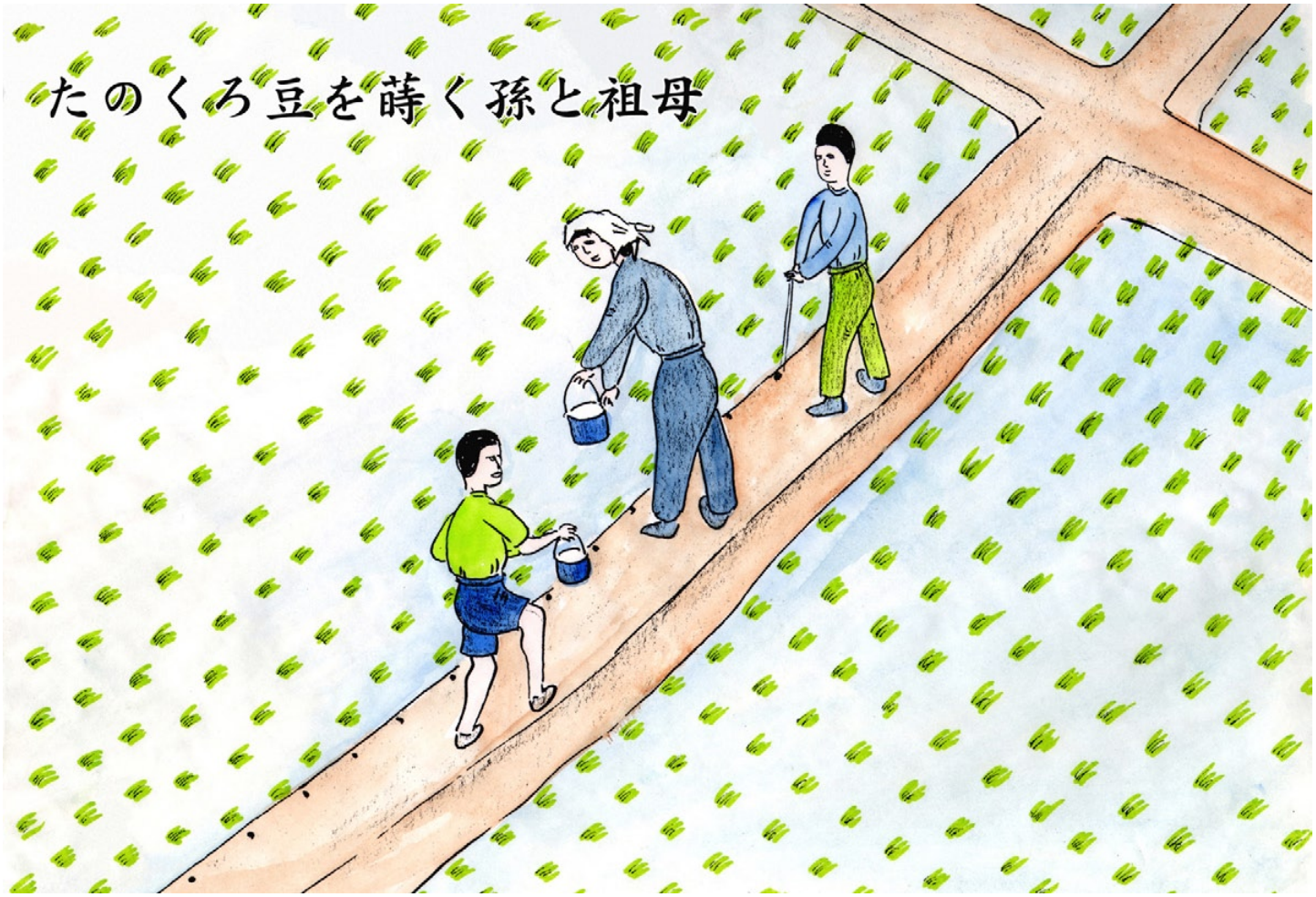
かつては人の手で苗の束から２～３本づつ抜いて真直ぐに植えていきました。苗は柔らかくならした水田に根元をぎゅっと差し込んでいきます。６列から８列ほどを一人が受け持ち、リズムをとって植えていく様子は美しい風物でもありました。

021：米作り⑬

田植え

民謡の田植え音頭には農民の力強さ、豊作への願い、喜びなど、米文化の基本を見る思いがします。田植えは家族総出での作業ですが、隣近所、親戚も駆け付け、お互い共同で作業しあい、早く終えるように助け合っていました。

田植えが終わると赤飯とご馳走を作り、お酒を振る舞って手伝ってくれた人を招いてお祝をしました。

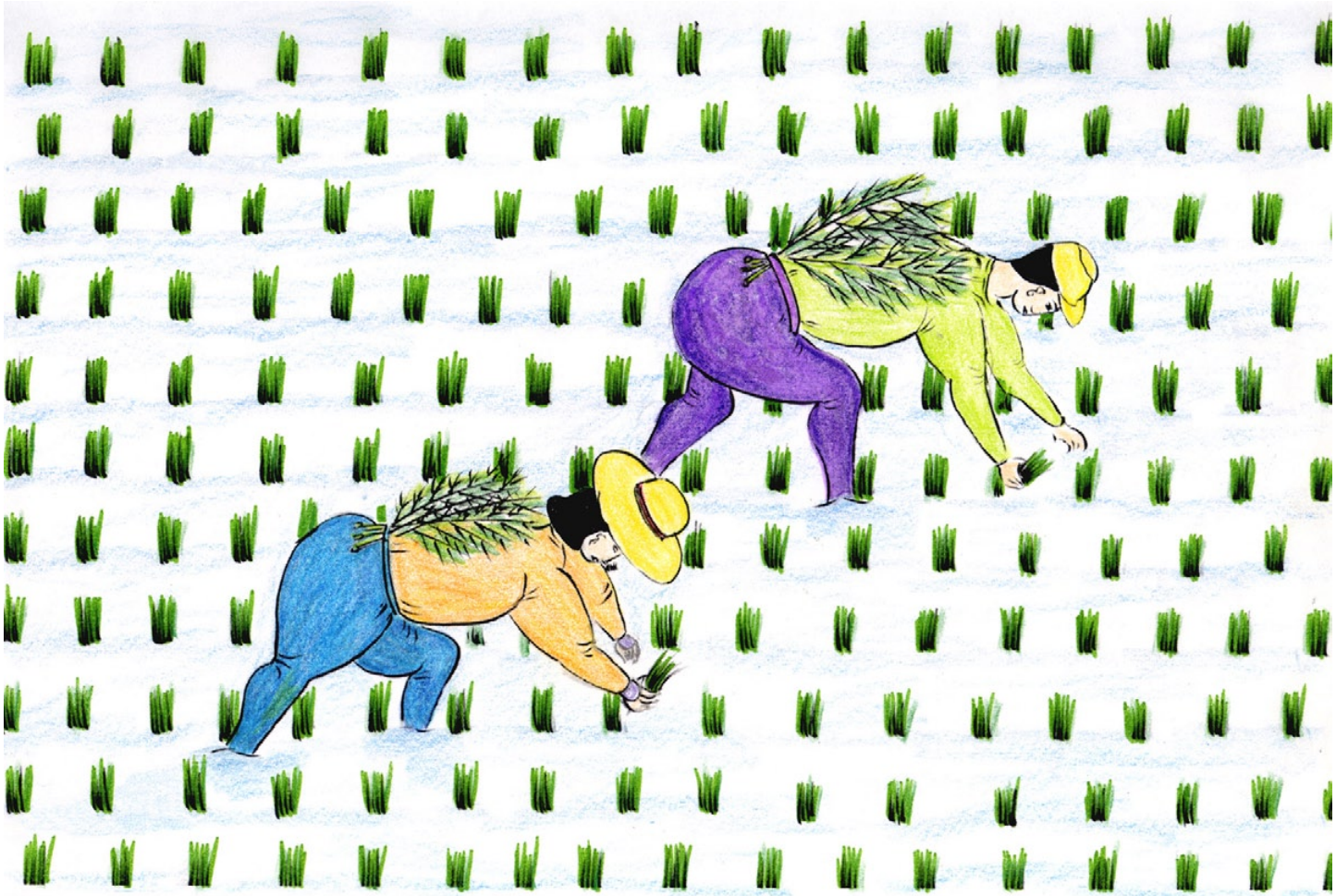


022：米作り⑭

豆の種蒔き

田植えも終わり、水田では稲が根を張り育っていきます。賑やかだった田植えの頃とは違って静かに水が流れています。

気温も上がり初夏を迎えるころ、豆をくろに植えるのは祖母と子供の役目です。くろの両端に一人が穴をあけ、続いて２～３個の豆を入れ、土をかぶせていきます。



023：米作り⑮

田の草取り

稲が育つと同時に雑草も育っていきます。セリ、カヤツリ草、ヒエなどの雑草を取り除くのは大切な仕事です。田植えから稲の穂が出る土用の頃まで、一番草、二番草、三番草と３回も田の草取りをしました。

アブよけに、背中に笹竹をくくり付け、太陽に照りつけられての仕事はたいへんでした。

024：米作り⑯

雨乞い―山田富士に水を担ぐ

水田にとって水は重要です。雨が降らなければ田はひからび、米ができません。そこで雨乞いの行事を行いました。

毎年７月20日から８月にかけての土用の頃、丹沢にある大山阿夫利神社に雨乞いに行き、祈願の水をもらい、土地の水にその水を加え山田富士山に担ぎあげます。

「六根清浄（身も心も清めて悪い因果をふるい落とす、という意味）」

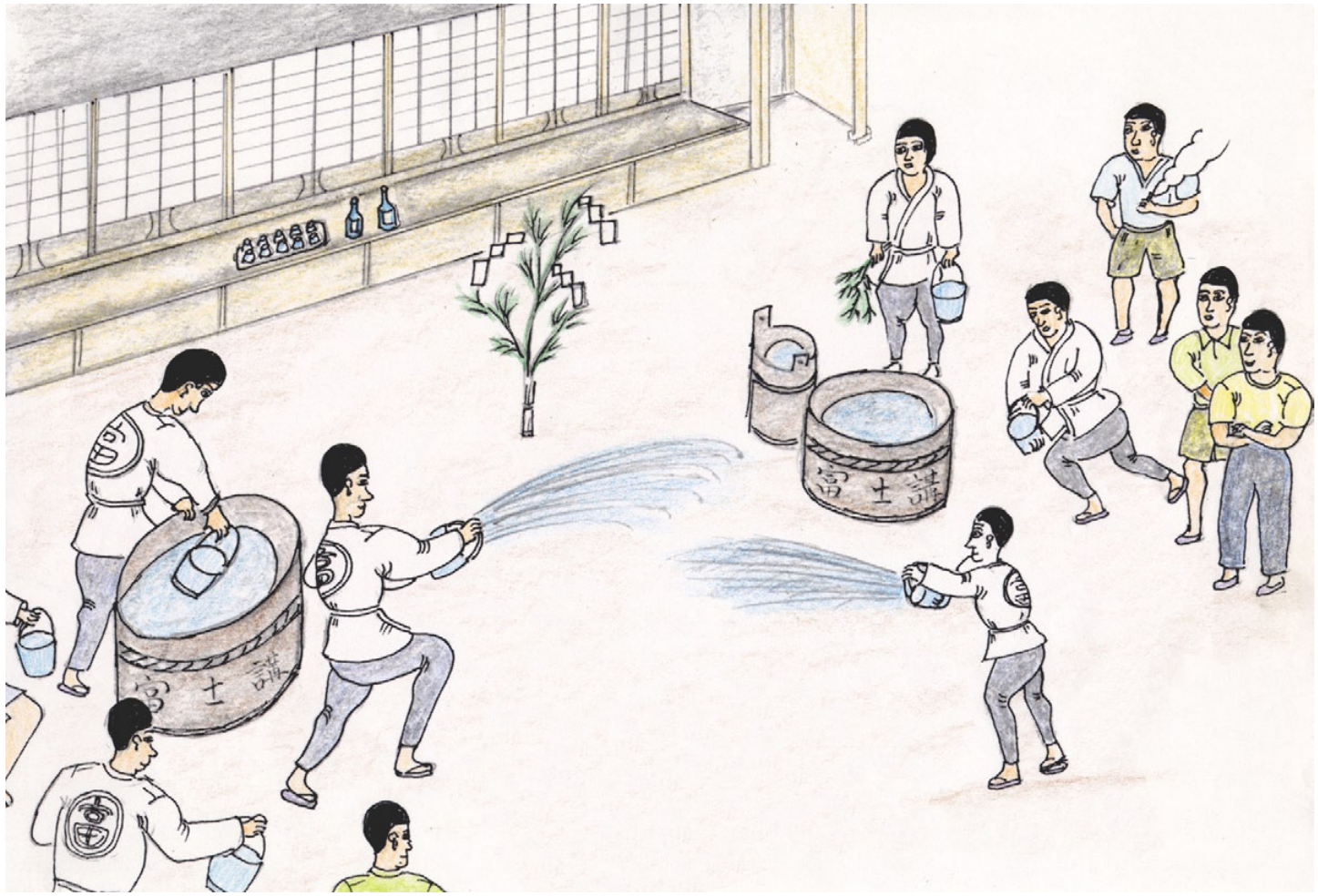
「散華散華（仏を供養して花をまく、という意味）」

と唱えながら登り、山の神に降雨を祈ったのです。

025：米作り⑰

雨乞い―頂上で祈祷

山田富士山の頂上で、担ぎ上げた水を振りまいて雨乞いの祈願をします。自然が頼りの農業では目に見えない神への祈りを忘れませんでした。



026：米作り⑱

雨乞い―水を掛け合う

頂上から戻った村びとは祈願に使った水をお互いに掛け合って祭りを盛り上げました。

村びとの結束の行事でもありました。

027：米作り⑲

お茶の時間―代かきの頃

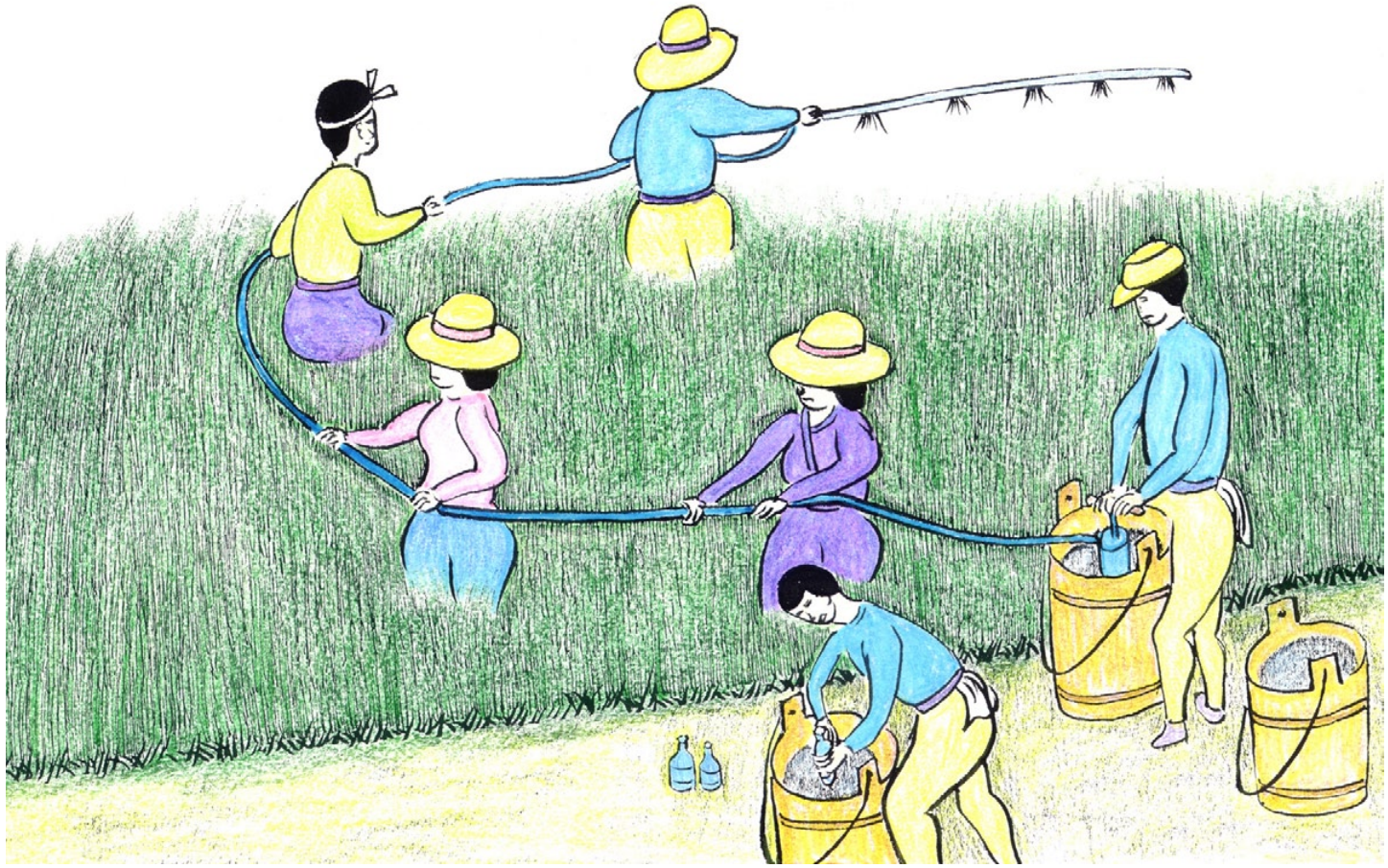
農業は重労働のうえ、朝早くから日暮れまで野良で働く仕事です。体力をつけるために10時と３時のお茶は欠かせません。主婦や子供が田や畑に運びました。

この絵は雨の日のお茶の風景です。妻は傘をさしたまま準備し、夫は立ったままいただいています。

028：米作り⑳

お茶の時間―田の草取りの頃

田の草取りの頃のお茶の時間です。子供をおんぶした主婦が通りかかります。側にはお茶を届けに来た子供たちがいます。手を振る農夫。腰を曲げての様子に草取りの疲れがうかがえます。厳しい労働にとってお茶の時間は楽しみでした。



029：米作り㉑

共同で薬剤散布

戦後農業は機械化、薬剤の使用などで大きく変わりました。特に薬剤の散布は病害虫の駆除に威力を発揮しました。しかしそれは生態系を狂わし魚や昆虫を絶滅するばかりか、人間にとっても健康を害するものでした。

ここに描かれた薬剤散布の光景はその初期の頃で、強い薬剤を使用したため気分が悪くなる人もいました。その後あまり害のない薬剤が開発され、魚や昆虫も再び見られるようになってきました。

030：米作り㉒

稲刈り

春一番の田起こしから始まった米作りはいよいよ収穫の時を迎えました。夏の間、ぐんぐん成長した稲は穂を出し花を咲かせ、実った種は次第に重くなり、秋にはまるでおじぎをしているように穂が垂れ下がります。

青々としていた稲は黄色になり、田圃一面が黄金の波になります。

この時期には台風の被害が一番心配です。10月の秋晴れの頃、稲刈りが行われます。朝から家族総出でお弁当持参で刈り取ります。刈り取った稲は一束づつまとめて、竿にかけて干します。

031：米作り㉓

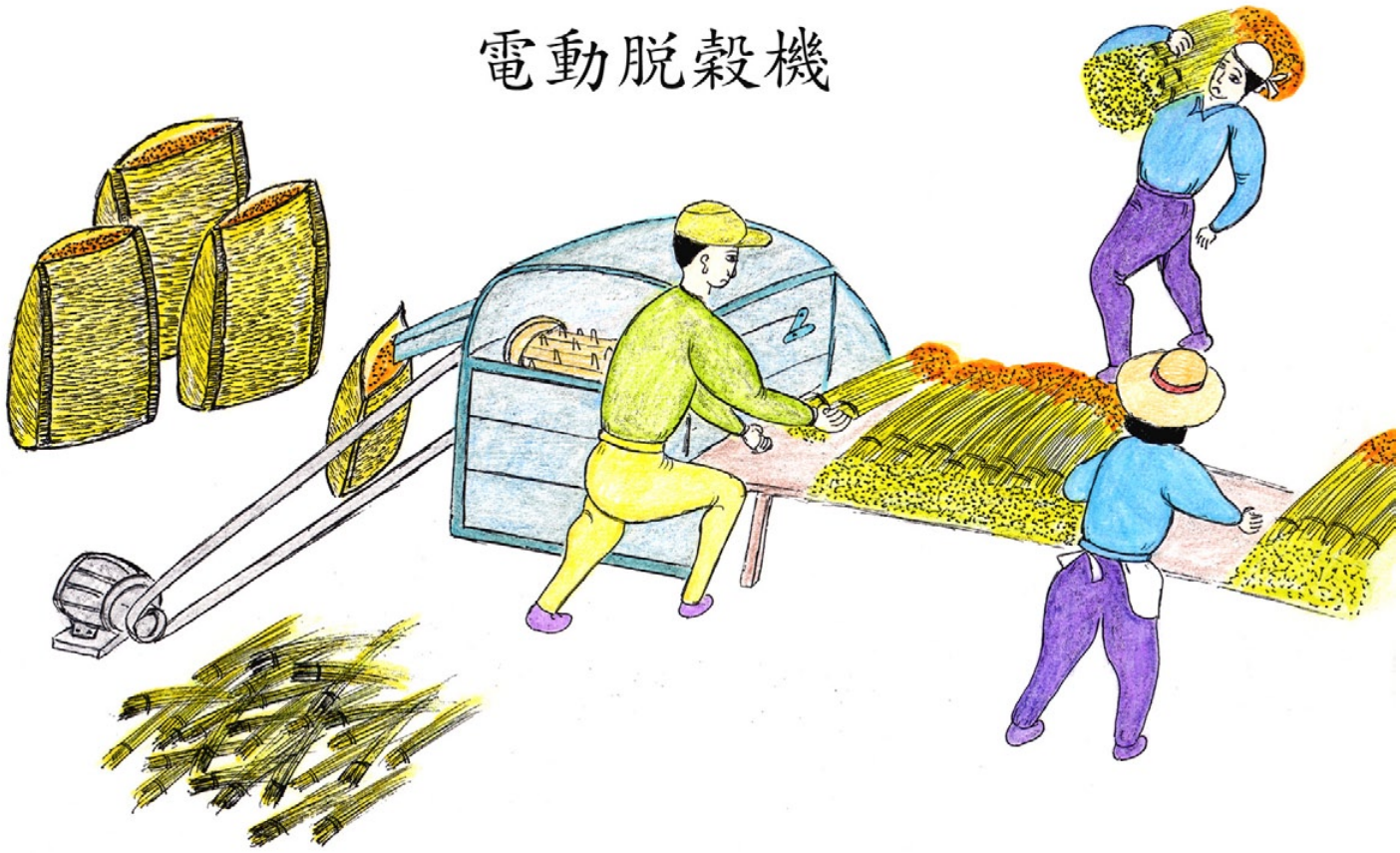
かなこぎを使った脱穀

　干した稲は脱穀機で藁から籾をとります。昭和の初期にはまだ金穀（かなこぎ）を使っていました。稲束を運ぶ人、籾をとる人、とった籾をふるいにかけて俵に詰める人と分担して作業を進めました。

032：米作り㉔

足踏み機を使った脱穀

　その後足踏み脱穀機が普及し、作業はずっと早くなりました。



033：米作り㉕

動力を使った脱穀

昭和30年頃には動力脱穀機が出ました。今は稲刈りから精米まで一貫してできる機械が普及していますが、当時は動力脱穀機だけでもたいへんな進歩でした。

034：米作り㉖

籾（もみ）の乾燥

取り出された籾はむしろに広げて乾燥します。よく乾燥しないと腐食の原因になってしまいます。

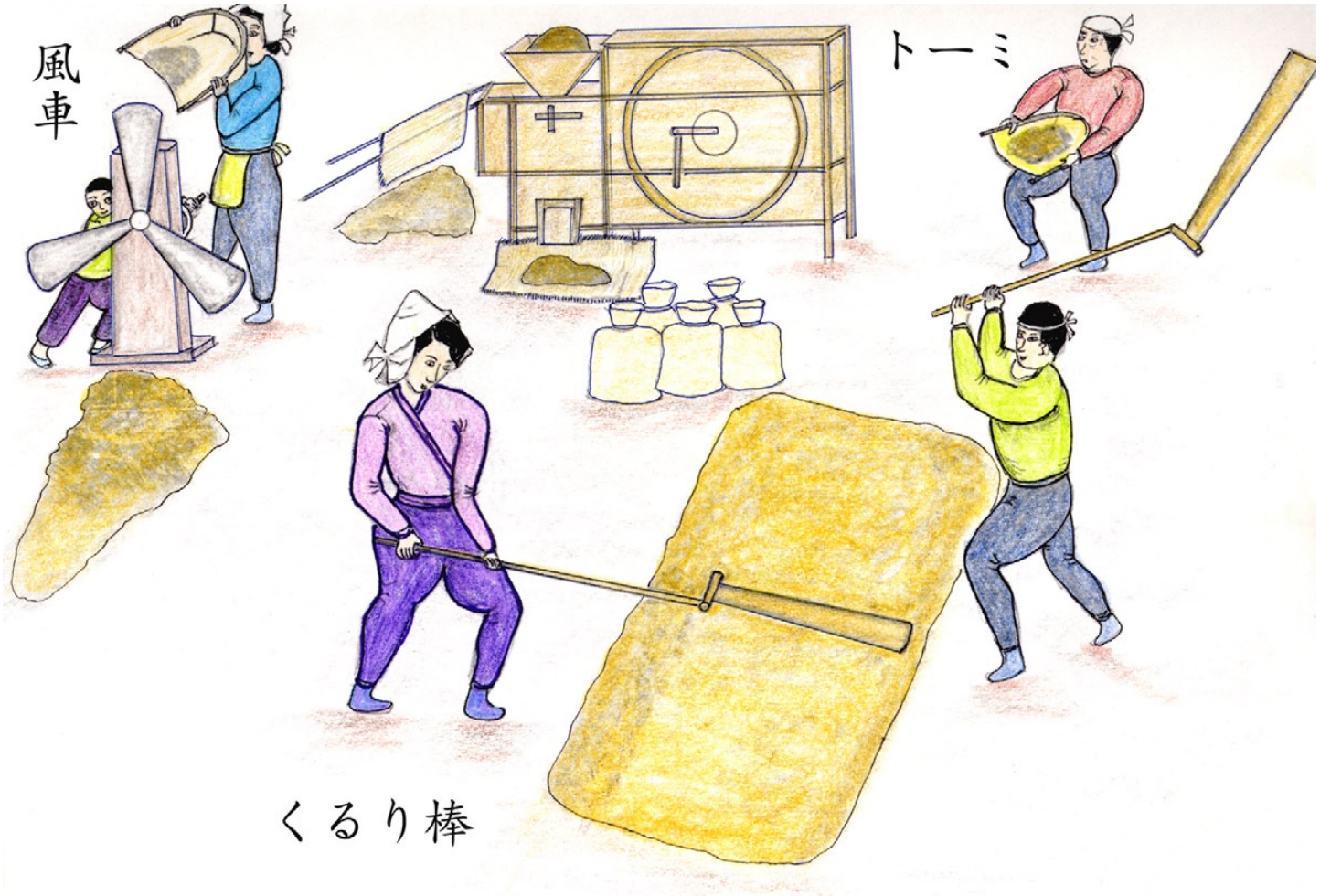
広い庭に何枚も広げたむしろにまんべんなく太陽があたるようにていねいにのばしていきます。

035：米作り㉗

くるり棒で籾(もみ)を叩く

　乾燥した籾を籾と籾殻に分けるため、くるり棒で叩きます。くるり棒は柄の先が廻るようになっていて、ちょうどよい力があたるようになっています。

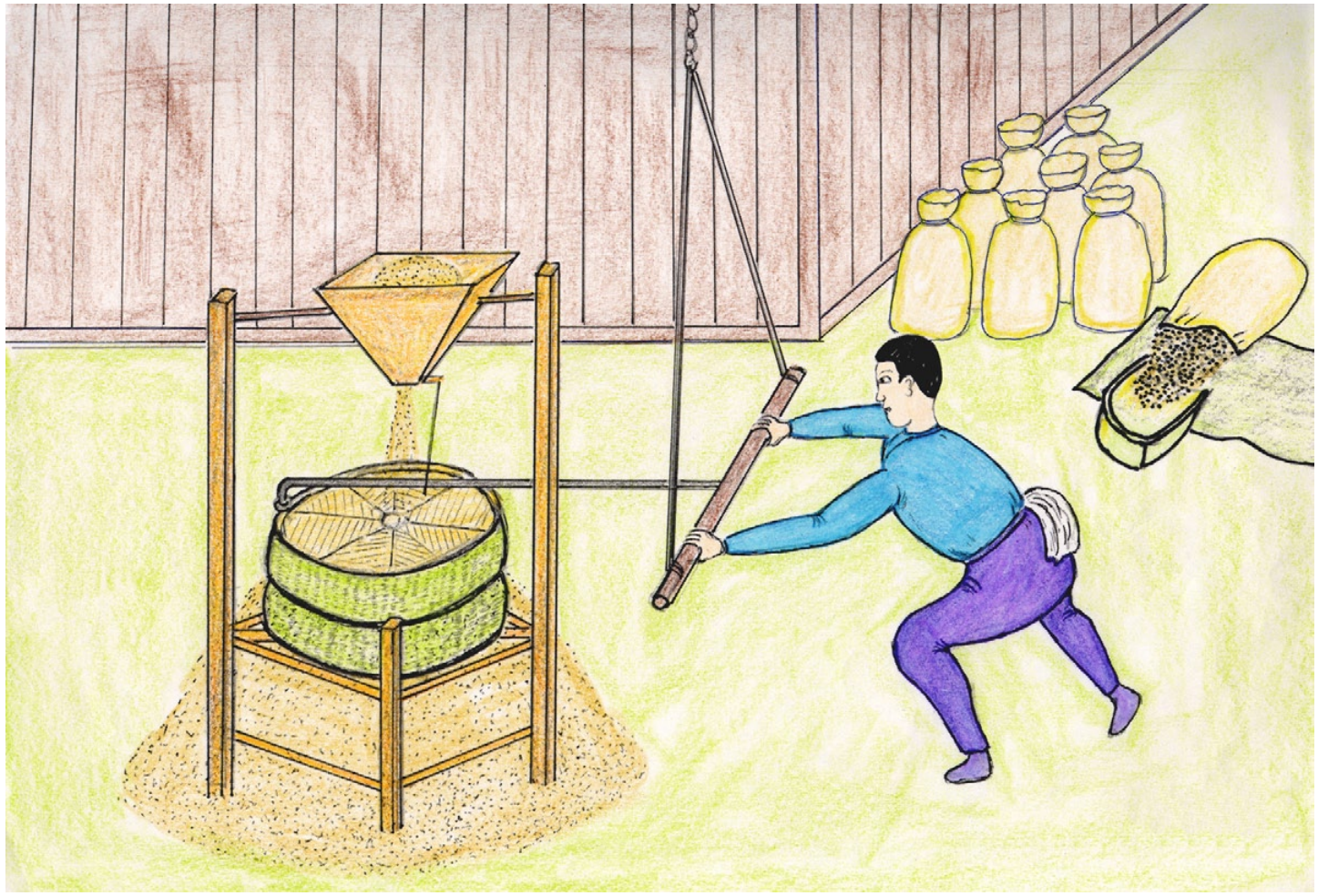
　くるり棒は打ちなれないと肘をよく打ってしまい、けがをすることがありました。



036：米作り㉘

トーミや風車で籾殻を選別

　叩いて籾と籾殻に分離したものはトーミや風車を使って軽い籾柄を飛ばし、籾を取り出します。ることがありました。



037：米作り㉙

かる臼で玄米に

籾殻の着物をとられた籾は、まだ糠着物を着ています。

絵は上にある入れ物から少しづつ臼の中央の穴に籾を落とし、ゴロゴロと廻る臼を通って米が周囲に落ちているところです。これで玄米ができます。

038：米作り㉚

まんごくで玄米の選別

　次はまんごくを使って籾殻（もみがら）と玄米を分けます。玄米は米俵に入れます。

039：米作り㉛

一升瓶で精米に

　玄米はまだ胚芽などが残っていますので、白米ではありません。

　絵は特に戦時中の食料の乏しい時に、農家が精米した時の様子です。一升瓶に玄米を入れて棒でつき、白米にしました。

040：米作り㉜

藁（わら）の保存

藁は、干して、さまざまな用途に使われました。刈り取った後の田圃に稲藁を積み重ねたものを稲藁ぼっちといいました。子供たちがかくれんぼして遊んでいます。

041：米作り㉝

縄ない

　米の収穫も終わり、農閑期の夜なべ仕事に縄ないがあります。子供は藁叩きの手伝いをさせられました。よく叩いて柔らかくした藁は丈夫な縄のもとになるので、叩き方を親から注意されたものです。

042：米作り㉞

米俵作り

　米を入れる俵も藁で作ります。俵編み機を使って胴体を作り、産俵（さんだわら）編みでは蓋の部分を作ります。産俵作りは腰を極端に曲げて作るので、大変でした。

　戦前は俵に国の検査があり、検査合格の大きな印を押してもらわないと米を入れることはできませんでした。俵に米を入れると、１俵は４斗（65キロ）の重さになります。昔の人はそれを担げないと一人前といわれませんでした。

043：米作り㉟

米俵の積み込み

　最後の仕事は米の供出です。それぞれの農家で作った米は、農協の倉庫に積み込まれました。積み込み作業は各部落に当番で廻ってきましたが、たいへんきつい仕事でした。農協に納められた米は国に納められます。

044

野菜の苗床作り

　米作りのかたわら、野菜作りもしなければなりません。春先、庭に野菜の苗床を作ります。今ではビニールハウスですが、昭和の初期頃は藁で囲って油紙を貼った蓋をした苗床に、さつまいも、トマト、ナス、キュウリなどの種を蒔き、10センチほどに育ってから畑に植えました。中はぽかぽかと温かく、よく育ちました。

045

山の畑に肥料や水を運ぶ―春

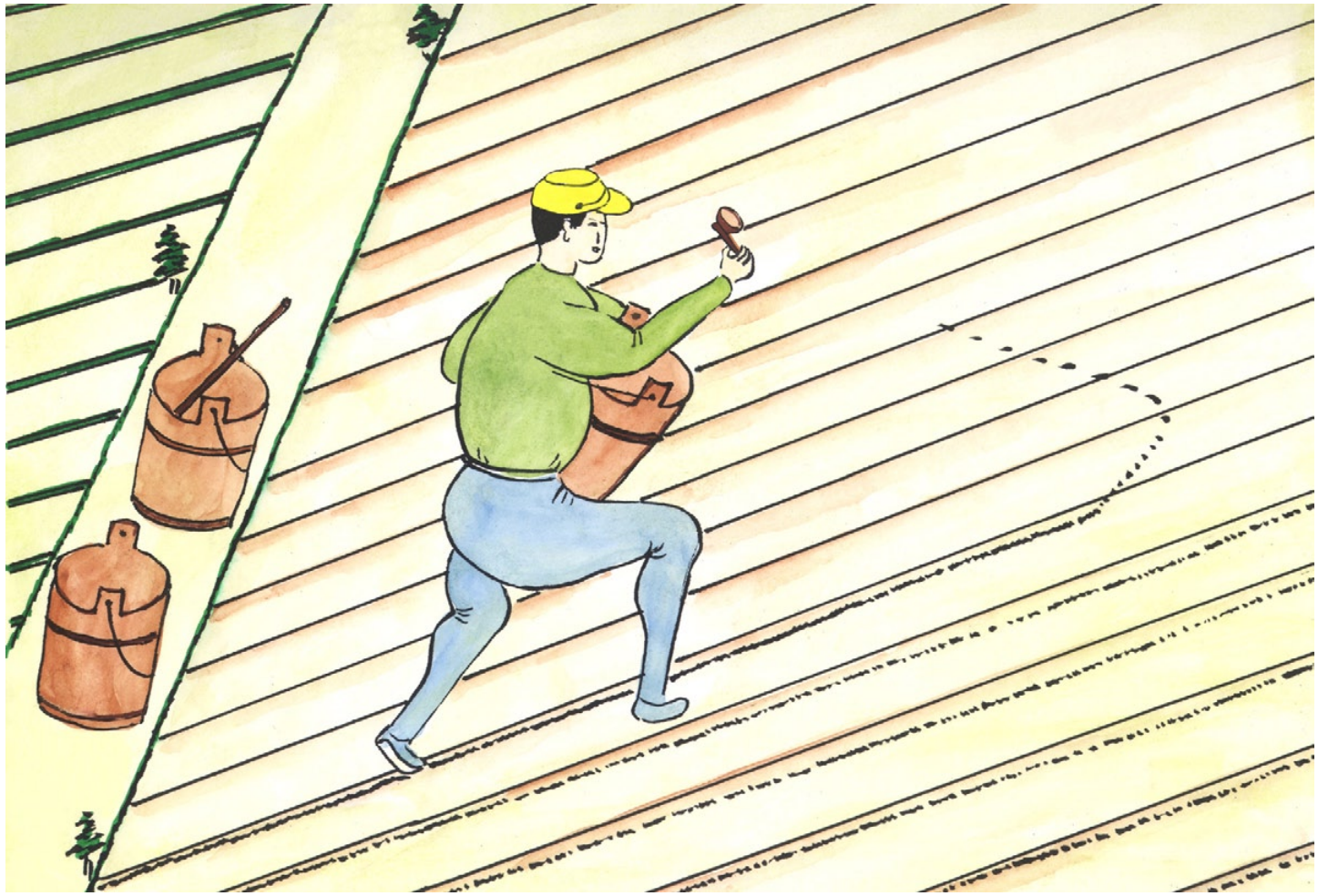
作物を植えても水や肥料をやらなければいい作物はできません。昭和の中ごろまでは町の家を廻り屎尿をもらい、それを肥料にしていました。

絵は春の季節。畑にはまだ作物は伸びていません。農道を水や肥料を担いで主人が登っていきます。山の畑は坂道を登って担ぎ上げるのでたいへんでした。ちました。

046

山の畑に肥料や水を運ぶ―秋

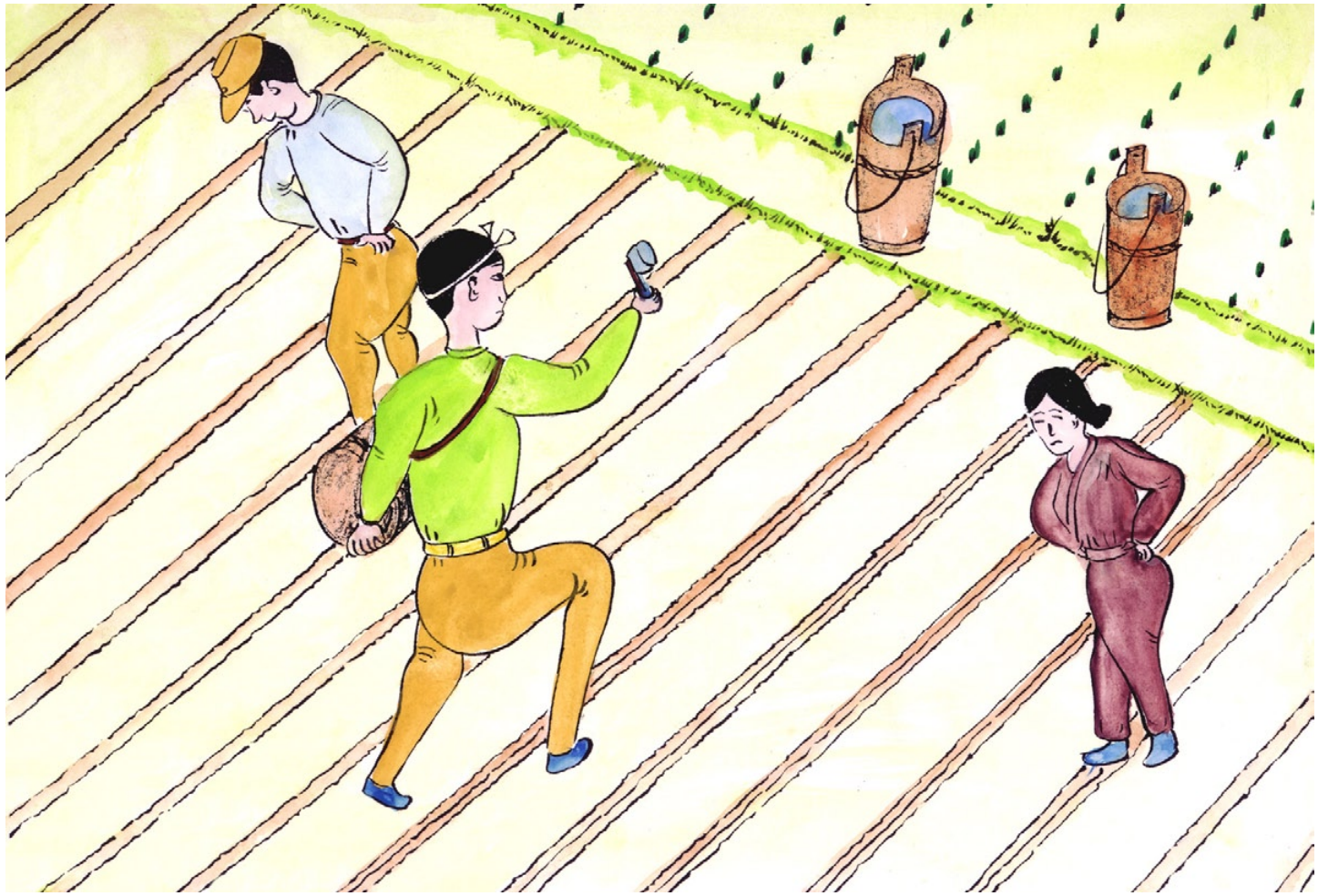
この絵は小さな稲藁ぼっちが描かれているので、秋の風景です。畑には麦が芽を出しています。主人が肥料を担いでいます。



047

野菜の種蒔き

野菜の種蒔きです。春先は苗床を作って育てますが、気温のあがる初夏以降は直接畑に蒔きます。桶に種と肥料を混ぜたものを畝（うね）に沿って蒔いていきます。



048

蒔いた種を踏む

蒔いた種を軽く踏み付けていきます。種が風に飛ばされたり、雨に流されたりしないで、土にしっかり根づくように押さえていきます。

049

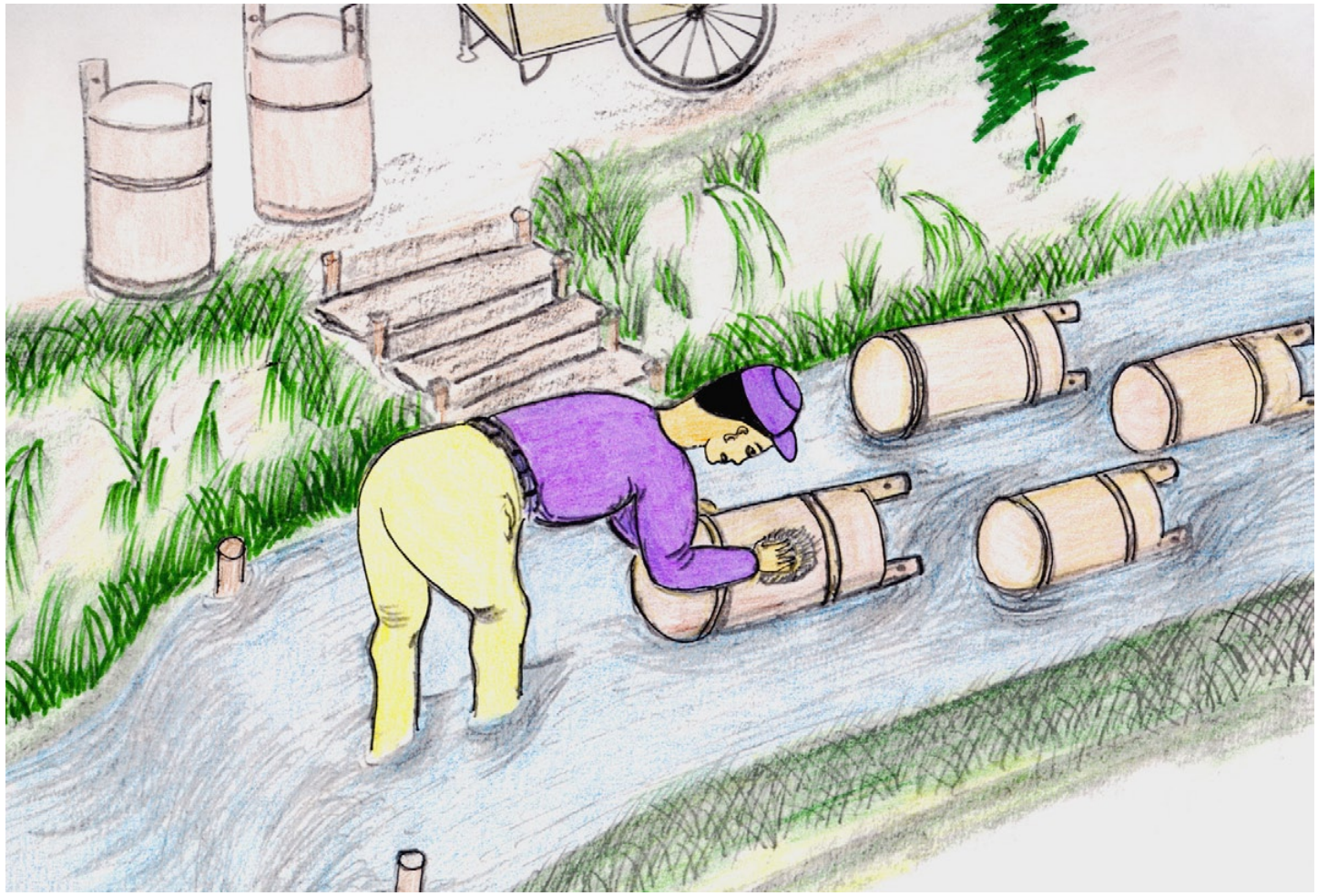
家族総出で農作業

　種を蒔く主人、踏み付ける主婦、肥料を運ぶ姉妹。畑の傍には茶道具が置いてあります。農繁期は家族総出で作業をしました。

050

肥料担ぎをする姉妹

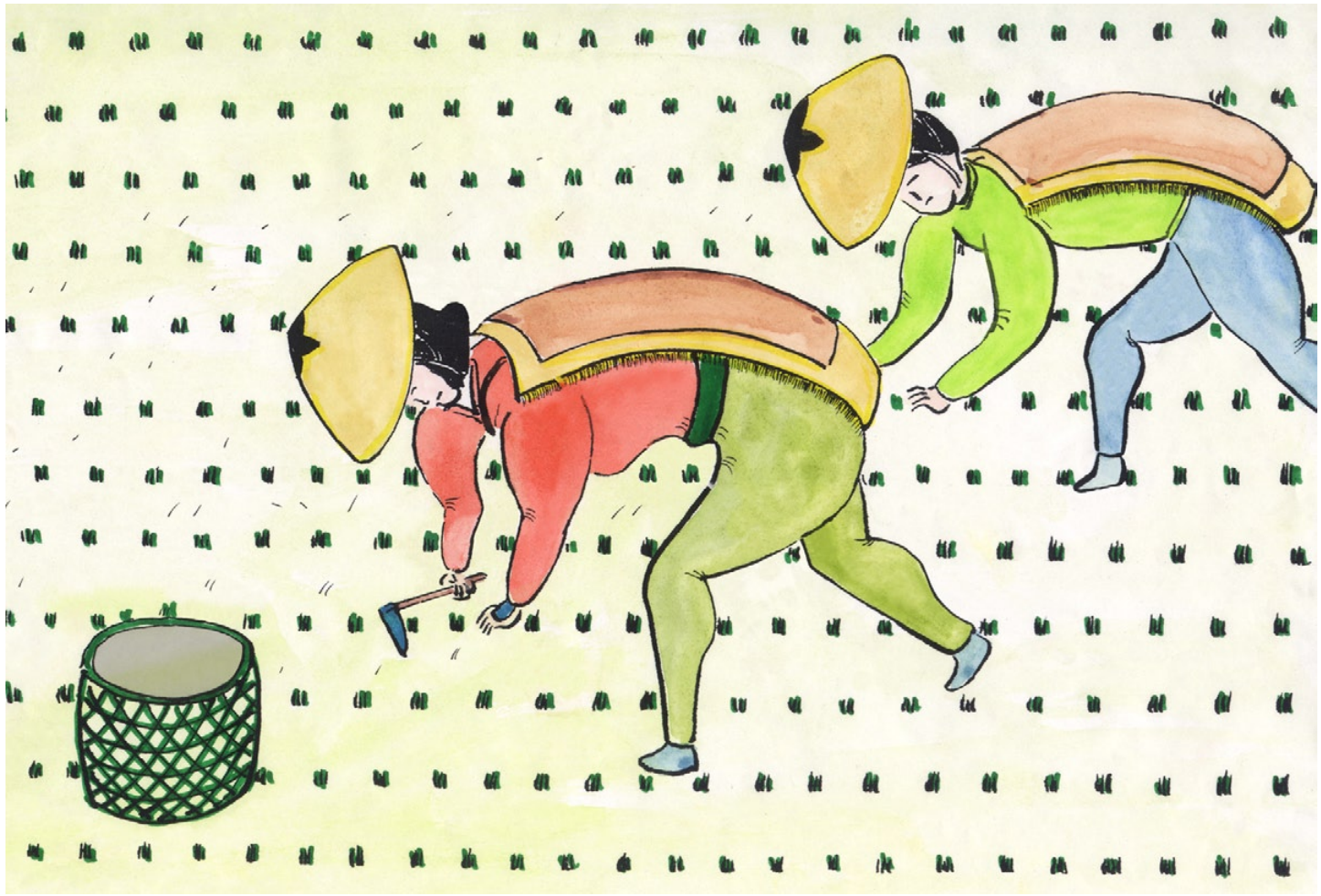
「山の畑に肥料を運ぶように…」というお父さんからの言い付けを守る姉妹。小さな子供はお茶や食事を届ける仕事をいいつかります。



051

農具の手入れ

　農具の手入れも大切な仕事です。汚れた桶（おけ）は川で洗って手入れし、大切に使いました。



052

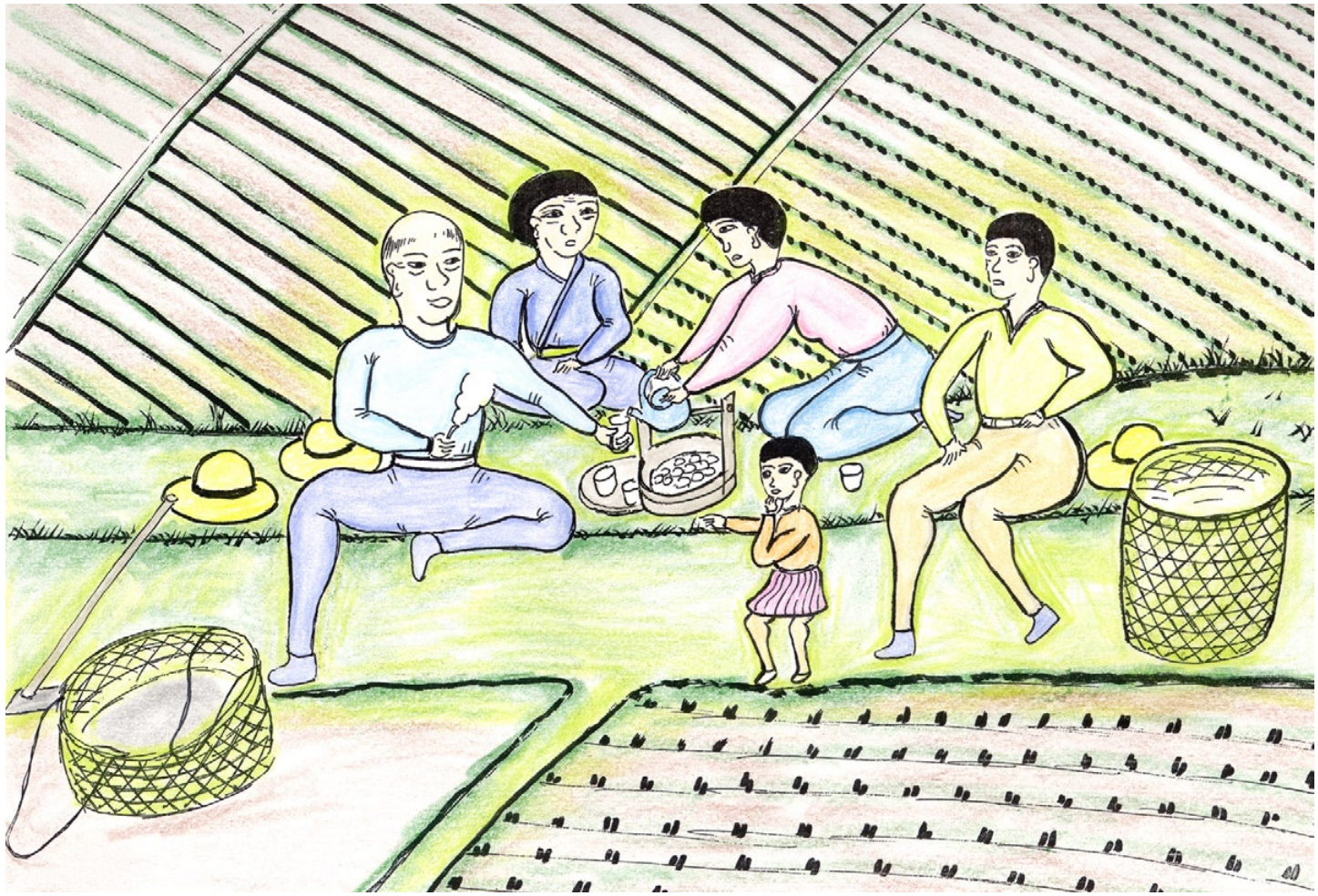
畑の草取り

　畑の草取りもしなければなりません。雨の日には笠をつけ、蓑を着て作業をします。

053

農作業の合間の昼寝

木の葉がちらほら落ちる秋の昼下がり、ぽかぽかと太陽があたる土手での昼寝は気持ちのよいものでした。昭和中ごろまで横浜線では蒸気機関車が走り、中山駅の方向から汽笛が聞こえてきました。遠くの汽笛を聞きながら、時間が止まってほしいと思うひとときでした。



054

畑で一服―お三時

　畑でのお三時です。お茶をいただき、タバコを吸って一息入れると、また農作業です。家族みんなでお茶をいただくのは楽しいものでした。

055

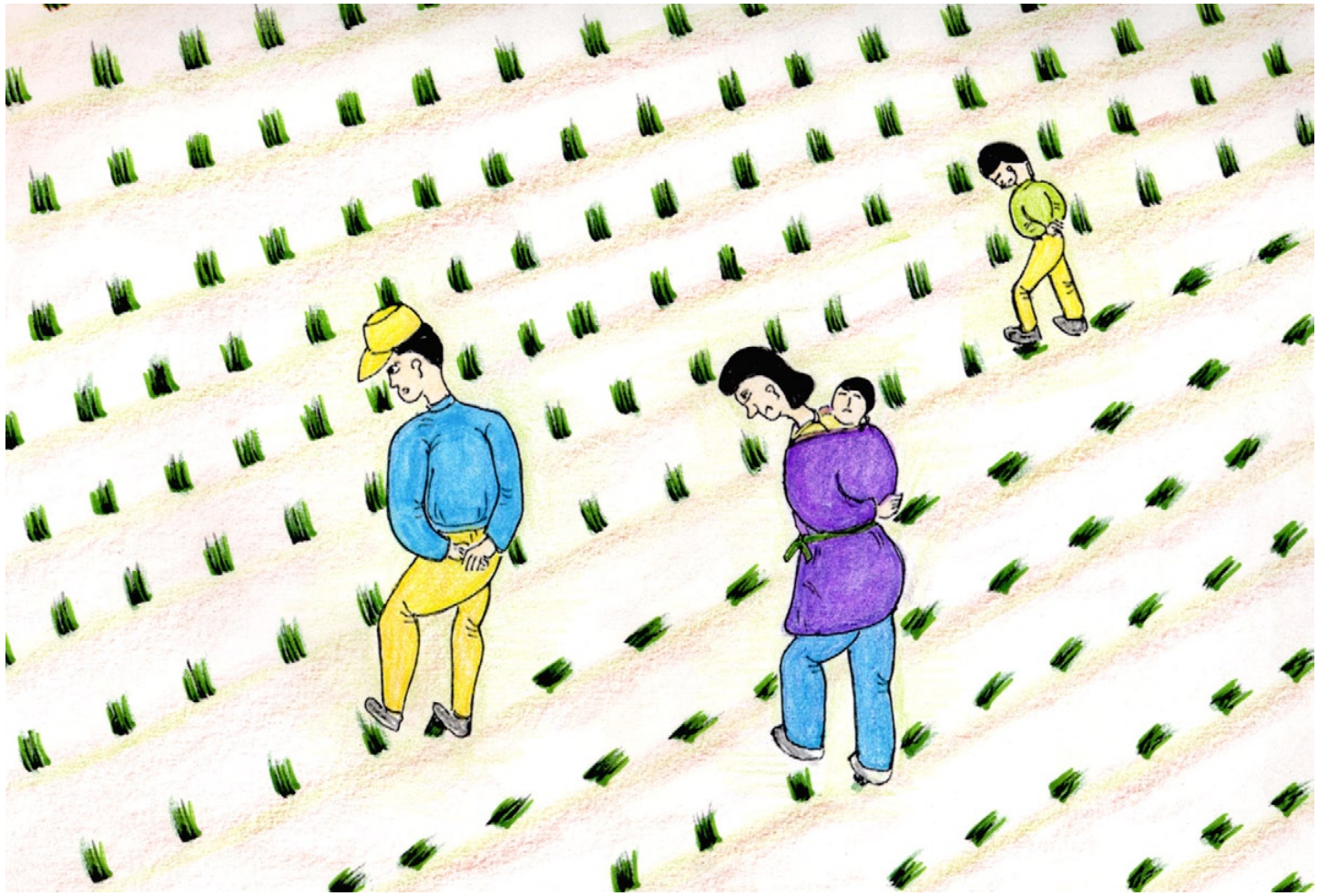
さつまいもの収穫

　春に植えたさつまいもは秋のはじめには収穫できます。１本の蔓からたくさんの芋がとれます。主人が重そうに運んでいます。農道にとめたトラックに積み込むのです。

056

さつまいもの貯蔵

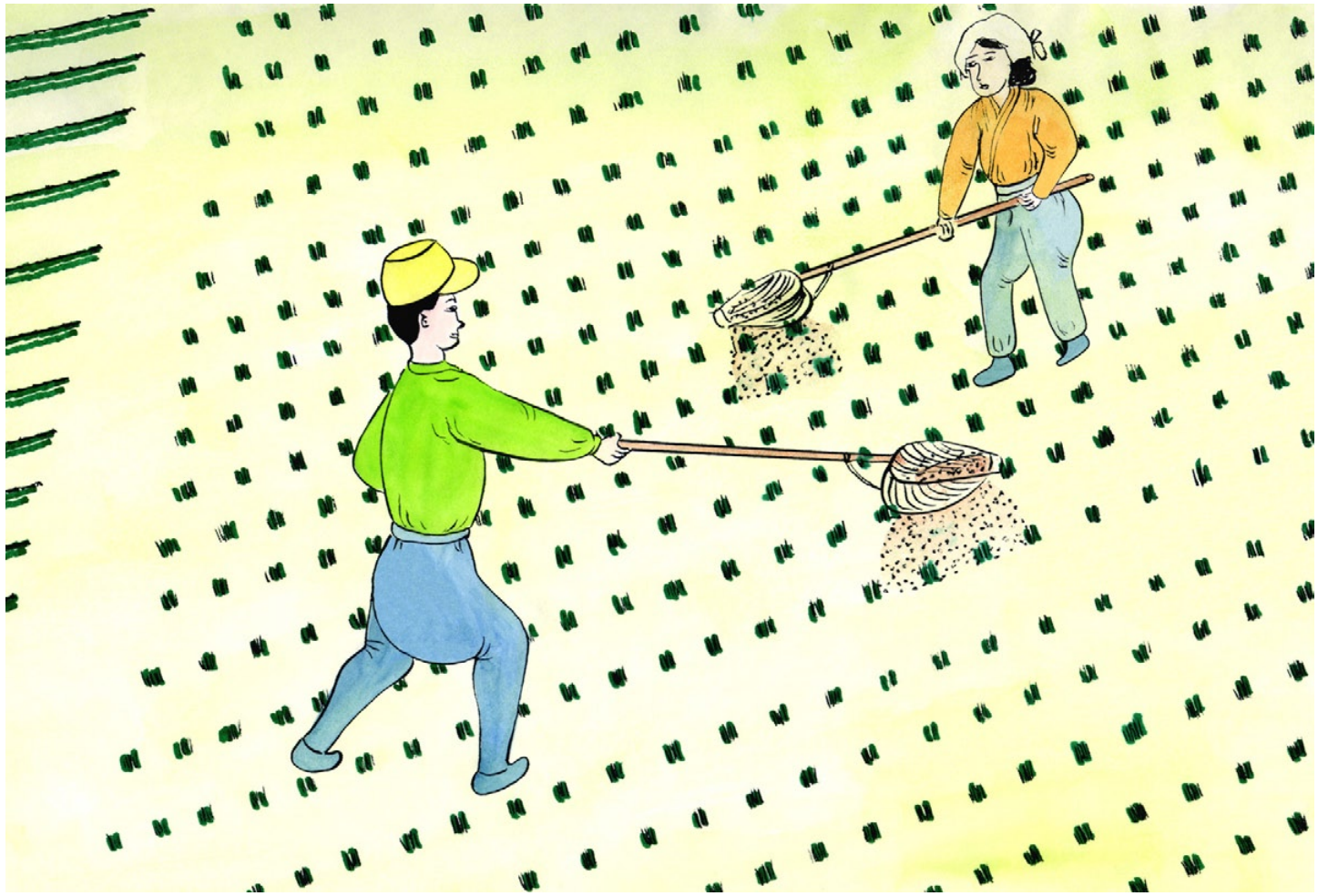
　さつまいもは保存のできる作物です。畑に穴を掘り、温度の一定した地下に貯蔵しました。はしごをかけるほど深く掘った穴に、篭に入れた芋を縄に吊るして降ろし、奥の方に順次よく置いていきます。芋も一束づつ束ね、取り出しやすくしています。



057

麦踏み

麦は秋に種を蒔き、芽が10センチほど伸びた状態で冬を越し、春に収穫します。冬を越す麦が霜で浮いて枯れないように、麦踏みをします。土にしっかり根を押し付けることで、強くていい株にするのです。北風の吹き付ける日の麦踏みは寒くてたいへんでした。



058

麦の土入れ

　麦が芽を出し、伸びてきたら根元に土を入れ、株分けを促します。

059

筍の根埋(ねい)け

今の都筑区一帯、中川や山内地区は筍の名産地として知られていました。柔らかくておいしい筍を作るには、手入れが必要です。

初夏の頃、「根埋け」という作業をします。地上に浮いた地下茎を地面を掘って埋め平らに伸ばして埋め戻します。堆肥や腐葉土をたっぷりかけ、十分肥料をやります。そうすると、次の春、地下茎から柔らかい筍が出てくるのです。

060

筍の収穫

桜も散り若葉が伸びる頃が筍の収穫期です。早朝、わずかに地割れし芽がのぞいているいるところを掘って収穫します。地下に埋めた茎から出ますので形もよく柔らかくて美味しいと評判でした。

市場の買い付け人が競って買い付けにきたといいます。

061

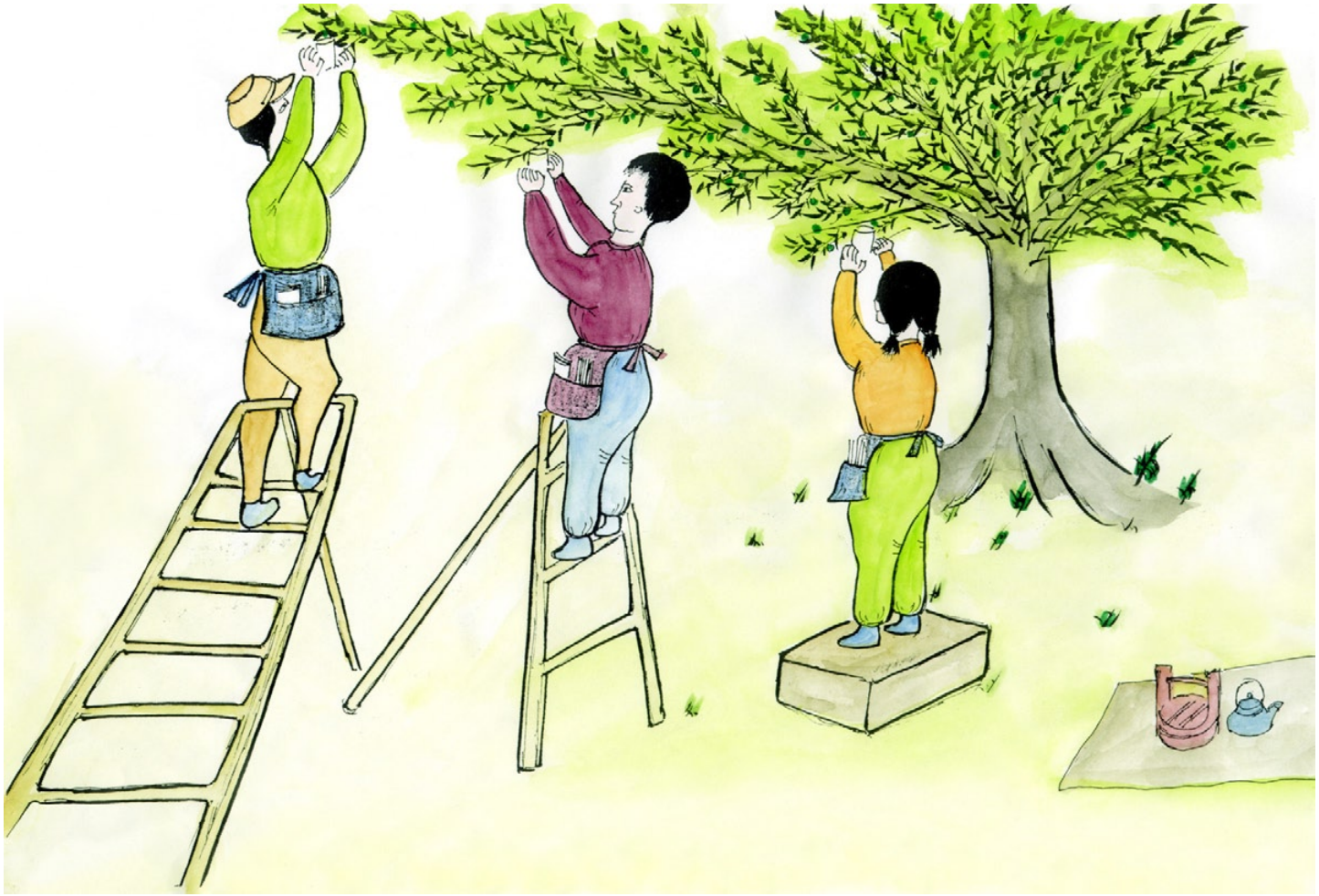
茶摘み

屋敷の周囲や畑の縁などに茶の木を植え、初夏の頃、若芽を摘み取って自家製のお茶作りをしました。茶摘みには隣近所の主婦や娘たちが集まり、おしゃべりしながらの楽しい作業でした。

062

茶の製造

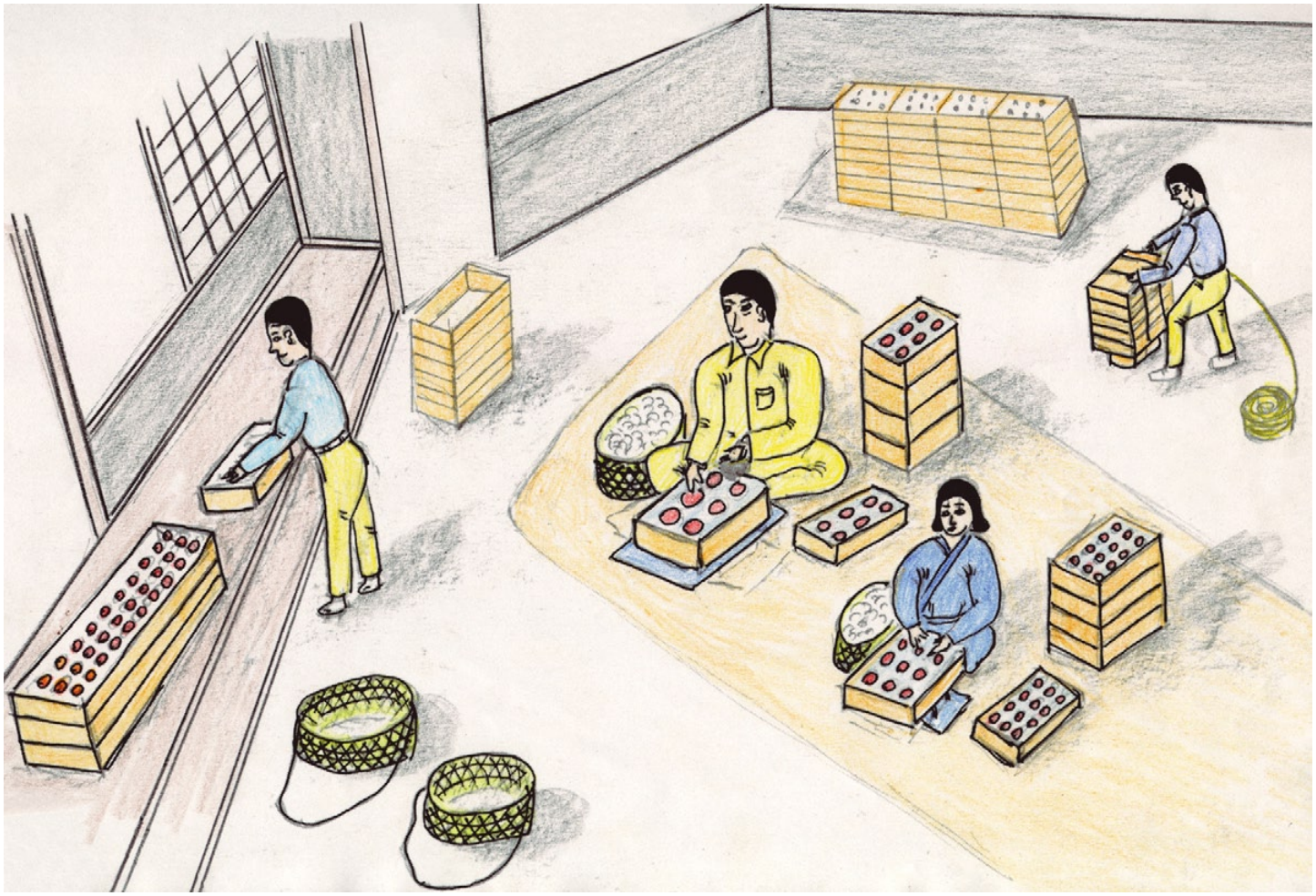
摘み取った若芽は、蒸してから干し、手揉みし、ホイロで乾かします。だいたい１年分のお茶を作りました。



063

桃の袋掛け

　春に花を咲かせた桃は５月頃、小さな実をつけます。昆虫や鳥に食べられないように、袋かけをします。現在の都筑区は梨の栽培が盛んですが、かつては桃も栽培されていました。



064

桃の出荷準備

　収穫した桃はていねいに箱詰めされ、市場に出荷されました。桃は痛みやすいのでたいへん気を使いました。「中川の桃」という商標をつけるほど評判でした。

065

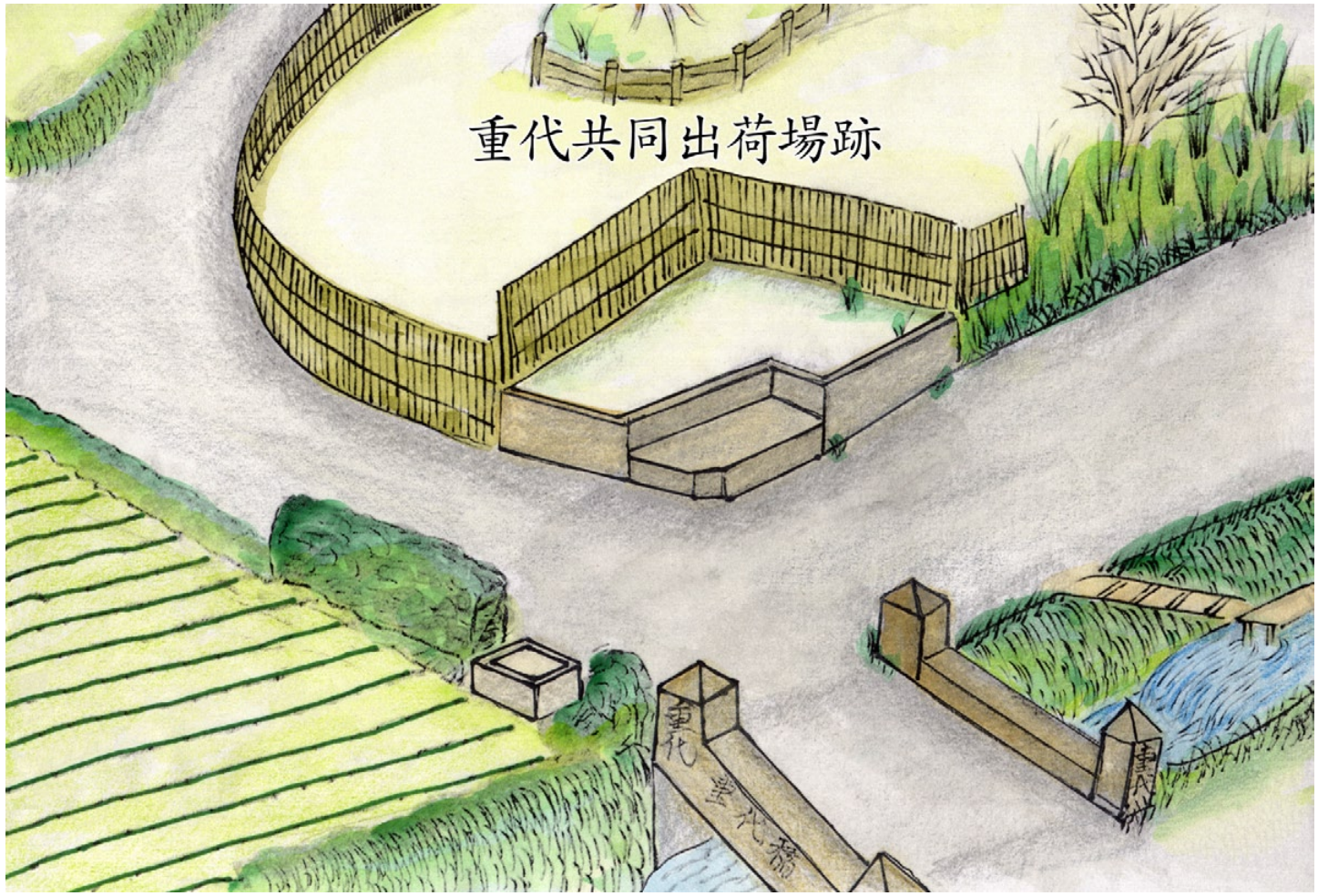
野菜の出荷準備

　野菜も収穫すれば、洗って整え市場に出荷します。夕闇がせまり暗くなると明かりをつけて作業しました。

066

大根を洗う

　秋には大根の収穫があります。大きな大根は川で洗い出荷したり、沢庵(たくあん)漬にしたり、冬の保存食として重宝しました。



067

重代共同出荷場跡

今の北山田交差点付近に、重代共同出荷場がありました。ここから北山田一帯で採れた野菜や果物などが市場に向けて出荷されたのです。

068

鎌研ぎ

稲刈り、草刈り、草取りなどには鎌を使います。作業に出かける前に鎌を研ぎます。よく研いだ鎌は切れ味がよく、気分もよく仕事が進みました。

069

雨の日の草刈り

　牛や馬の飼料となる草刈りは大切な仕事です。雨の日でも休むわけにいきません。雨具をつけて作業をしました。

070

酪農の朝

昭和30年頃まで北山田で酪農をやっている農家がありました。北山田交差点から西の方向に牧場もあり、数頭の乳牛を飼っていました。早朝の乳搾り、餌やり、掃除と大変な作業でした。

071

牛の餌やり

　牛は貴重な労働力で、代かきや荷車引きに使っていました。のっそりと遅くてきぱきとはいきませんが、どこの家でも牛を飼って労力を補っていました。

　畑から帰ると夕食の前に必ず牛や馬に餌をやりました。

馬の餌の準備(押し切りを使って)

072

馬の餌やり

　馬の餌は、押切りを使って秣（まぐさ）を細かく切って与えます。

Ⅲ　運搬の変遷

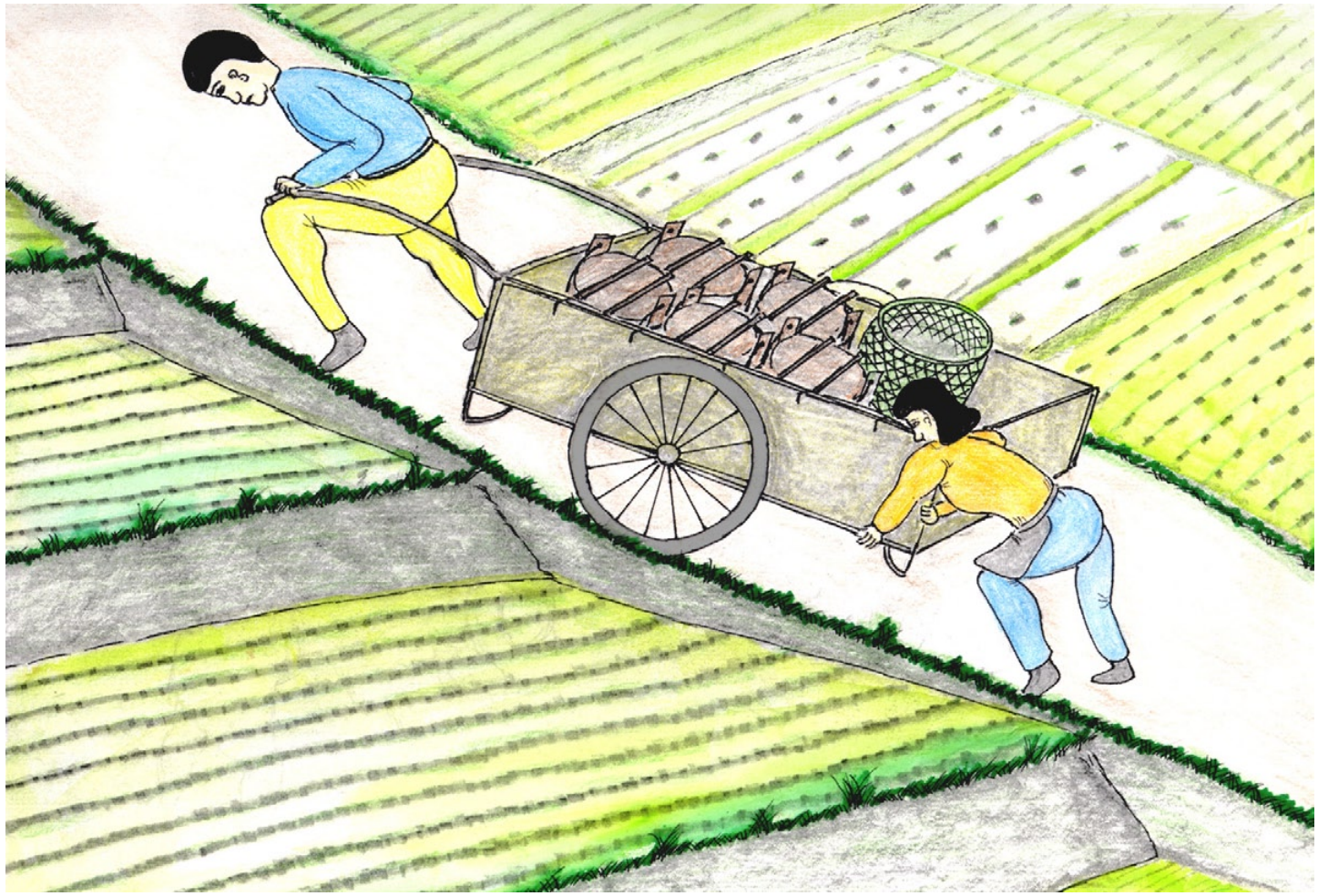
073

舟で運ぶ

物を運ぶのは、力のいるたいへんな仕事です。今のように車が発達していなかった時代では、肥料や野菜、お米を運ぶのに、いろいろな道具を使いました。

絵は、肥料を積んだ舟が鶴見川を上り、末吉橋のあたりで舟から降ろしているところです。舟から岸までは板を渡し天秤棒で担いで渡りましたが、バランスがむずかしく、川に落ちることもありました。こんなふうに、舟とか天秤棒は昔から使われていた運搬の道具でした。

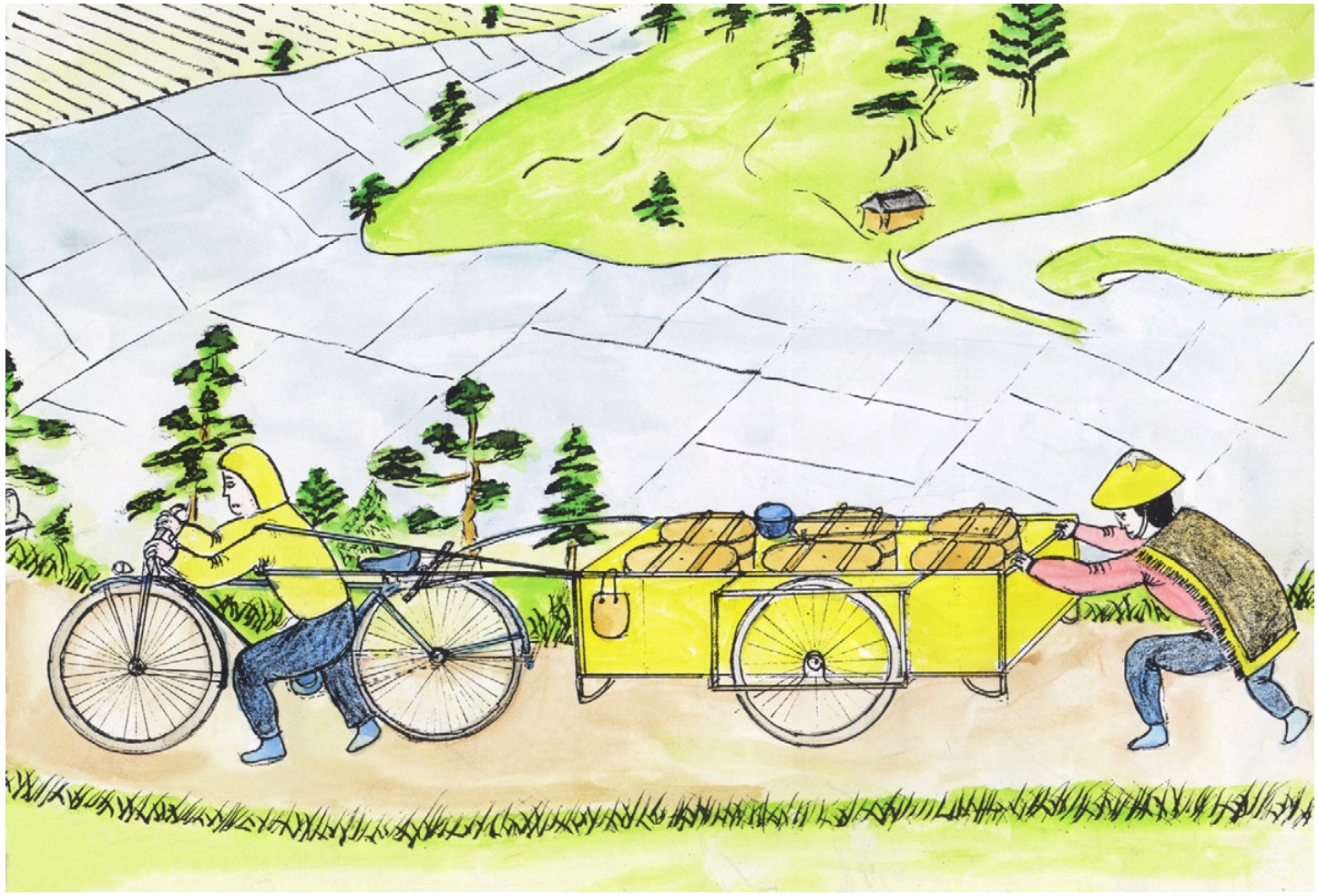
鶴見川は今より水量が豊富で、舟で行き来できる川でした。



074

リヤカーで坂道

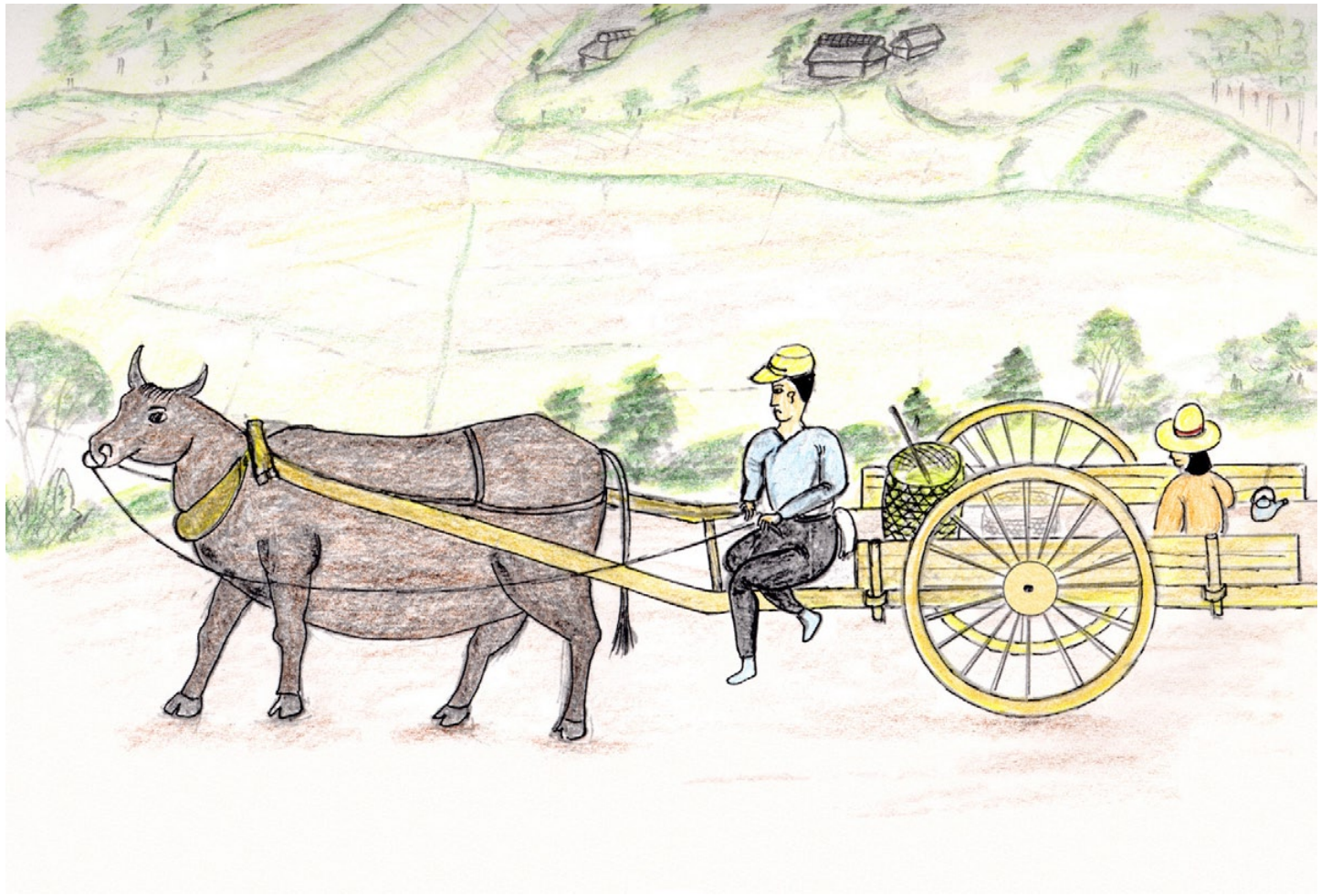
　リヤカーも運搬の道具でした。天秤は２個の荷物を担ぐだけですが、リヤカーを使えばその４～５倍を運ぶことができます。でも、坂道を登るのはたいへんでした。夫婦で前引き後押しで登りました。後ろの主婦は肩を使って押しています。力をゆるめればリヤカーは下がってしまいますので、肩でしっかりおさえて押しました。



075

自転車にリヤカー

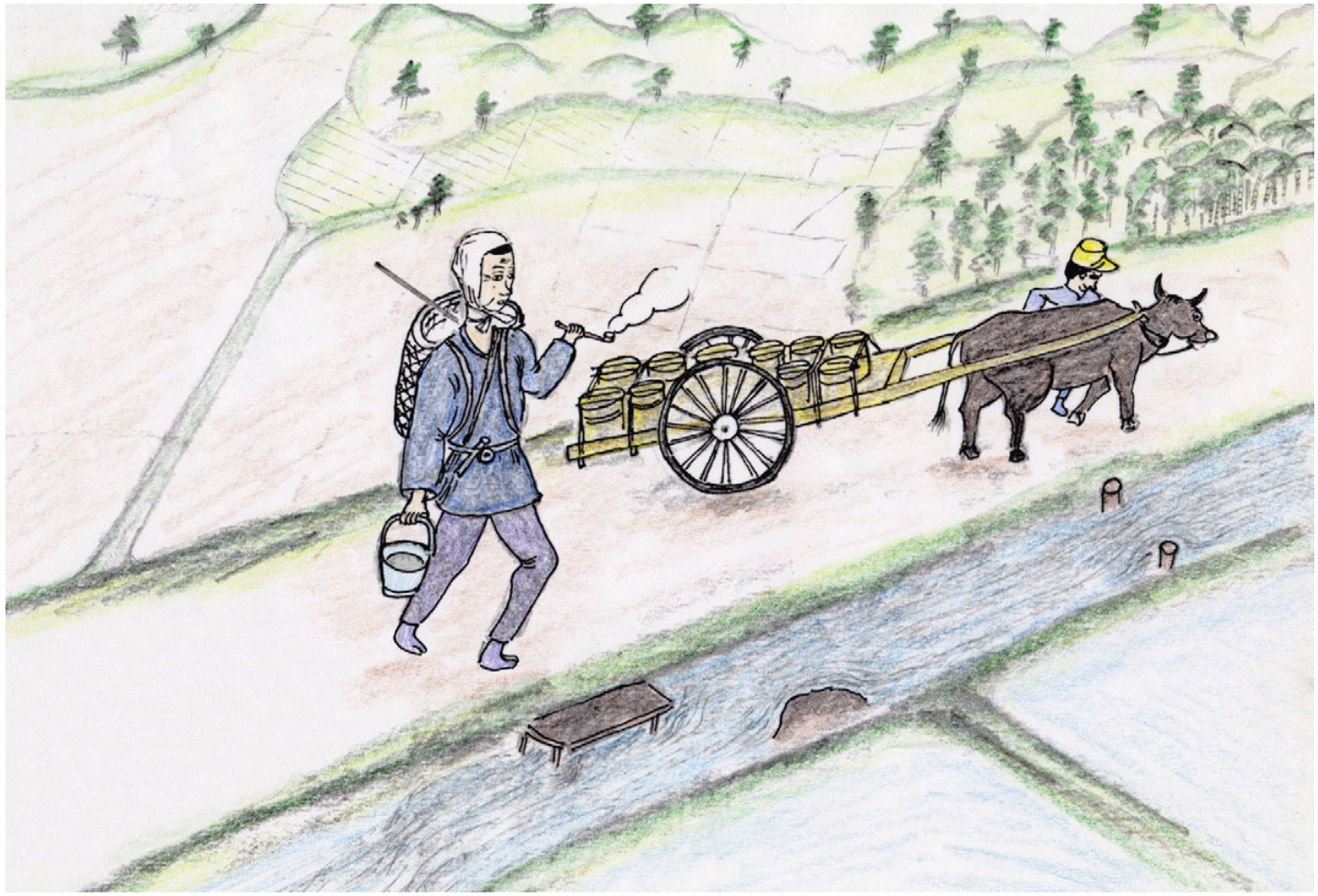
　平らな道ですと自転車にリヤカーをつけて運びました。少しでも坂になるとかえって危なく、自転車を降りて引き、後ろから押す人も必要でした。



076

牛車で野良に－1

　牛車でのんびりと野良に出かけるところです。牛は力が強く重い荷物を運んだり、いろいろ役に立っていました。昭和20年から30年頃は、牛を飼っている農家は８割ほど、馬を飼っている農家は２割くらいでした。

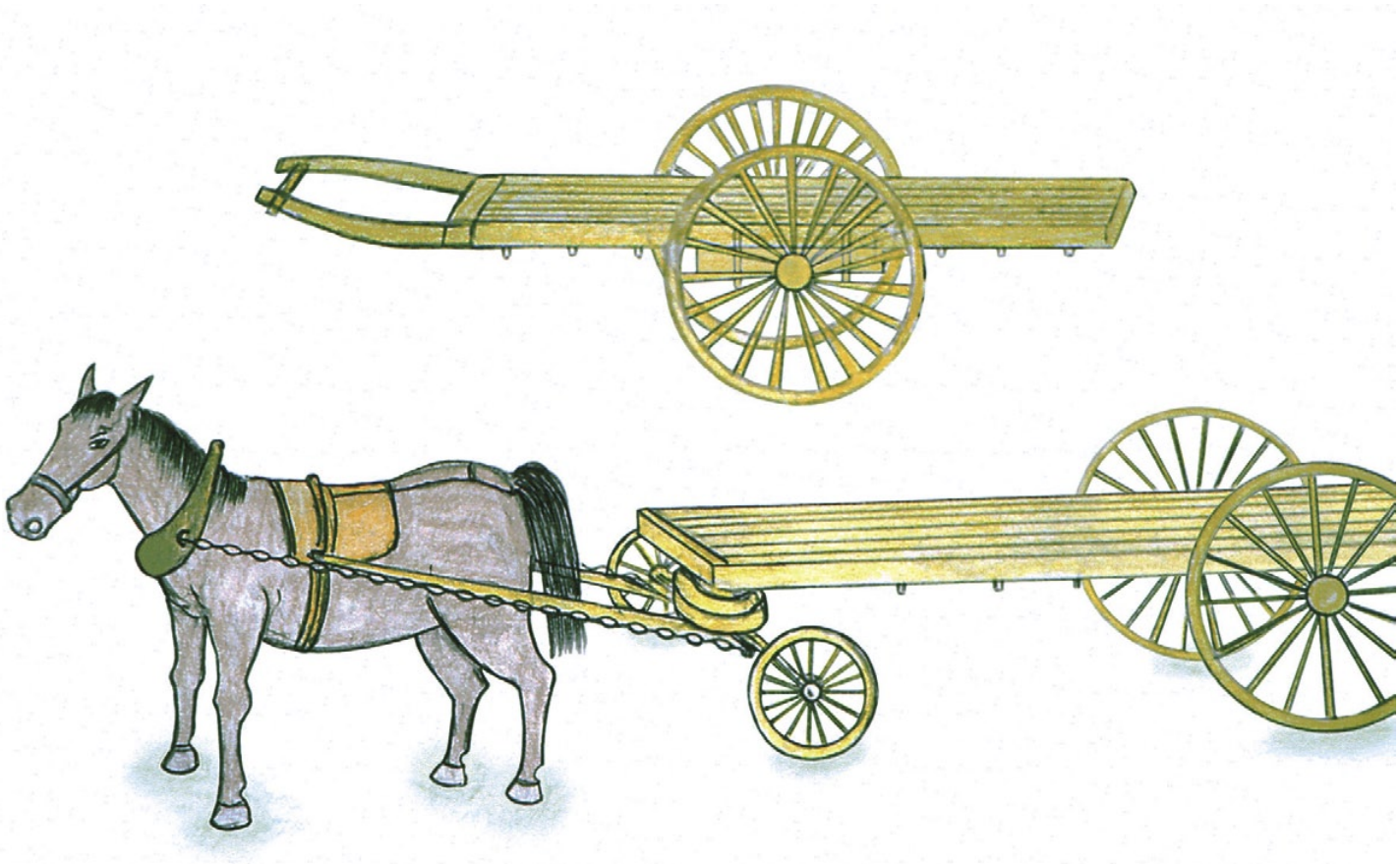


077

牛車で野良に－2

牛車にはたくさんの肥料桶が積んであります。牛を叱りながら進んでいます。

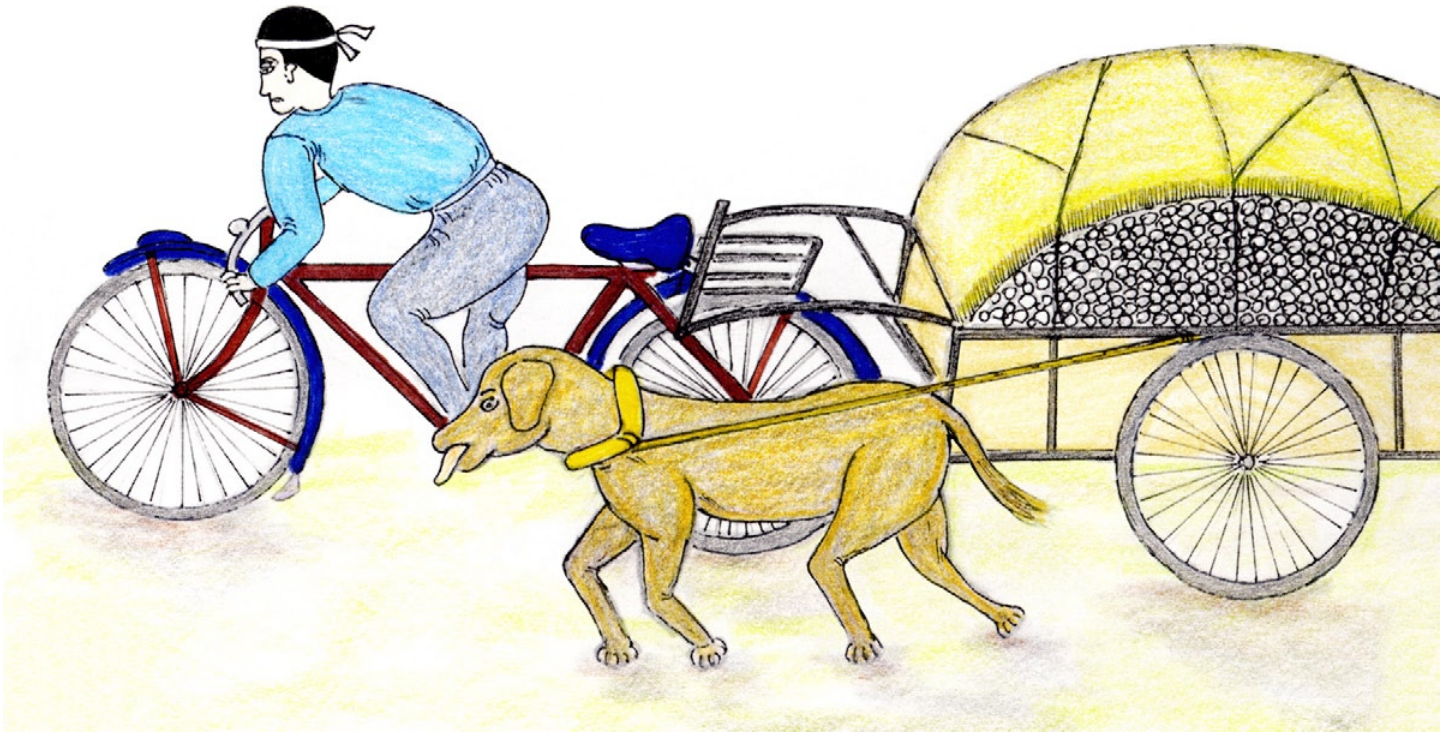
後ろの方で農夫がキセルタバコをふかしています。田圃は田植え前の代かきの頃です。小川はとうとうと水が流れ、春の農作業が始まっています。



078

馬車を利用

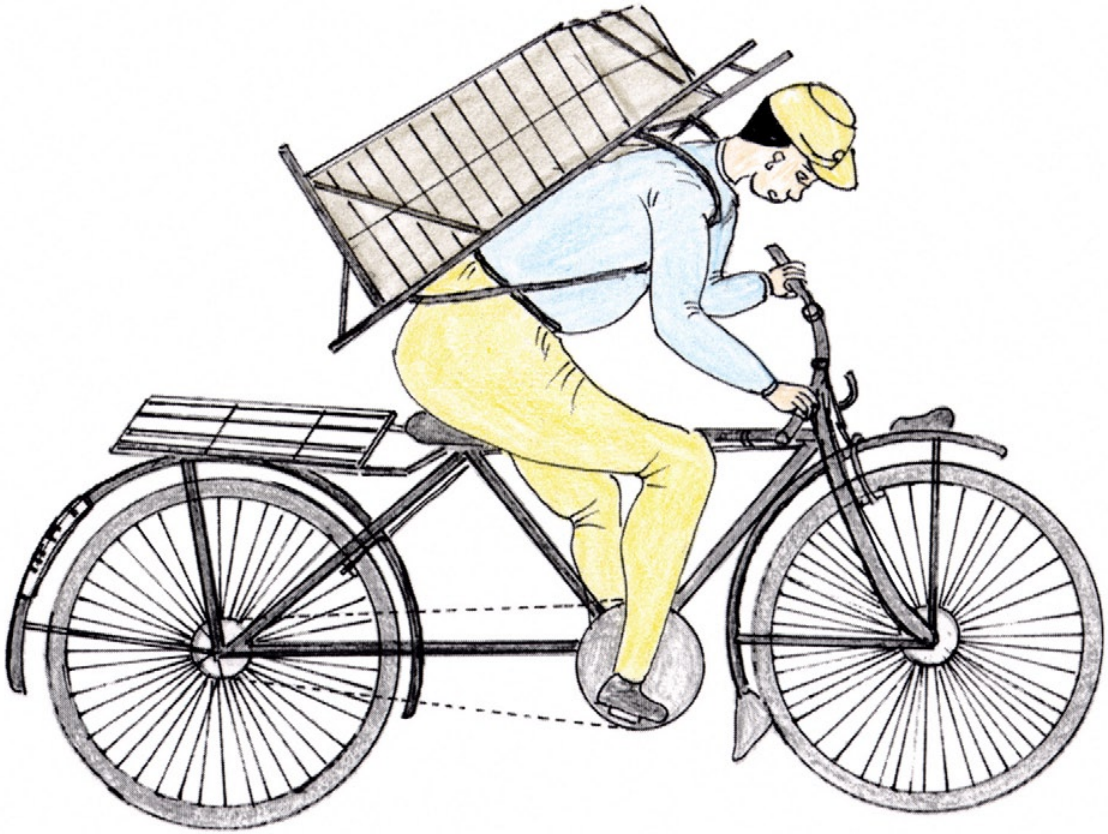
　馬は力もあり、歩くのも早く、乗馬以外に運搬にも使われていました。牛のように田畑の作業よりは荷物を積んで運搬に利用されたようです。



079

リヤカーを引く犬

　北国の生活で犬ゾリが活躍する光景をテレビなどで見たことがあると思いますが、自動車の少なかった昭和中ごろまでリヤカーを引く犬がこの辺で見られました。重い荷物をつけて出荷場や市場に行く時は主人と一緒にリヤカーを引き、帰りは犬だけが引いて、主人はペダルを踏まずにすむこともありました。起動力があり、主人の言うことをよくきくので、とても助かったといいます。



080

自転車で運搬

　苺など箱詰めにしたものを背負い板で背中につけ、自転車で市場に運びました。

081

自転車で荷を競う

昭和の中頃には自転車はかなり普及していました。絵に描かれているのは昭和20年代の頃です。市場に荷を運ぶのに、荷の高さを競うことが流行っていました。止まれば倒れて起き上がれなくなり大変危険でした。

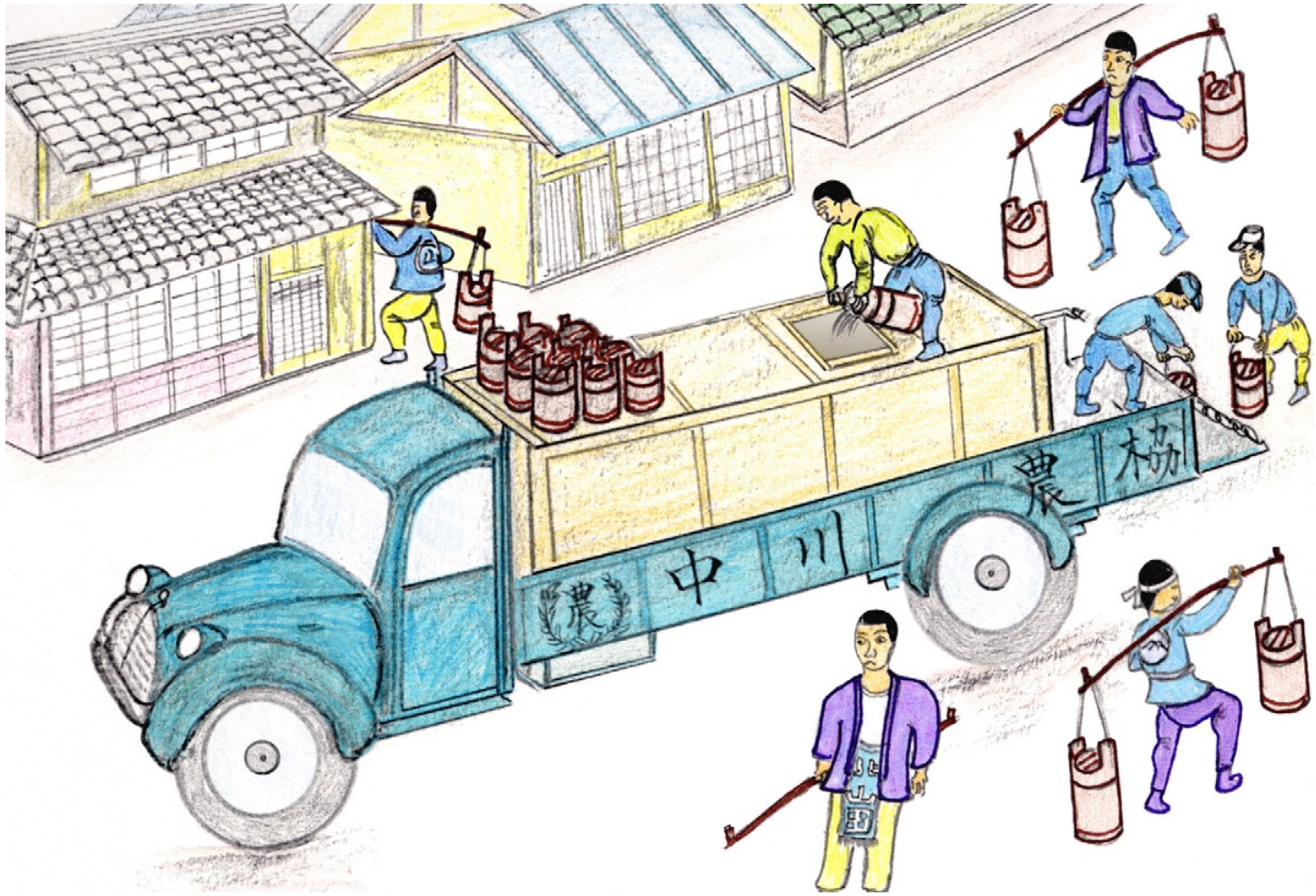
市場に着くと、柱に寄り添うようにぴたっと止まり、柱を軸にして自転車から降ります。主に筍を運ぶ時が多かったようですが、こんなところに粋を感じていたのです。

082

三輪トラック

戦後、昭和20年代頃にはトラックが使われるようになりました。はじめは棒ハンドルに三輪車で、40年代に入り丸ハンドル、50年代の後半には三輪車はなくなり、今のような四輪車になりました。

絵は棒ハンドルの三輪車です。自動車が出始めるようになって牛や馬は飼われなくなりました。

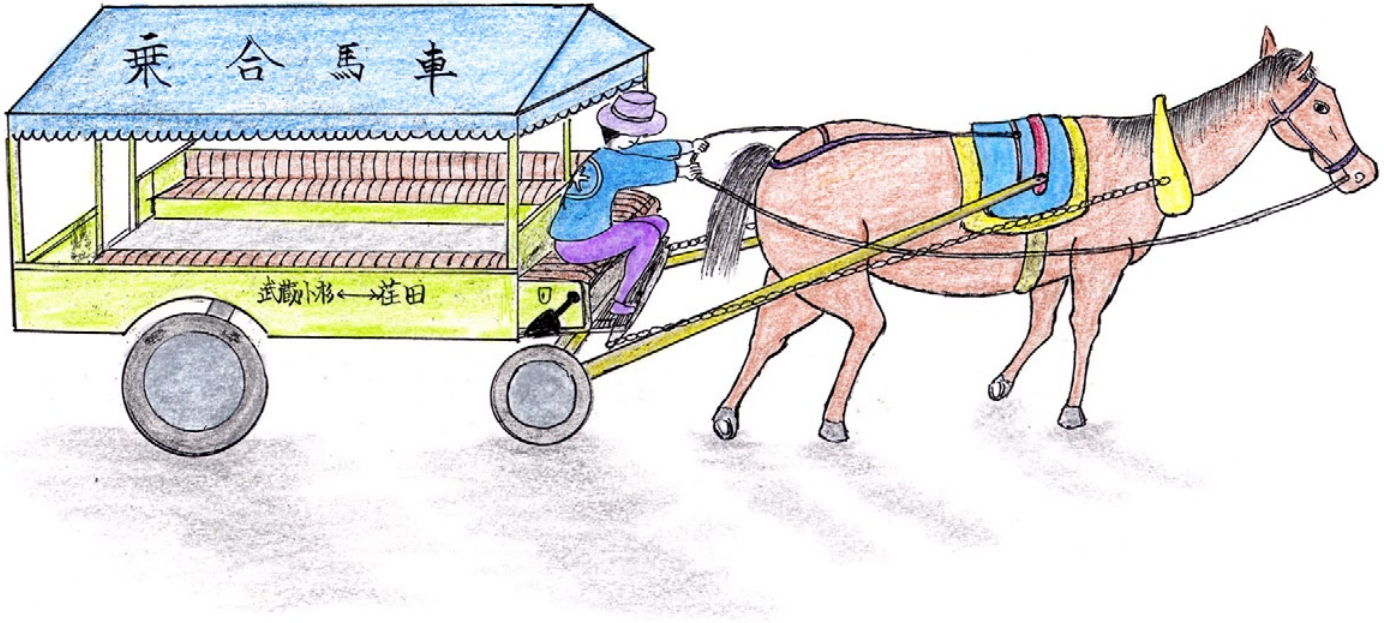


083

四輪トラックで肥料集め

　戦前は農家がそれぞれ町に行って屎尿を集めていましたが、トラックが出始めると共同で行くようになりました。

　絵は農協のトラックで集めている様子です。



084

乗合馬車

昭和初期から中期頃まで、綱島と荏田、武蔵小杉と荏田の間を乗合馬車が走っていました。あちこちに停留所がありましたが、途中でも乗せてくれました。

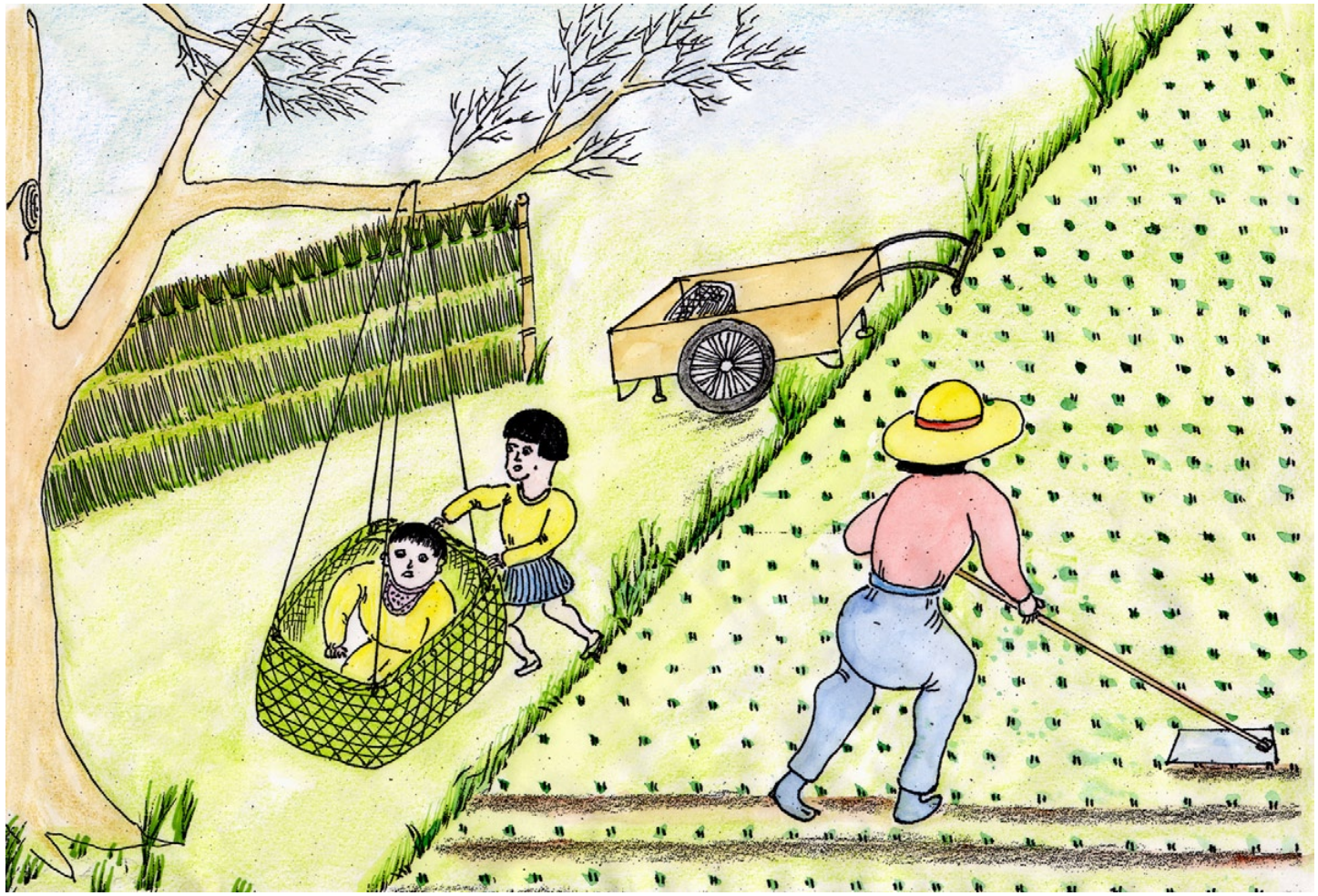
085

木炭バス

最初村を走るようになったバスは木炭バスでした。後ろに焚き口があり、薪を燃やして走ったのです。ところが坂道を登る力がありません。

坂道を押すことを条件に中学生くらいの子供が焚き口のところにぶらさがって乗り、坂になれば降りて押したといいます。町の映画館に行くのに、バスに無料で乗れるので喜んで手伝ったということです。

Ⅳ　働 く 主 婦



086

子守りをしながら農作業

農家の主婦は朝から晩まで休まず働きました。畑に出る時にも子供を連れて行きました。子供を枝に吊るした篭に入れ、あやしながら農作業をしています。

篭は野菜や筍を出荷する時に使う十貫目篭とか筍篭とか呼ばれていたもので、子供を入れて背負ったり、ブランコにして使ったりしていました。

087

農作業の合間の授乳

　生後間もない乳児に授乳は欠かせません。それでも主婦は乳児を置いて畑に出なければなりません。家に寝かされた乳児が乳を欲しがって泣き出すと、小学生くらいの女の子がおんぶして母親のいる畑に連れてきます。道ばたで授乳し、乳児が満足すると、またおんぶして家に帰り寝かせます。

088

お勝手仕事

お勝手の仕事も主婦の大切な仕事です。夫よりも早めに帰宅して、子供を背負いながら食事の支度です。

台所は土間になっていて、流し台、かまど（へっつい）、薪、水桶などがあります。

089

石臼で粉を引く

今のようにスーパーやコンビニに行けば何でも手に入る時代と違って、当時は粉とか味噌などは各家で作っていました。おばあさんは、夜なべ仕事に小麦を石臼で引いて小麦粉を作っています。

じょうしんこ（米粉）、きな粉（大豆）、蕎麦粉なども作っていました。

090

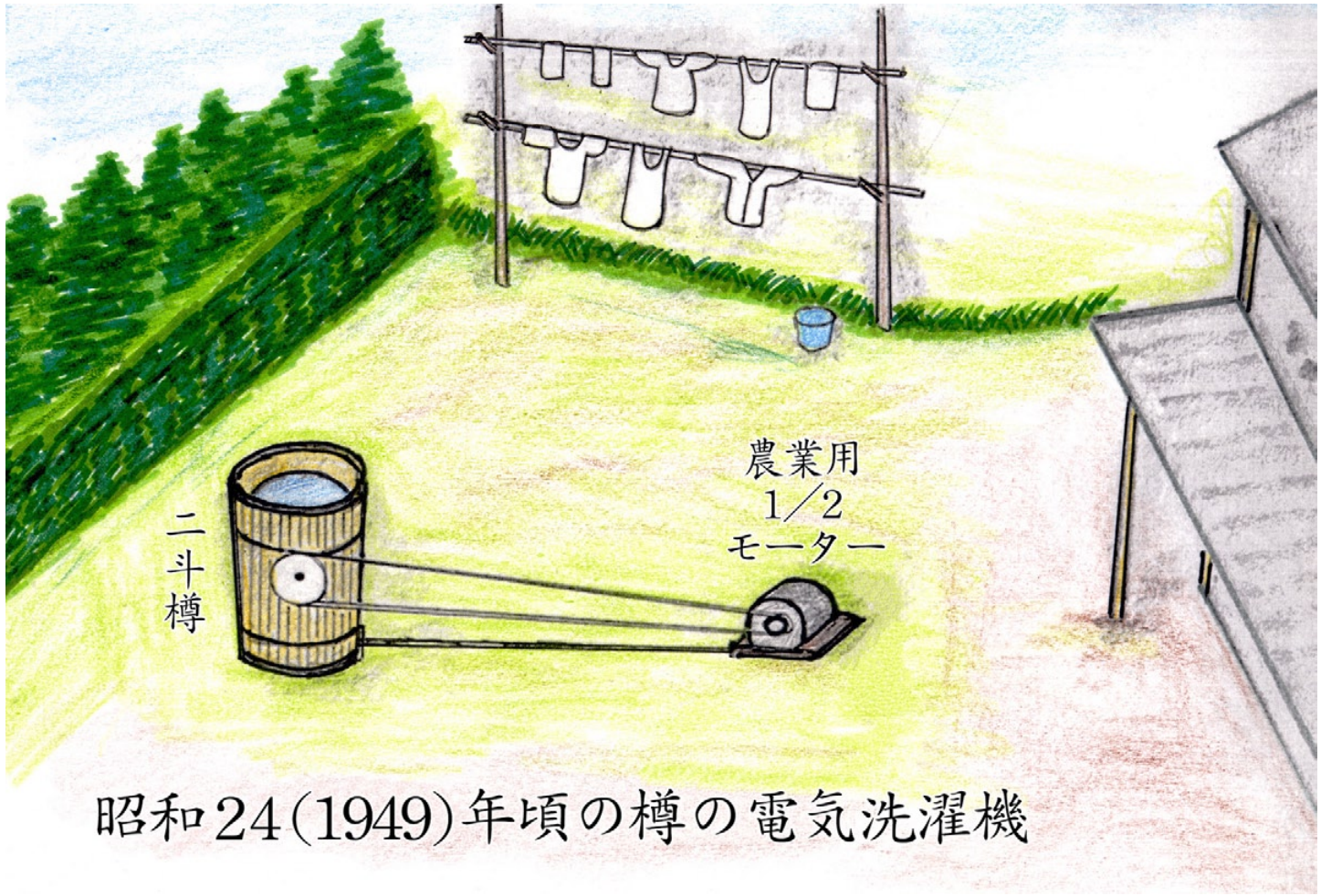
川で洗濯

洗濯も今のように電気洗濯機などありません。主婦は川で洗濯をしました。冬など川に氷がはるので、氷を割って洗濯したのです。

091

軒先で洗濯

　軒先で井戸の水を汲み上げて、たらいで洗濯しました。



昭和24(1949)年頃の樽の電気洗濯機

092

樽の洗濯機

動力がさまざまなところで使われるようになると、農業用のモーターを使って樽の洗濯機が出現しました。主婦にとっては大変な朗報でした。

その後間もなく電気洗濯機が出回るようになり、これはその走りです。

093

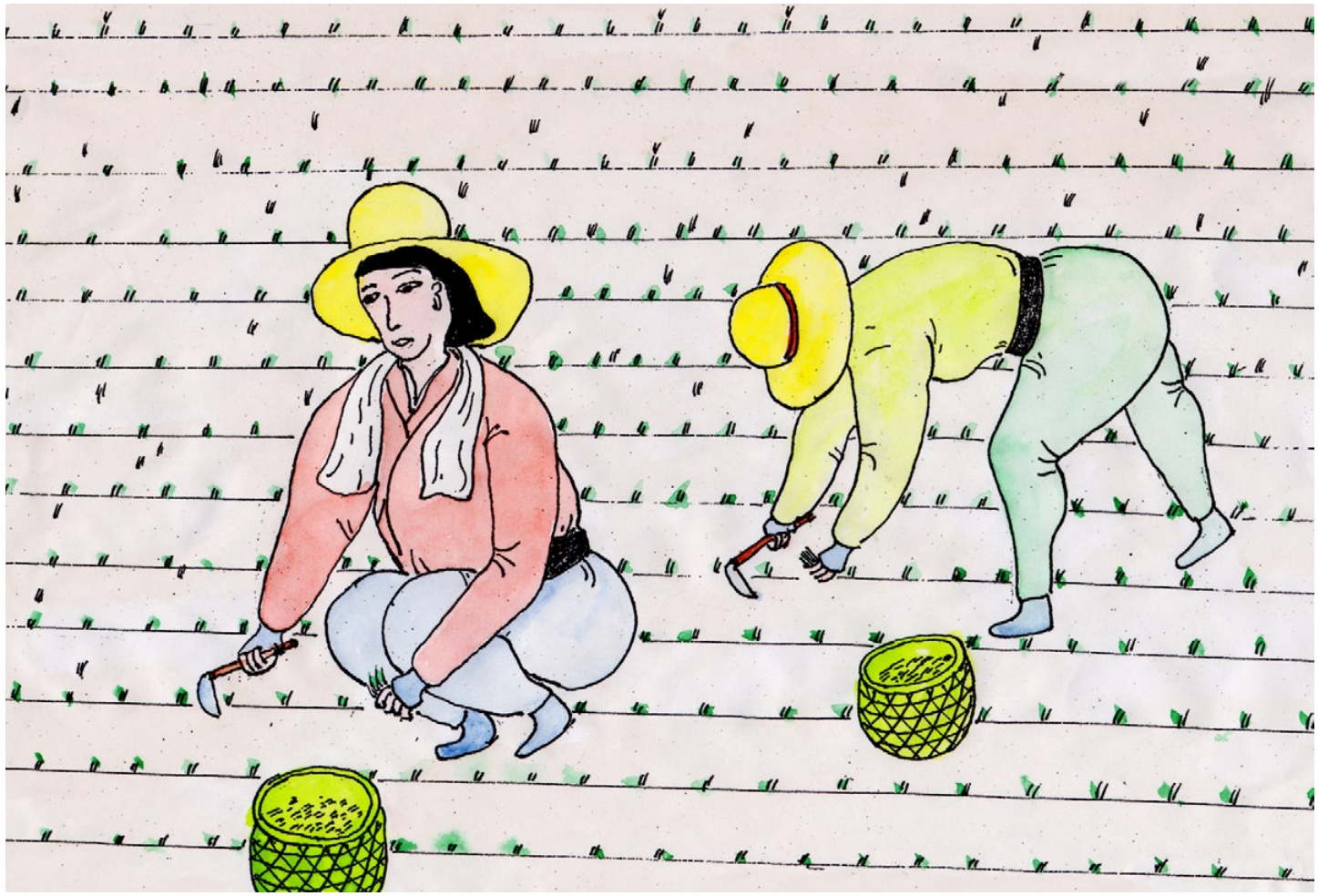
子供を背負って野良へ

　朝食と後片付け、洗濯、掃除と一通りの家事が済むと、休む間もなく子供を篭で担いで野良に出ます。夫にお茶や食事を届けたり、草刈りや収穫にと急いで出かけるのです。

094

育児と農作業

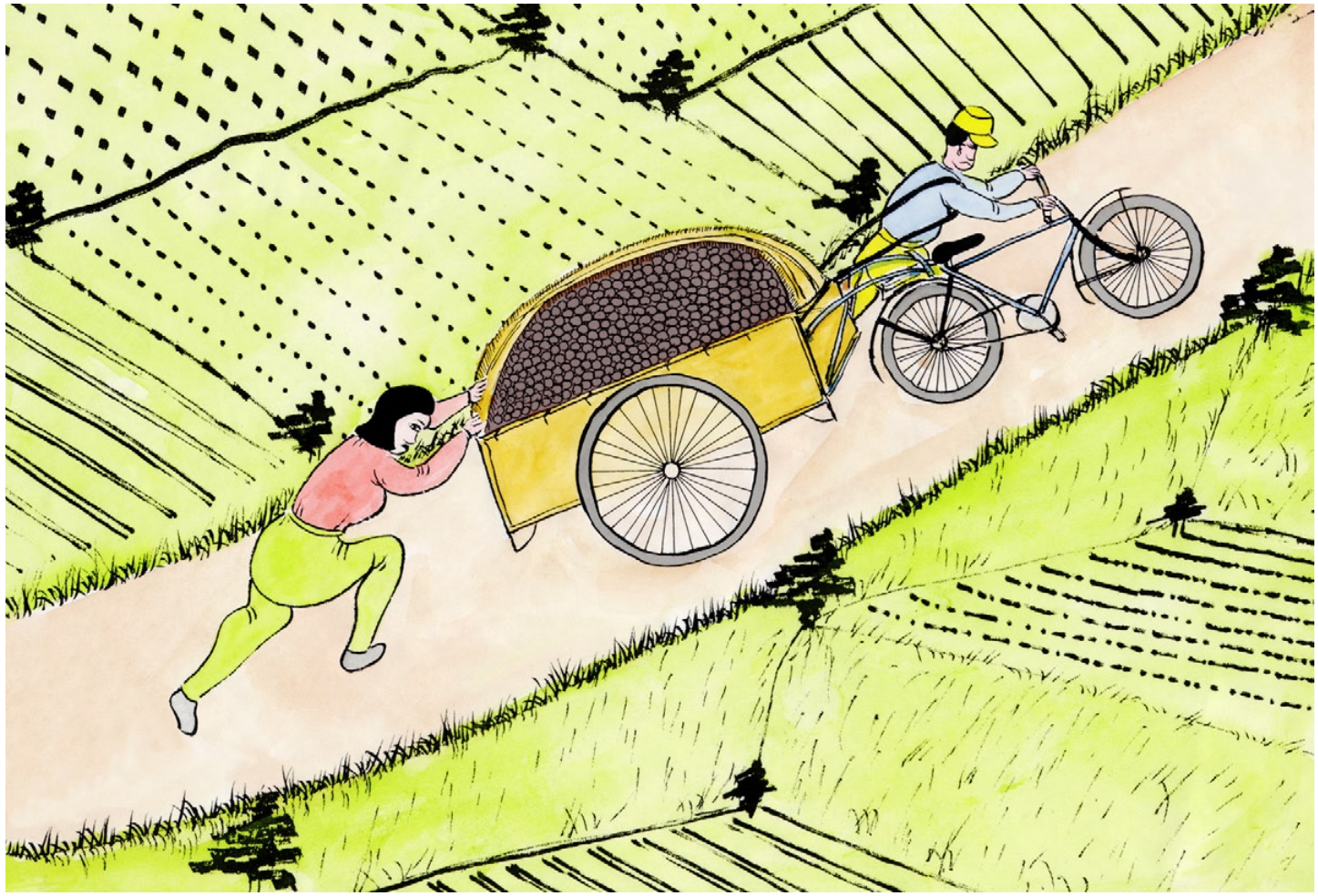
背中には乳児、あぜ道には篭に入れた２～３才の子供、小学校入学前の５才くらいになると、畑の手伝いをさせられます。その子たちに注意を怠ることなく、主婦は仕事をするのです。目の届くところで安全を確認しながら仕事を続けました。



095

草取りの主婦

　夏の太陽の照りつける日中は、むんむんと熱気が立ちこめ気分が悪くなることもあります。体調の悪い時はなおのことです。主婦は休みたくても休めません。歯を食いしばって一生懸命働きました。



096

リヤカーの後押し

　重い荷をリヤカーにつけて自転車を引く夫、坂道は登るのが大変です。主婦が後押しして、二人で力を合わせて登ります。人生の縮図のようです。

097

早く帰ってお勝手

　夕闇が迫りはじめると、主婦は急いで帰宅して食事の準備をしなければなりません。作物を急いでリヤカーに入れ、小走りに走りながら帰り支度をしています。表情も必死です。

098

家路を急ぐ親子

晴れていたのに突然雨雲が広がり、ぽつぽつ大雨が降り出すことがあります。畑の主婦のところに子供が迎えに来て母親を急かして帰ろうとしています。雷も鳴りだし、雨脚も激しくなりだしました。

099

自転車で医者へ

　子供をおぶって、後ろの荷台にも子供を乗せ、医者まで自転車で走る主婦。子供が熱を出したら何をさておいて医者にかけつけ、それから主婦の仕事をするのです。

100

自転車の親子

　自転車が普及すると、自転車に乗った主婦をよく見かけるようになりました。たいてい背中と後ろの荷台に子供がいます。買い物に、医院に、用事は自転車に乗ってすいすい出かけました。

101

深夜の針仕事

昼の労働から解放された主婦には、子供たちが寝静まった夜は破れた衣類の針仕事が待っています。活動的な子供たち、田畑で働く夫、衣類はすぐ擦り切れたり、破れたりします。上手に縫うのも主婦の腕の見せ所です。

102

農家の新妻

農家に嫁ぐことは娘時代とは違ってわがままは言えず、主婦として家事、育児を担わなければなりません。初々しい新妻も、次第に主婦らしい風格をつけていきます。

Ⅴ　行 事 ・ 生 活 習 慣

103

消防団の獅子舞

　年の初めのお正月、消防団の獅子舞が各家庭を廻りました。子供は獅子が恐くて逃げ隠れしました。獅子が子供の頭を噛もうと近づいてくるからです。

104

寒餅つき

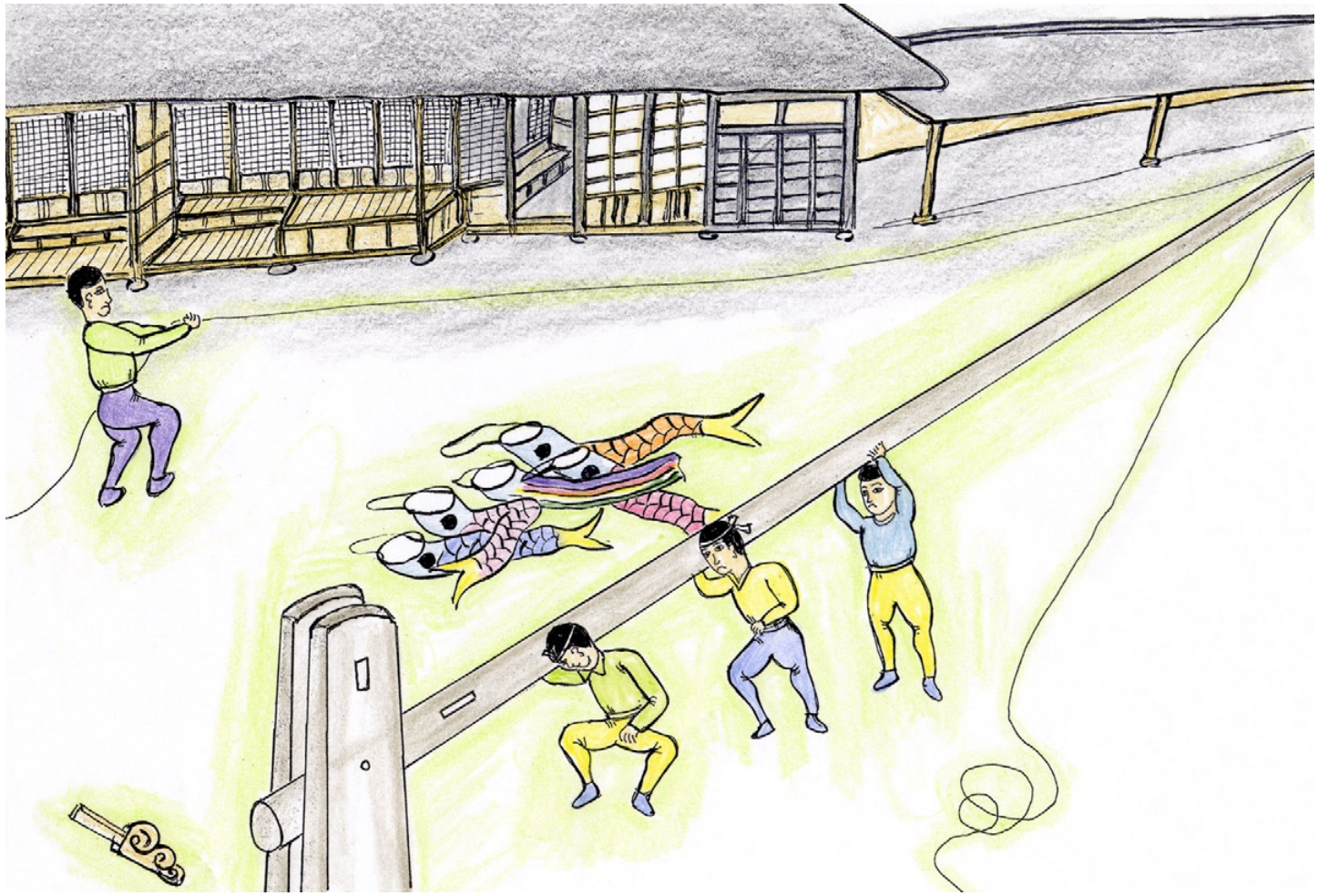
一年でもっとも寒い頃、寒餅つきをしました。隣近所が手伝って、回り持ちでやりました。ついた餅は桶や瓶に入れて水をはり、保存します。

農繁期にはこの餅を取り出しておやつに食べるのです。

105

山田富士の桜祭り

　４月８日はお釈迦様の花祭りです。その頃は桜も満開です。山田富士を会場に、毎年桜祭りを開き甘酒を振るまいました。



106

五月の節句の鯉のぼり

桜も散り、青葉が美しい５月は端午の節句です。それぞれの家で鯉のぼりを立てますが、重くて一人ではできません。隣近所の人が手伝って立てました。高く上った鯉が５月の風をうけて泳ぐ様子は男の子の成長を祝う今でも受け継がれている行事です。

107

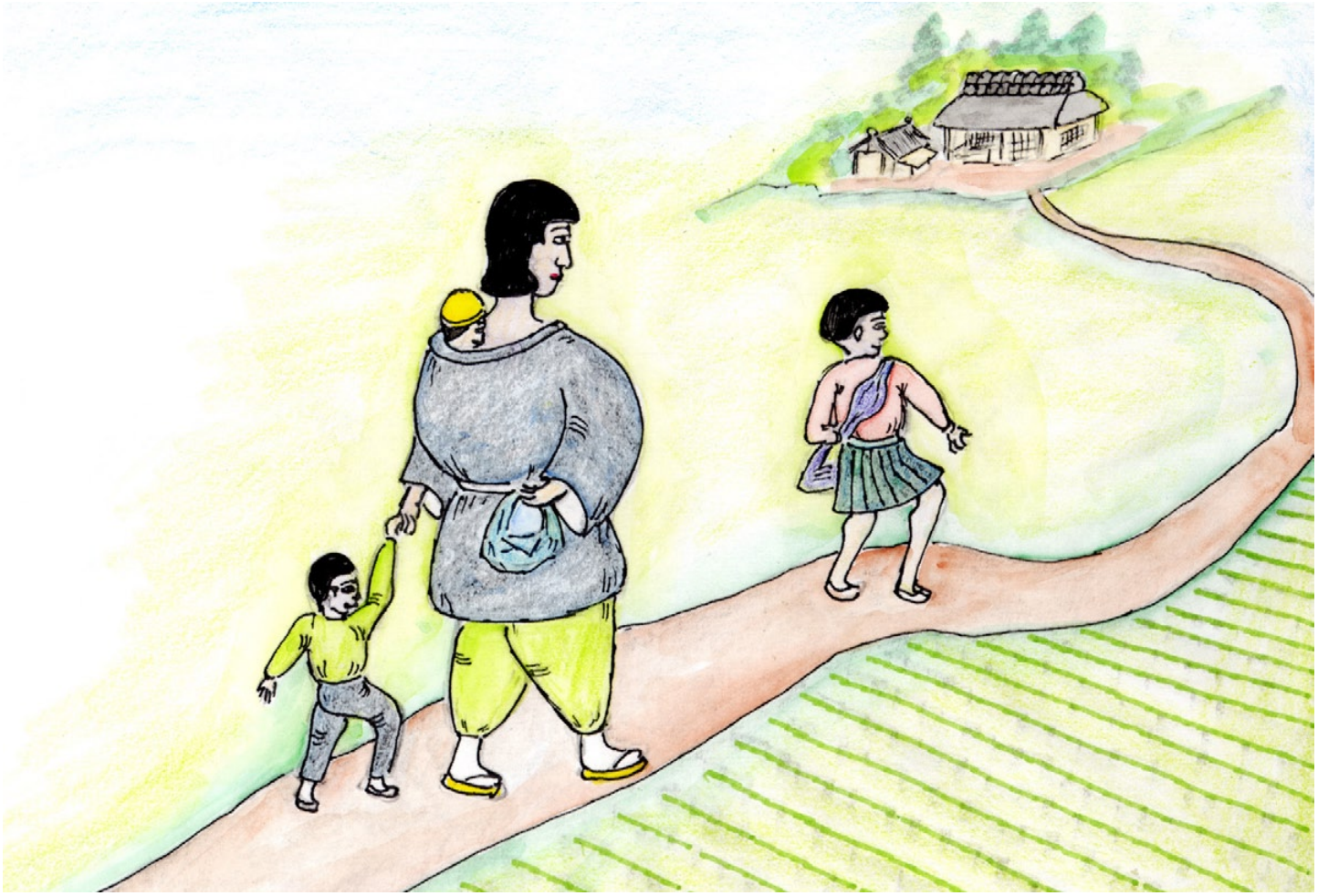
嫁入り

結婚式はたいてい春先か晩秋の農閑期に行われました。当時の結婚式は花嫁の家から歩いて沿道の人々に見られながら嫁ぎ先まで歩いて行ったものです。先導の歌い手、花嫁、仲人や親戚、道具運びの行列と続き、嫁ぎ先が近づくと出迎えの人が列になって迎えます。遠いところから嫁ぐ時は馬車やトラックなども使ったようですが、今のように式場でやるのではなく、各家で式を行いました。

108

竹薮の避暑地

夏の暑さを避けるために、竹薮にやぐらを組み、そこで一服したり、子供たちは勉強したり、遊んだりしました。蚊は上の方は少なく、竹を渡る風が心地よいものでした。



109

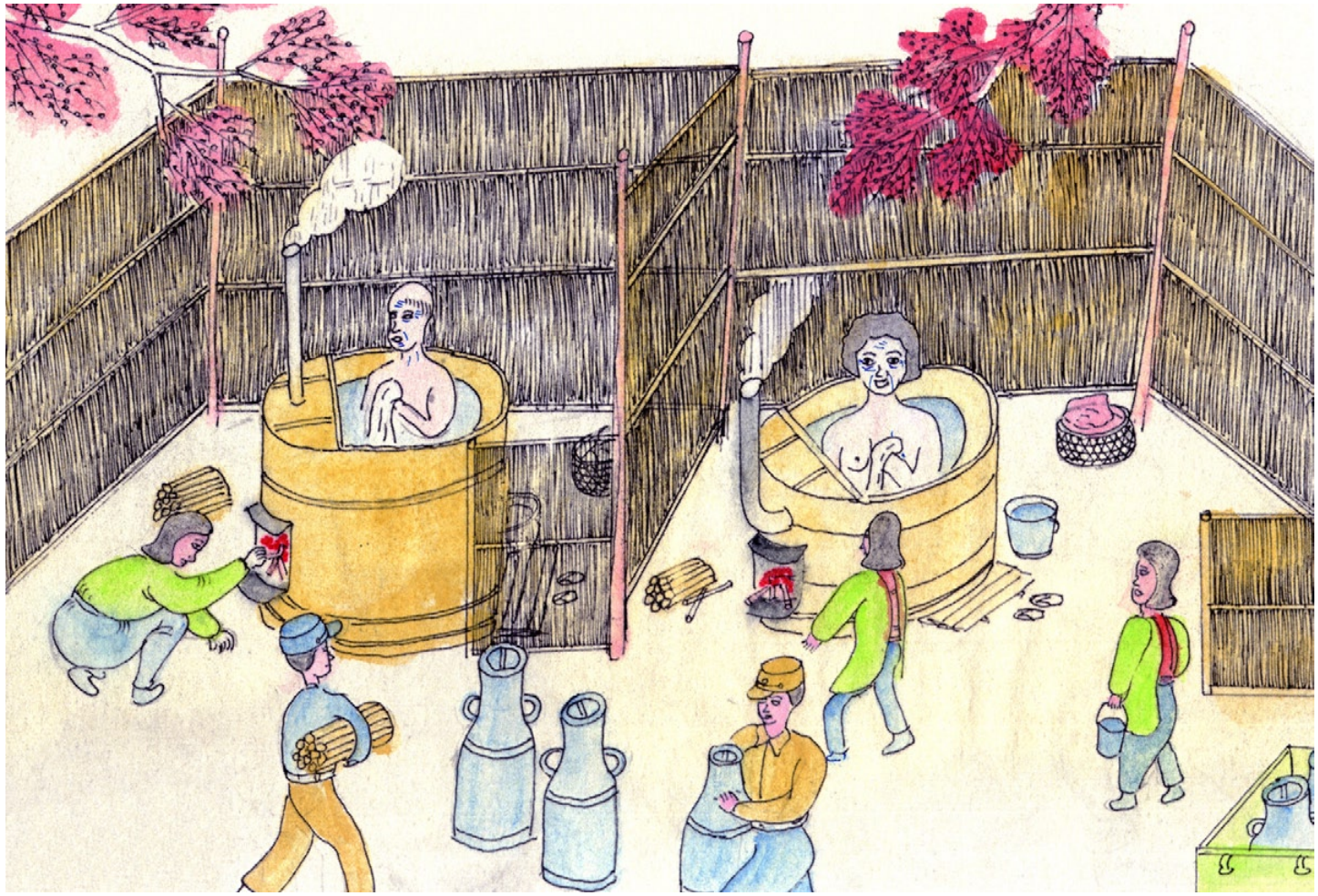
実家へ向かう親子

　盆暮にはお嫁さんが実家に帰れる時です。子供を連れて懐かしい実家に歩いて帰りました。自動車もなく、何キロも歩いて行きました。

110

トウモロコシ焼き

　香ばしい香りが辺りに漂います。トウモロコシが実るとおばあさんが畑からとってきて、おやつに焼いてくれます。



111

敬老会の牛乳風呂

　お年寄りに感謝を表わす敬老会で、牛乳風呂のサービスをしたことがありました。とても喜ばれたということです。

112

十五夜

　中秋の名月は今でも祝いますが、当時も十五個のお団子にお神酒、さつまいもや野菜をお供えしてススキを飾ってお祝いしました。

　男の子たちはそーっと近づき気づかれないようにお団子に手を出します。見て見ぬふりをしていたおじいさんは、「今、お月さんが団子をとりにきたよ」といい、みんなが爆笑しました。その時のお団子のおいしかったこと。

113

冬の団らん

　冬は寒くてみんなこたつに集まってきます。こんな時、お茶を飲みながらおじいさんやおばあさんの話を聞くのは楽しいものでした。おじいさんやおばあさんの小さかった頃の話や昔話は何度聞いてもよかったといいます。

114

どぶろく作り

　酒造りは禁じられていました。そこで密造小屋で隠れてどぶろくを作っていました。作ったどぶろくは裏山の墓地に隠し、お正月や祭りなどで取り出して飲んだということです。

115

沢庵(たくあん)漬けの準備

　冬の保存食に沢庵漬けがあります。それぞれの家で自家製の沢庵を作っていました。絵は沢庵漬けの大根を干しているところです。

116

薪（たきぎ）作り－1

　かまどや風呂、暖房用に薪は欠かせません。晩秋になると、山に出かけて薪作りに励みました。

傍らでは小川から汲んだ水を沸かし、お茶道具も持参しています。

117

薪（たきぎ）作り－2

　雑木林の木を切り、適当な長さに切ってまとめていきます。

118

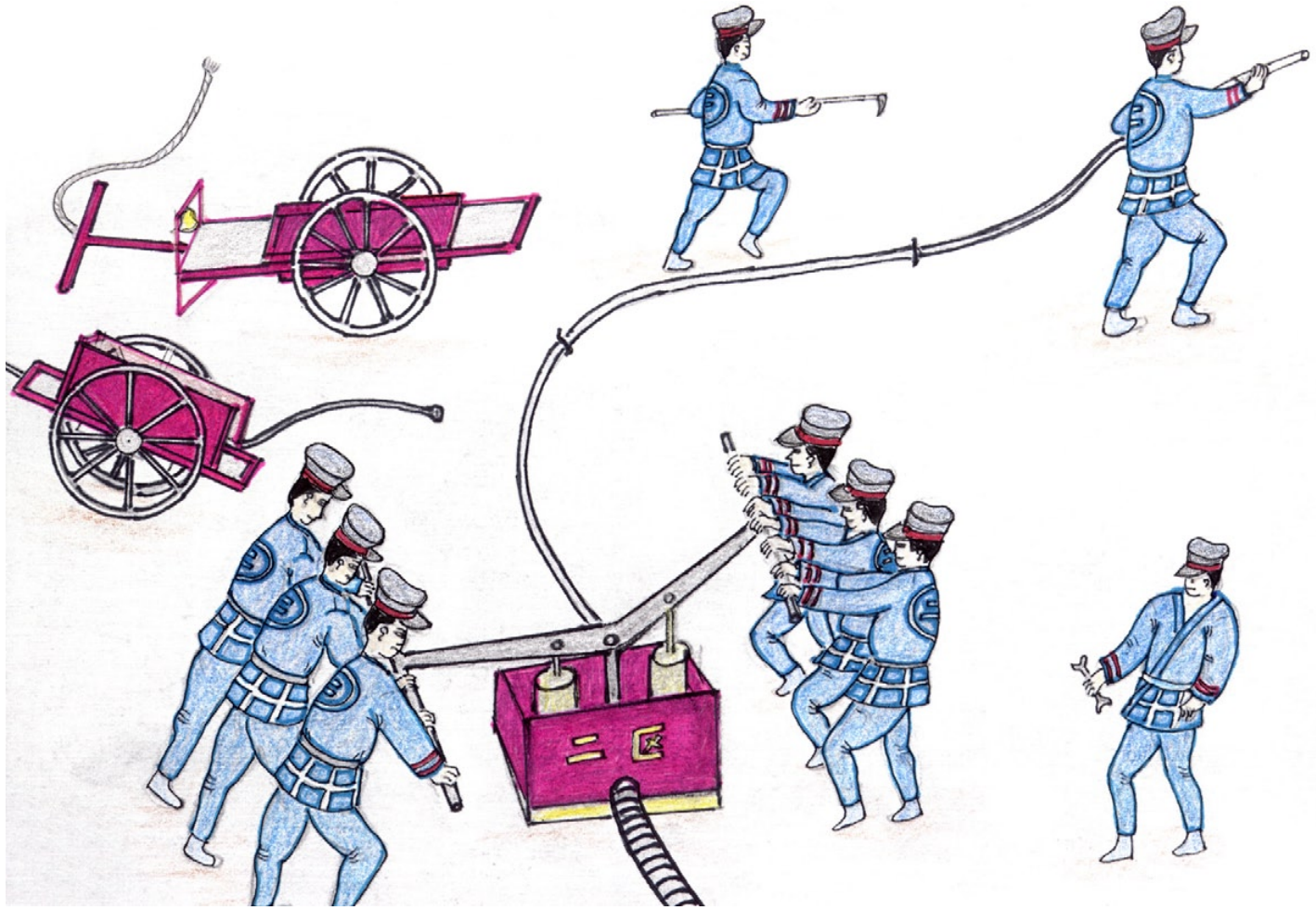
薪(たきぎ)運び

　できた薪は天秤で担ぎ、自宅に持ち帰りました。雑木林は燃料補給の場として使っていたのです。

119

夜回り

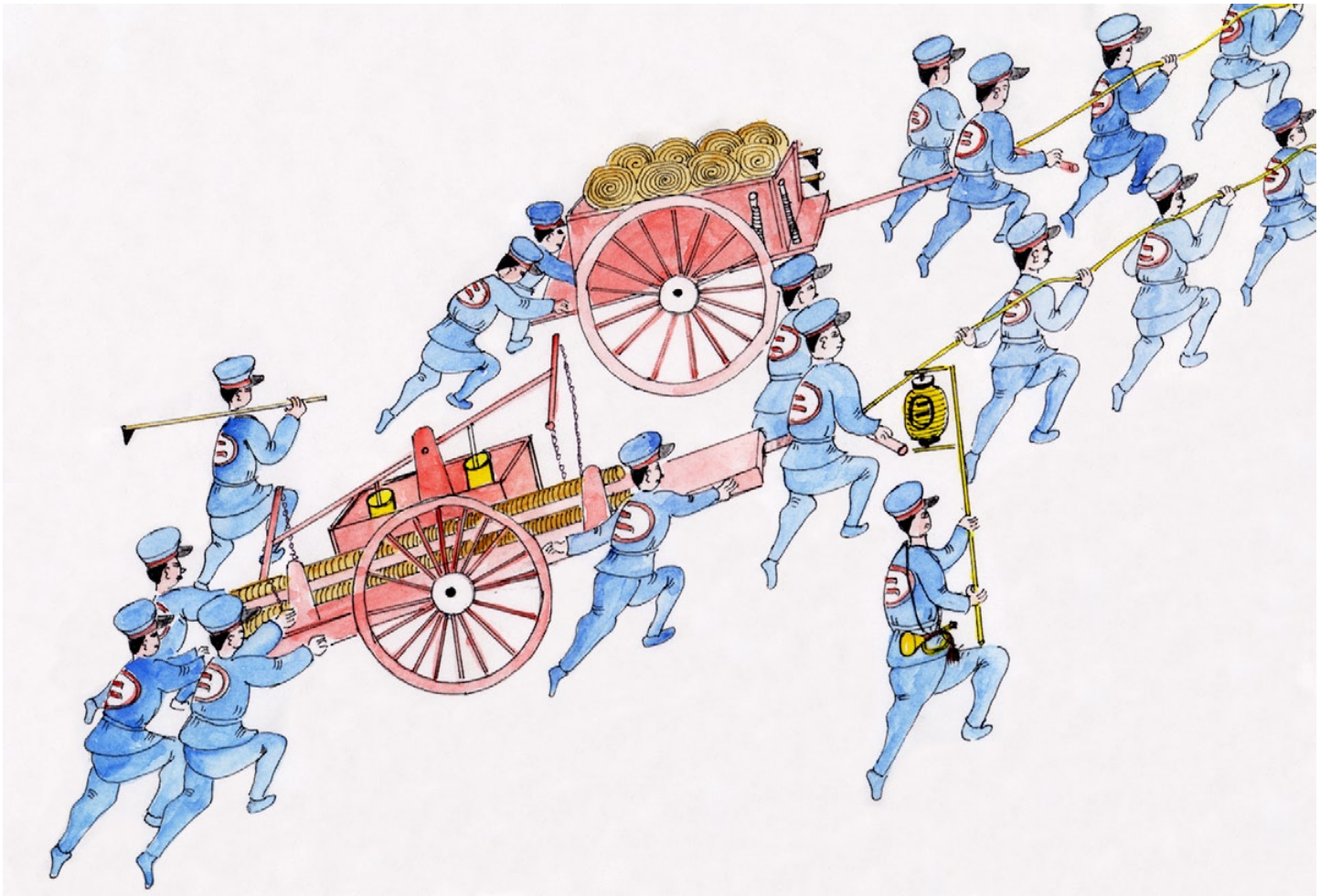
　冬は火を使うことが多くなり、また物騒でもありました。消防団が各家を廻り、カチカチと拍子木を打ちながら「火の用心」と呼び掛けていく習わしがありました。



120

戸主消防団の出動

　それぞれの家の戸主は消防団員として組織されていました。常日頃は農作業をしていますが、いざ火事という時には駆け付けポンプ車を出動し、消火活動をします。そのための訓練もしていました。



121

戸主消防団、手押しポンプで

　火事があると、方々の部落から消防団が駆けつけます。手押しポンプで水を川から汲み上げ消火します。

122

炊事当番の新米消防団員

戸主といっても成りたての人や若い人もいて、入ったばかりの新米消防団員は炊き出しなどを受け持つのが習わしでした。

123

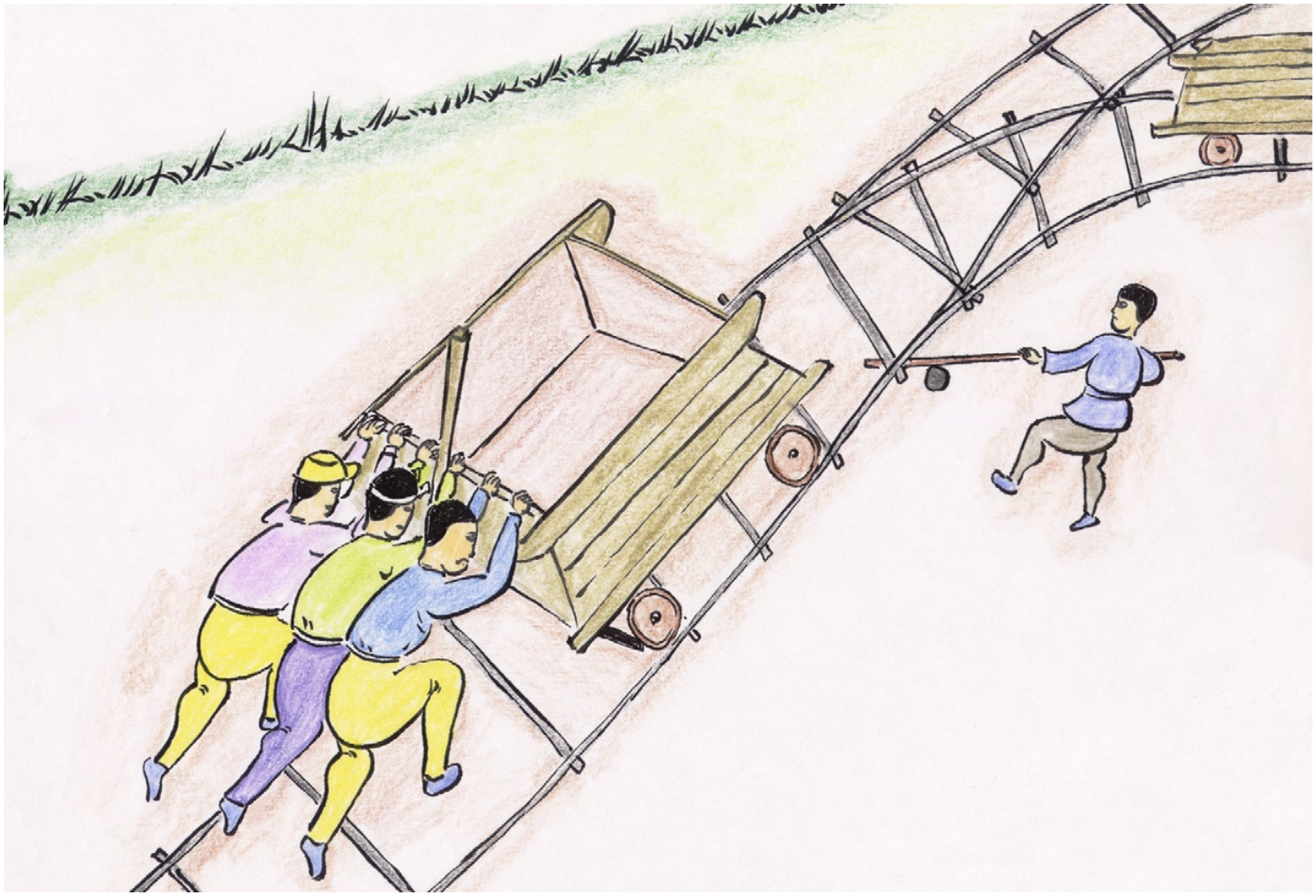
屋根替え用茅刈り

農家の家は茅葺き屋根がほとんどです。何年に一度、屋根の葺き替えをしますが、これも隣近所手伝って、茅刈りからはじめます。屋根葺き用の茅は場所が確保されていました。

124

屋根の葺き替え

　屋根の葺き替えです。古い茅を落とす人、新しい茅を切りそろえて渡す人と分担しながら、煤で真っ黒になりながら作業をしました。



125

岩川坂の改修工事

　村は共同体ですから、さまざまな奉仕活動がありました。岩川坂の改修工事もその一つでした。砂利を運ぶのにトロッコを使いました。

126

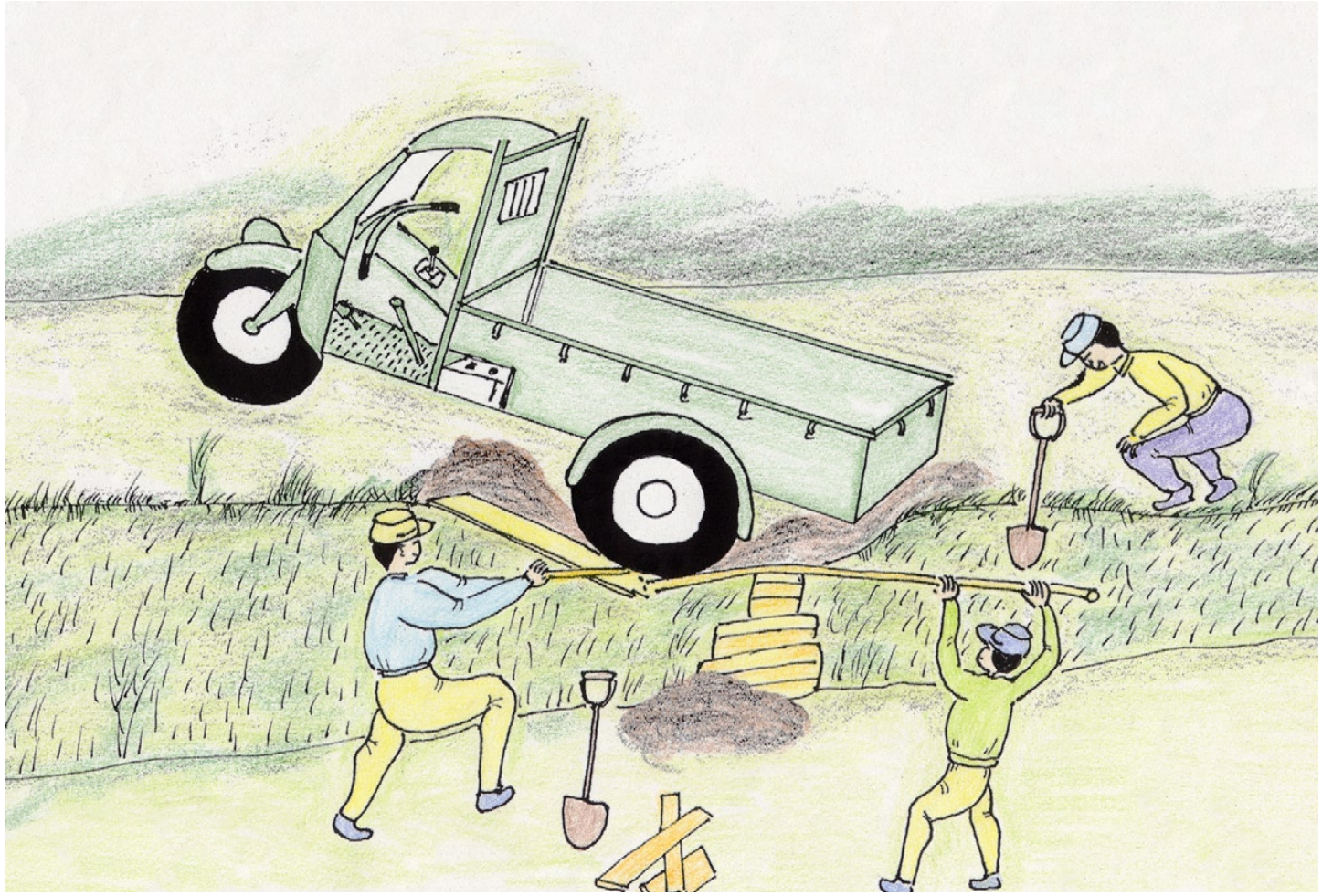
トロッコが脱線

岩川坂の改修工事の時のことです。坂なので、重い砂利を積んだトロッコをレールに乗せて運んでいましたが、車輪が外れて脱線し、けが人が出たことがありました。

127

多摩川へ砂利の積み込み

道路改修や補修のため、多摩川へ砂利とりに行きました。砂利を農協トラックに積めこみます。ところがタイヤがすべってトラックを道路まで出すのが大変です。



128

トラックの脱輪

道路は今のようにアスファルト舗装されていませんでした。土や砂利を固めただけでしたから、トラックが路肩に脱輪することもよくありました。困った時はお互い助け合いの精神で、村びとが駆け付けて持ち上げたものです。

129

道路普請

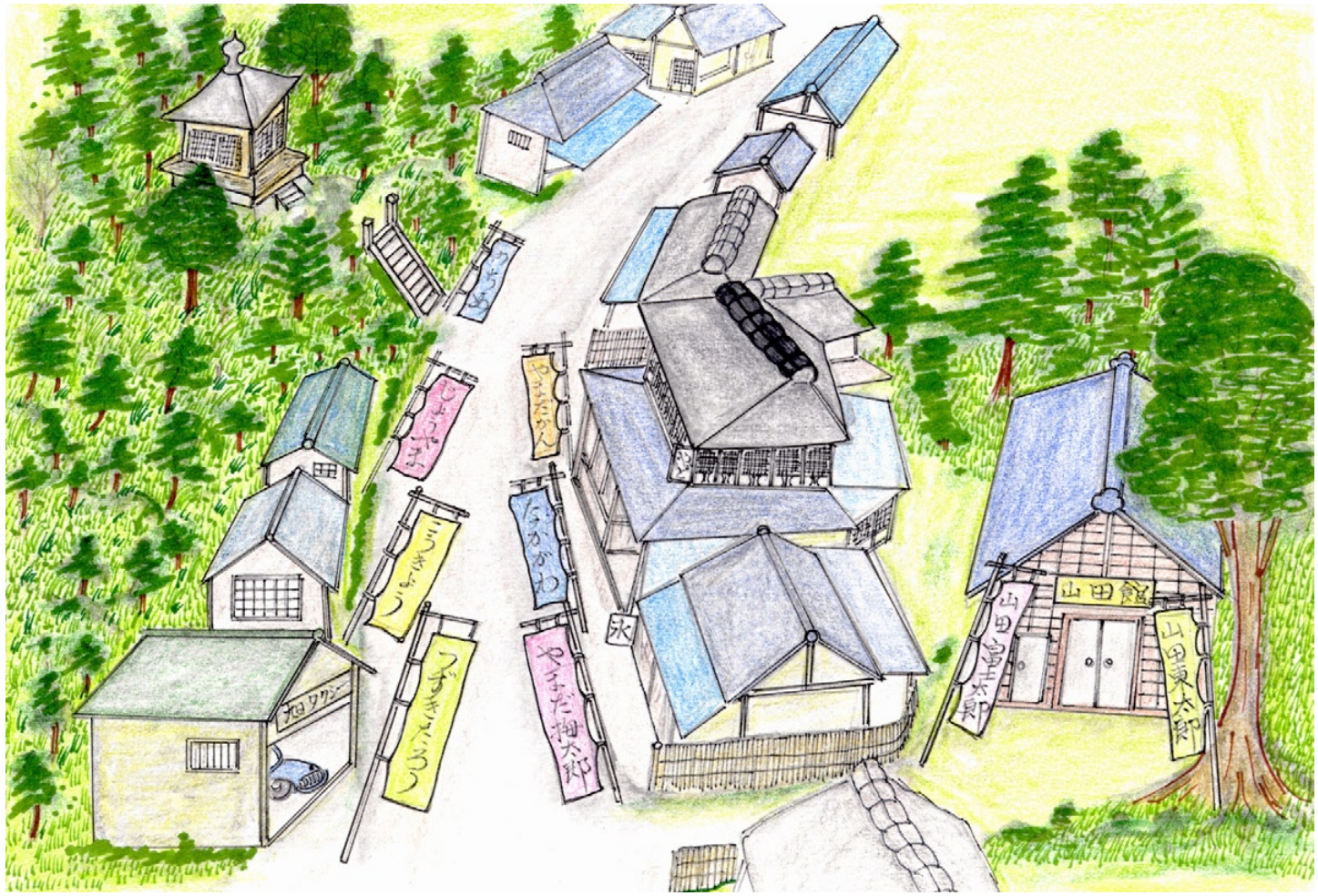
　トラックや牛車などが通る道路はでこぼこになったり、大きな穴ができたり、時々修理しなければなりません。多摩川から運んだ砂利を使って村びと総出で道路普請をしているところです。

130

長徳寺の回想図

寺や神社は村びとにとって心の拠り所でした。

菩提寺である長徳寺も古い寺で、かつては樹木に覆われ、古式ゆかしい佇まいでした。絵は思い出の長徳寺です。

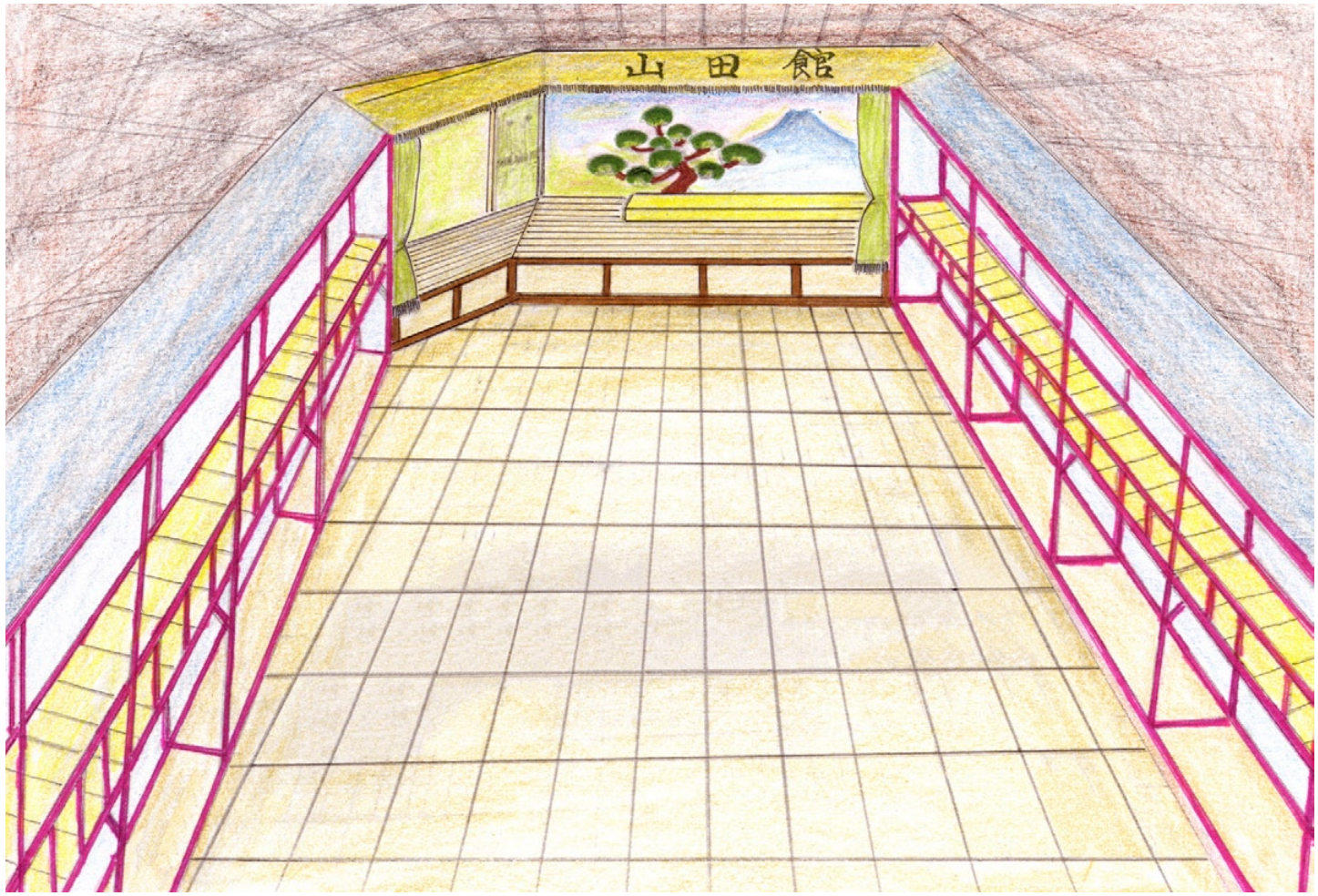


131

のちめ通り

東山田の中原街道にのちめ通りという商店街がありました。いろいろな店が軒を連ね、中に興業館があり、旅芸人の出し物や映画などやっていました。

ちなみに“のちめ”の名称はのちめ不動や交差点名として残っています。昔の地名に由来しているようです。



132

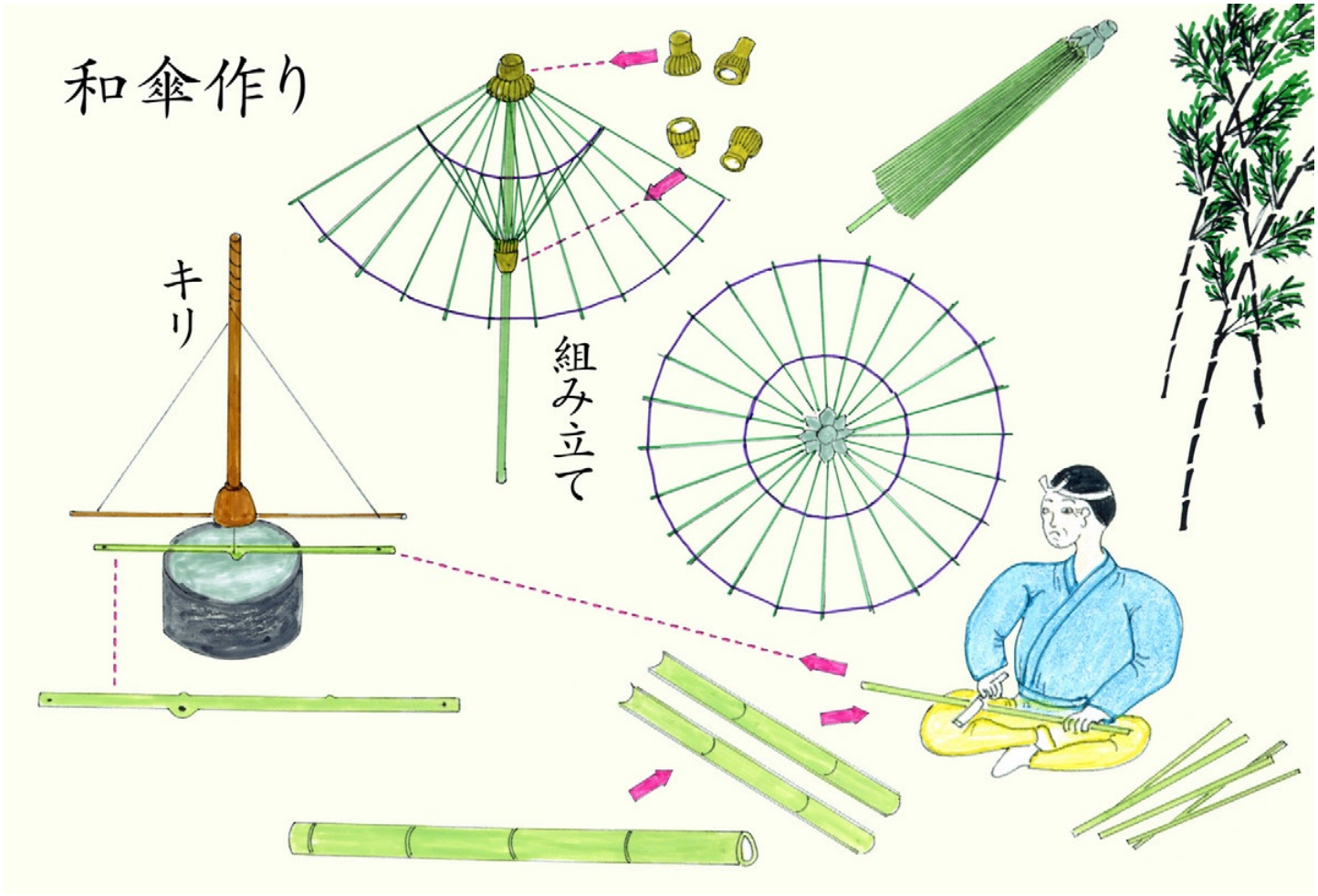
興業館の内部

興業館の内部です。正面に舞台があり、畳敷きの広い観客席があります。座って鑑賞しました。

133

魚屋さん

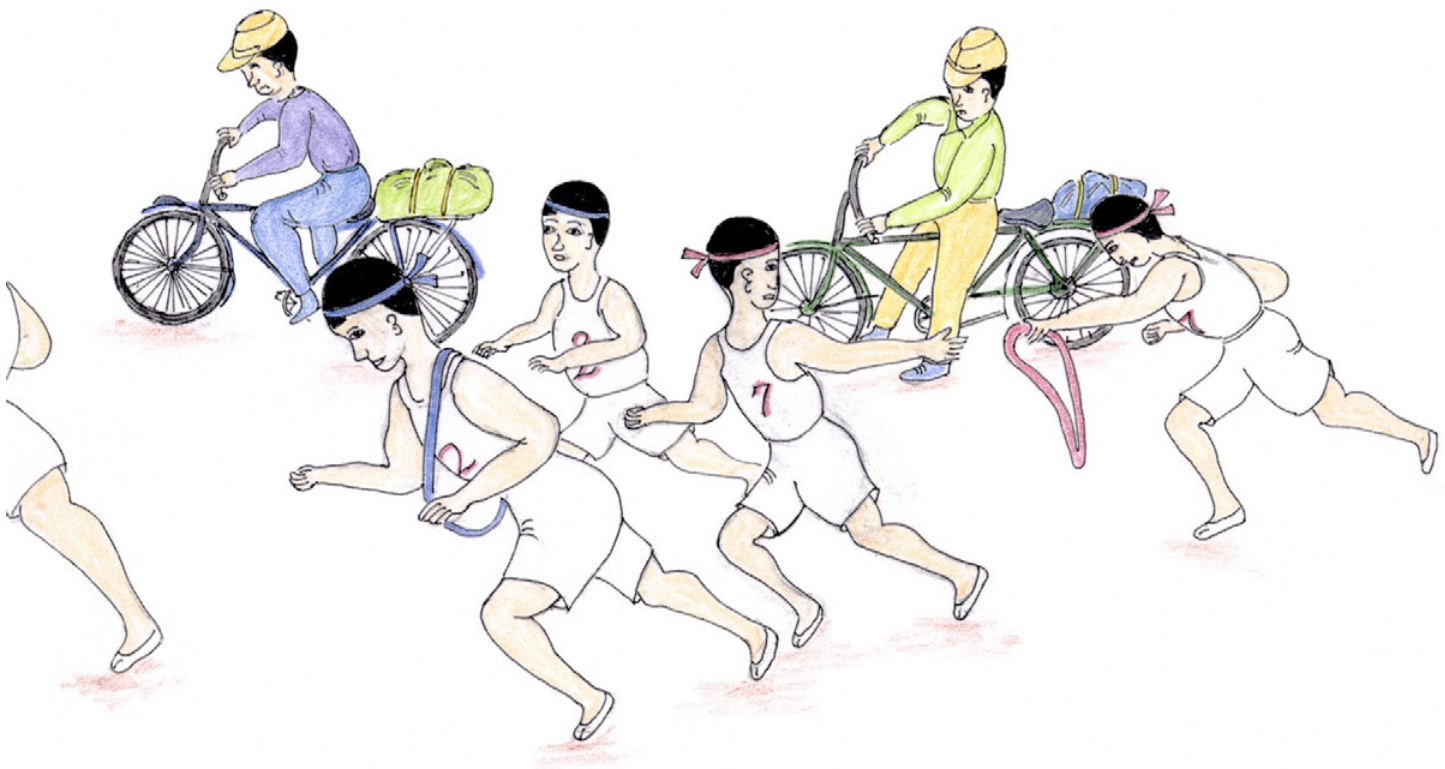
　魚屋さんが盆暮れや祭りの前などに各家を廻ってきました。お勝手から主婦に声をかけます。近くに店がないので、魚屋さんがくるのを待っていました。



137

和傘屋さん

　和傘職人がいました。竹を細く割いて組み立て、油紙を貼って作ります。どこの家にも数本の和傘が置いてありました。

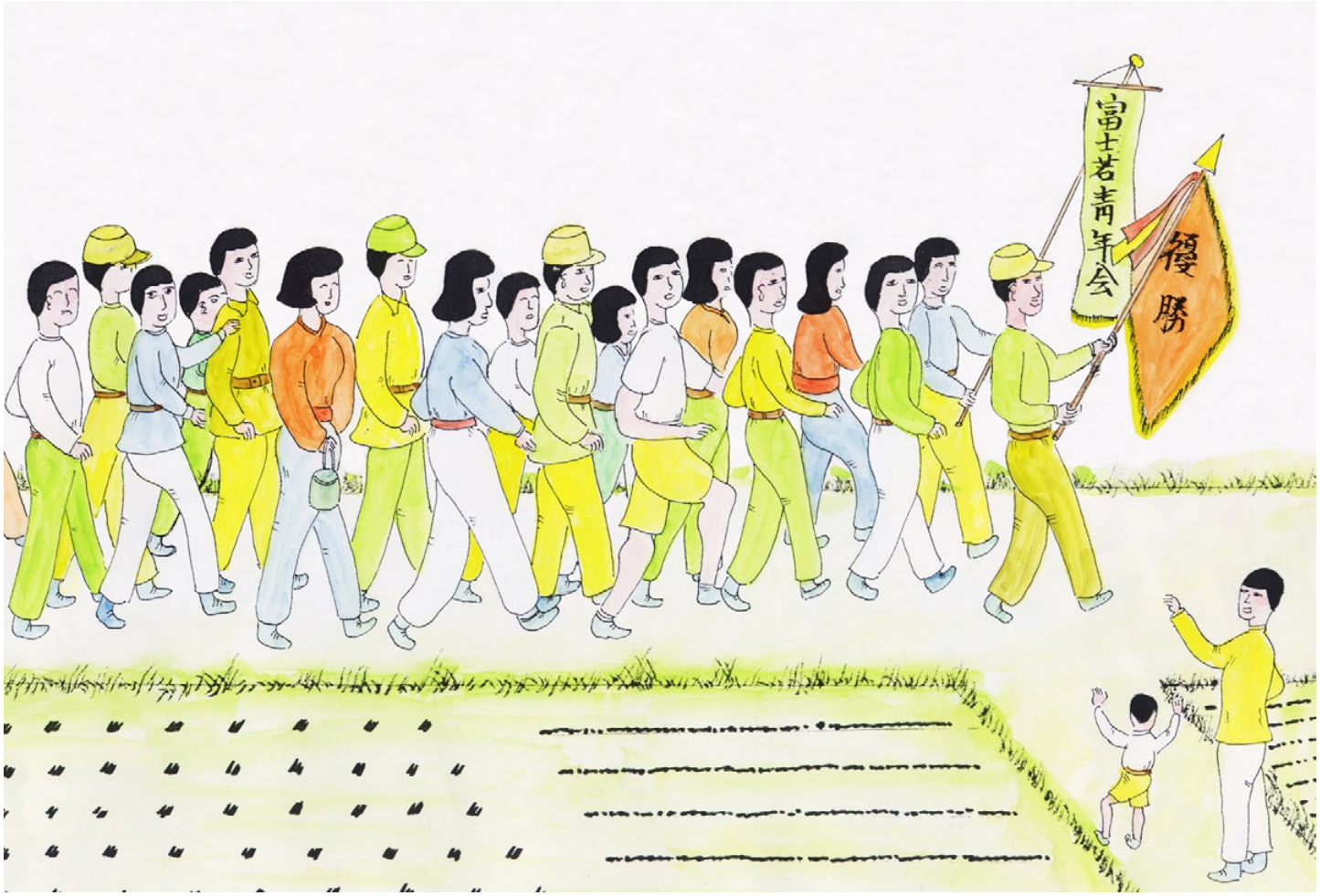


青年団の中川駅伝

135

青年団の駅伝競争

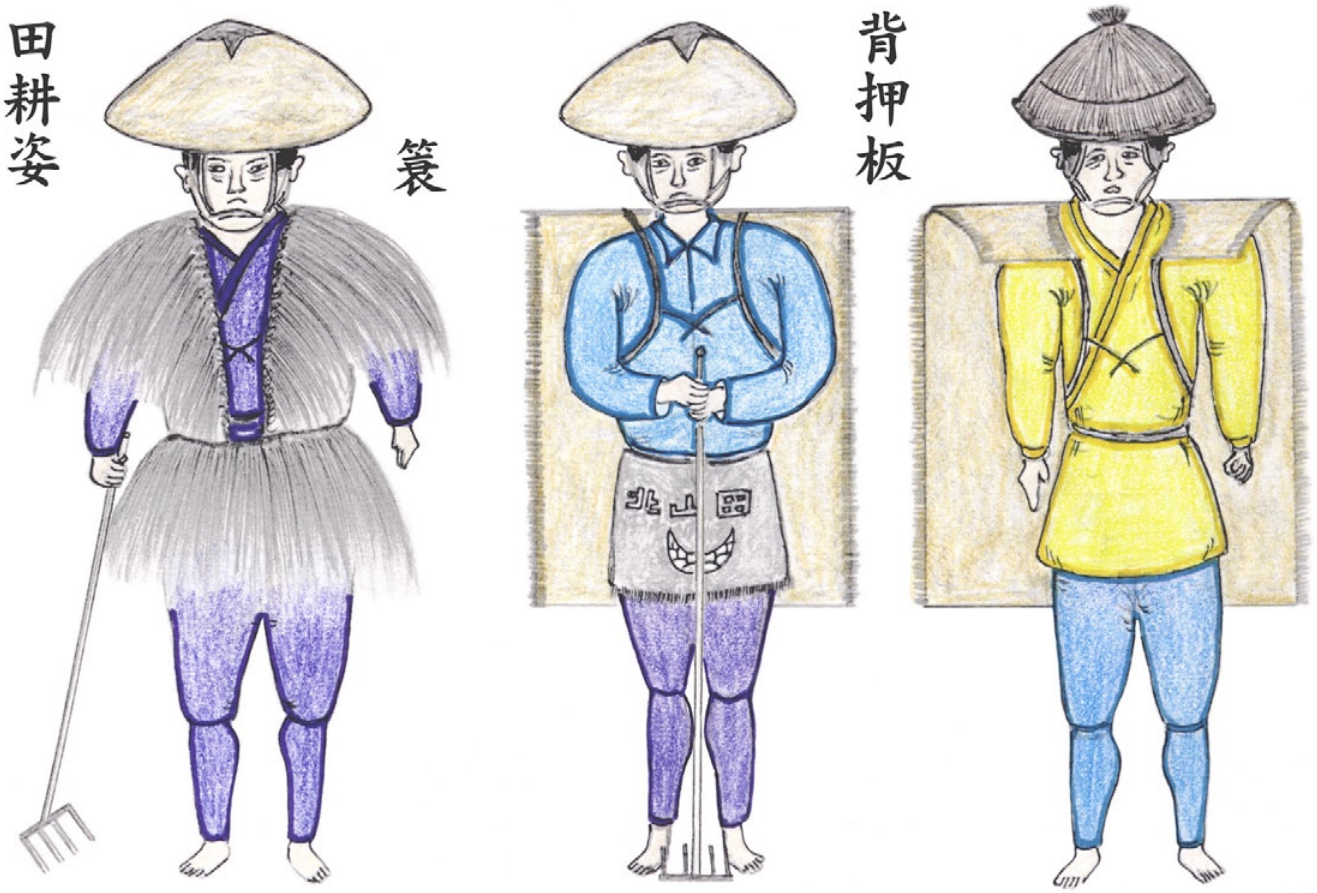
　若者の楽しみの一つに青年団の駅伝競争がありました。部落ごとに選手を選び、競うのです。伴走の自転車の人は励ましの声をかけ、心を一つに走りました。



136

優勝パレード

　駅伝で優勝すると優勝旗を先頭にパレードをします。村道を練り歩き、誇らし気に行進しました。



137

雨の日の農作業姿

雨の日の農作業衣は雨の程度や仕事の内容によって違いました。蓑（みの）、背押板、むしろなどを着て作業をしました。

138

雨の日の農夫

　むしろで作った雨具をつけた農夫です。肩や背部が濡れないように工夫した雨具です。

139

野良で一服

　長時間農作業をした後、ふと腰をあげてタバコを吸う憩いのひととき。自然を満喫し、生きる喜びを感じる時です。

140

立ち話

農道のまん中で立ち話をしている長老。打合せや村の決め事など、家の中よりも自然の中で話した方が、よかったのでしょうか。

141

バケツに種火

戦時中、マッチが不足して火をつけるのに苦労した頃、バケツに種火を入れて野良に出ました。マッチの硫黄が火薬として使われ、家庭には廻らなくなったのです。

142

野良から帰る老夫婦

　一日の農作業を終えて帰路につく老夫婦です。太陽が山に隠れるところで、影が長く伸びています。

143

昭和初期のバス停

　農作業では野良着を着ますが、町に出る時は洋服でした。職業によっては今とあまり変わらず、昭和初期には町ではバスも走っていました。

144

挨拶

都市開発によって新しい家が建ちはじめました。傍らには畑がありますが、振興住宅も増えています。新しく移ってきた人が道で握手をして挨拶しています。農夫も野良着ではなく、今風の服装になっています。

Ⅵ　子供たちの暮らし

145

朝の掃除

　登校前には、子供たちは必ず家の掃除のお手伝いをしました。冬は水が冷たくてつらい仕事でした。

146

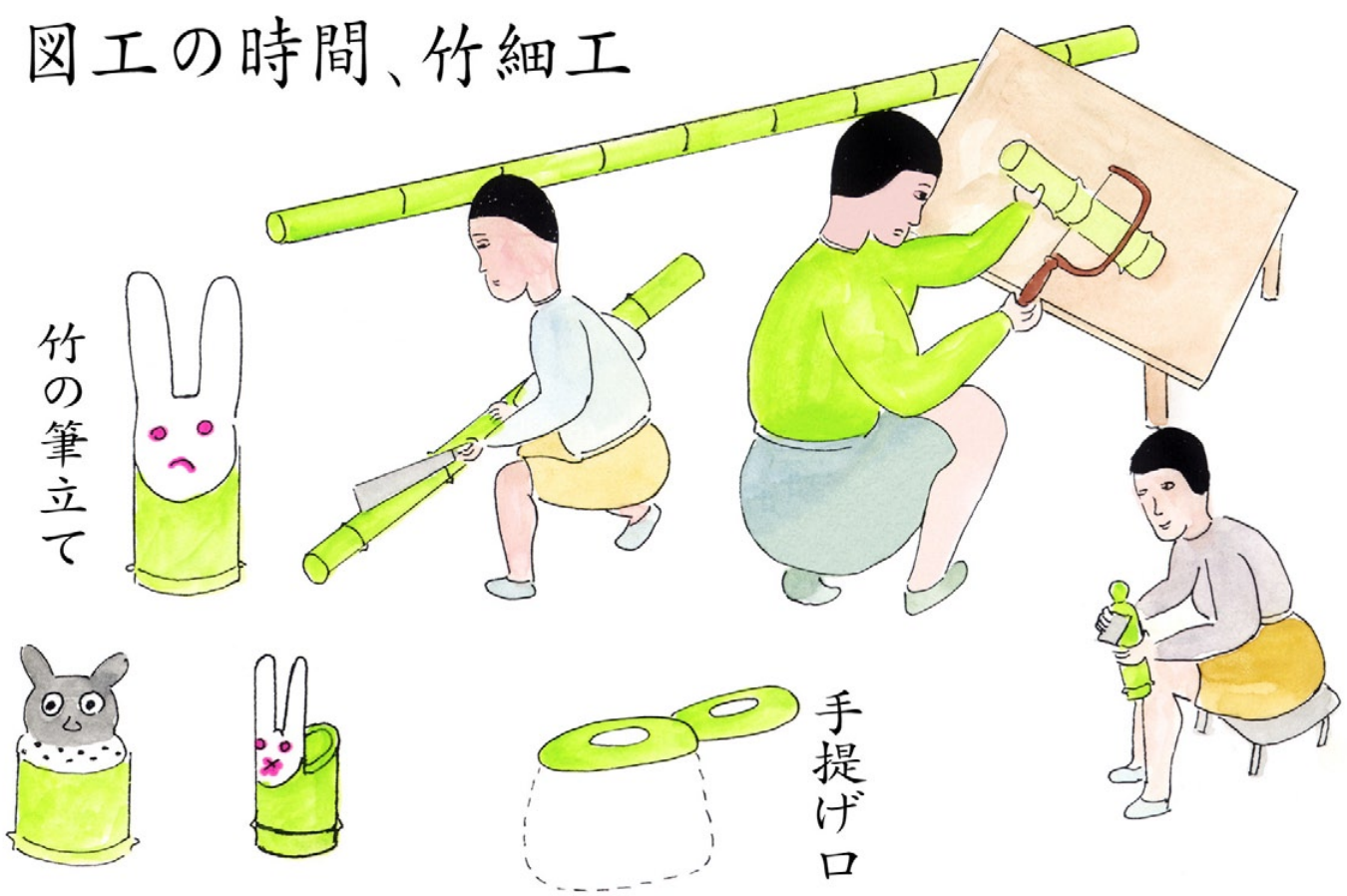
通学風景

通学は年齢やさまざまな事情で服装が違います。着物を着ている子、洋服の子、鞄も手提げ鞄、ランドセル、肩掛鞄といろいろです。履物や帽子も違います。

147

農繁期の通学

子供たちは部落毎にまとまって通いましたが、農繁期になると、子供をおぶって通う子もいました。

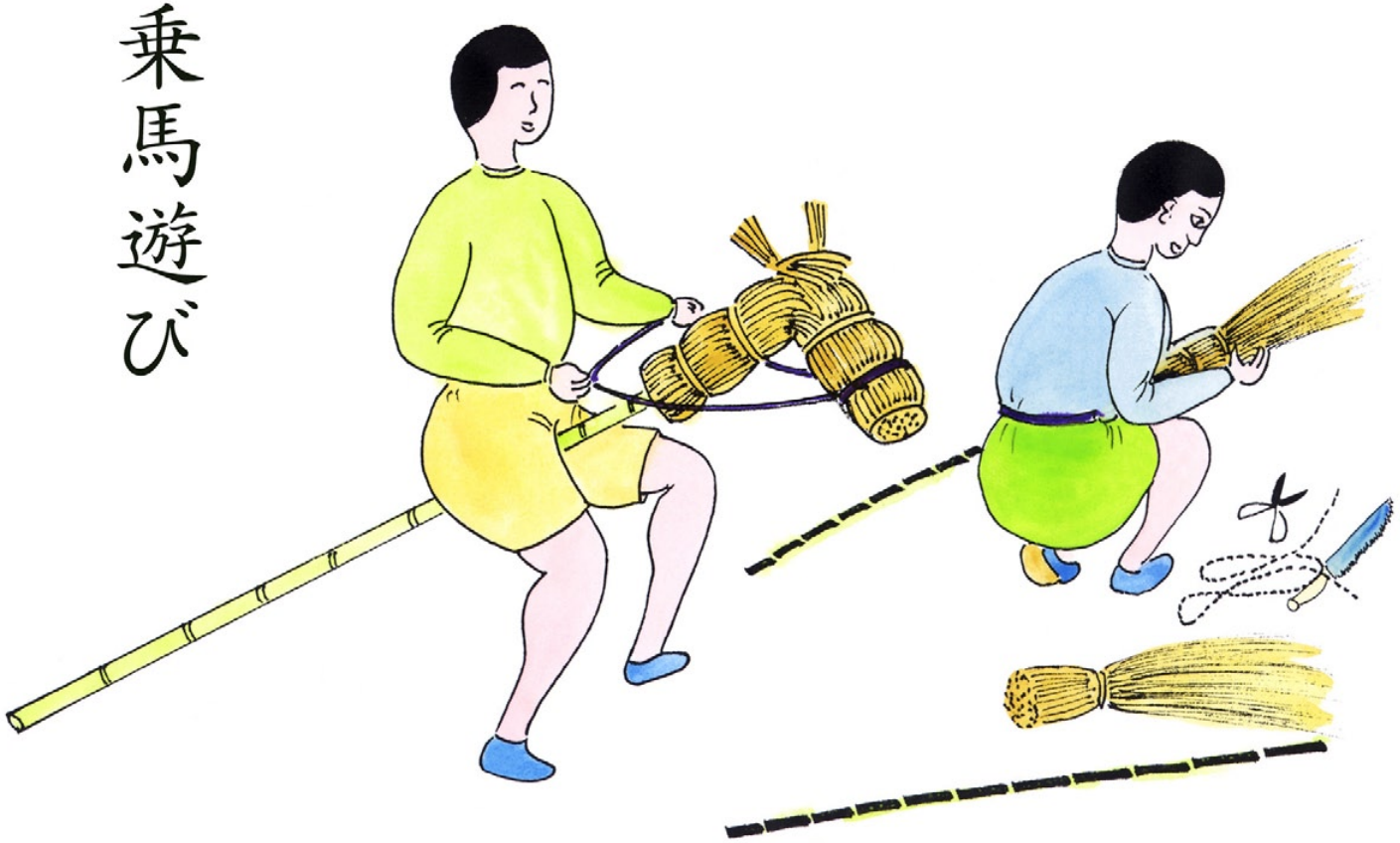


148

図工の時間

　学校での図工の時間は楽しいものでした。竹や板を使っていろいろなものを作りました。

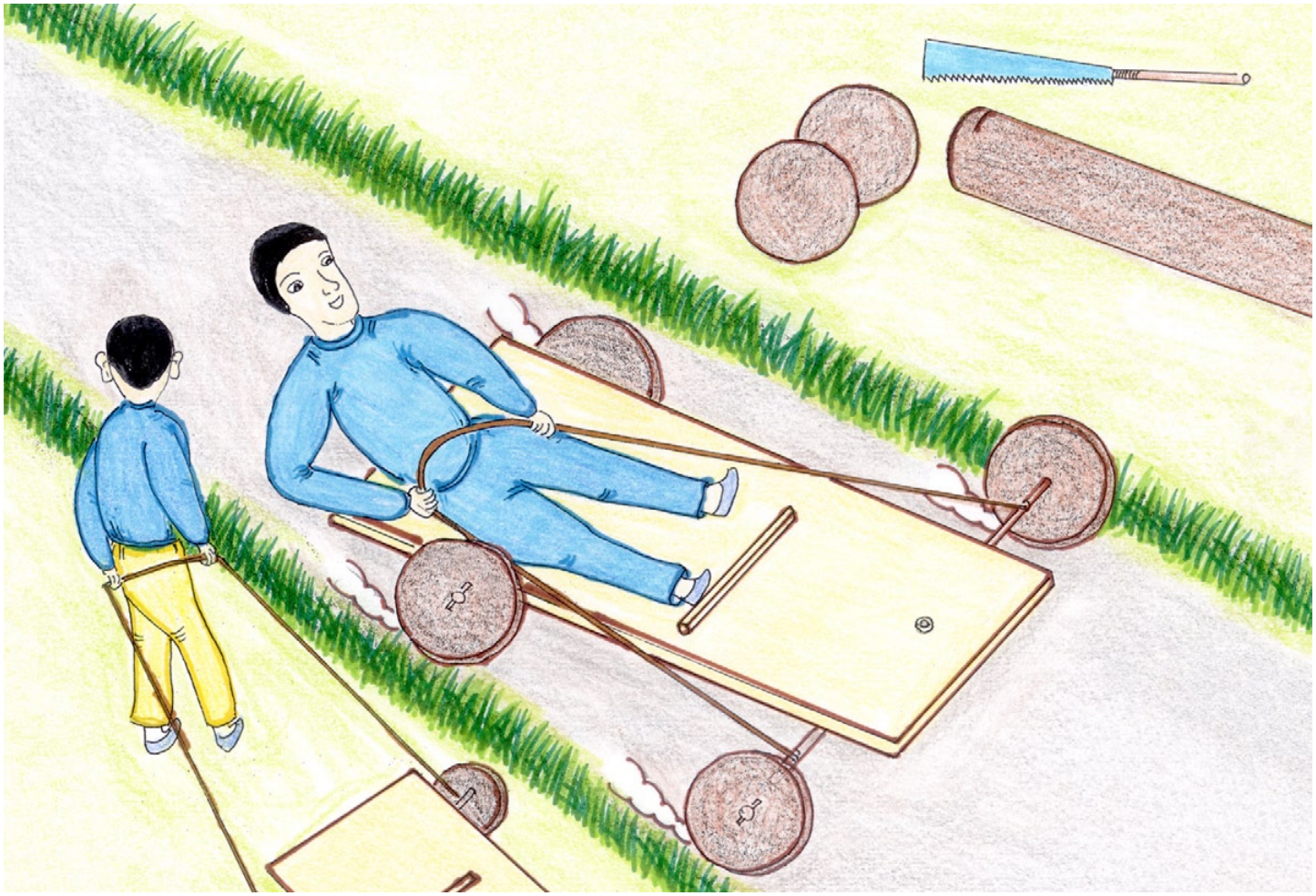
乗馬遊び



149

竹馬作り

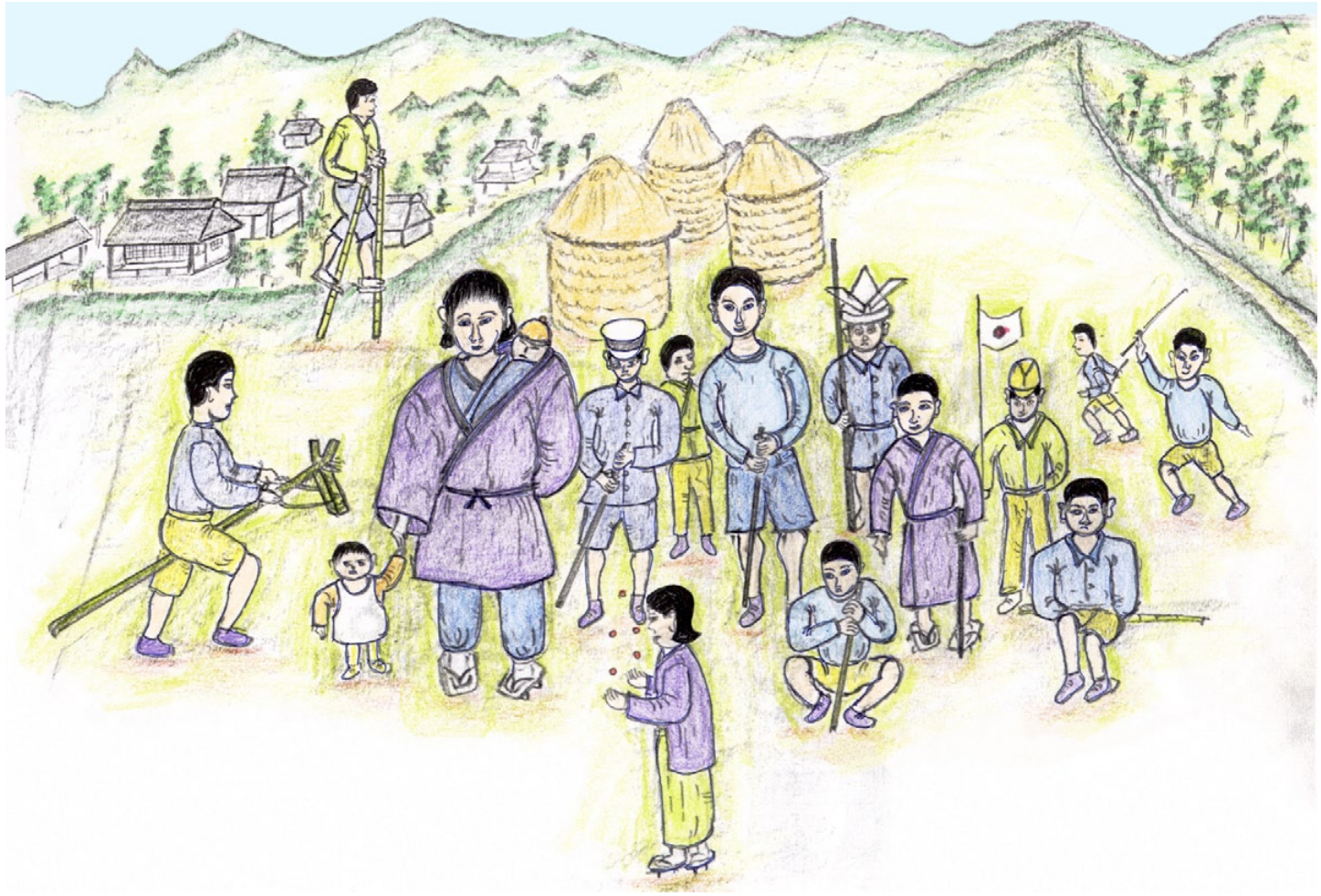
　竹馬作りもしました。稲藁の束を長い竹の先にくくって馬の頭を作ります。これで乗馬遊びをしました。



150

手作りの車

　手作りの車も作りました。板に４つの車輪をつけて、坂道を下って遊びました。



151

遊びのいろいろ

　今のようにおもちゃは豊富ではありません。竹や板など家にあるもので工夫して遊びました。

152

コマ遊び

　コマ遊びは男の子の間で流行りました。コマを戦わせて相手のコマを倒すと勝ちです。力の入れ方や方向など、練習が必要でした。

153

女の子の遊び

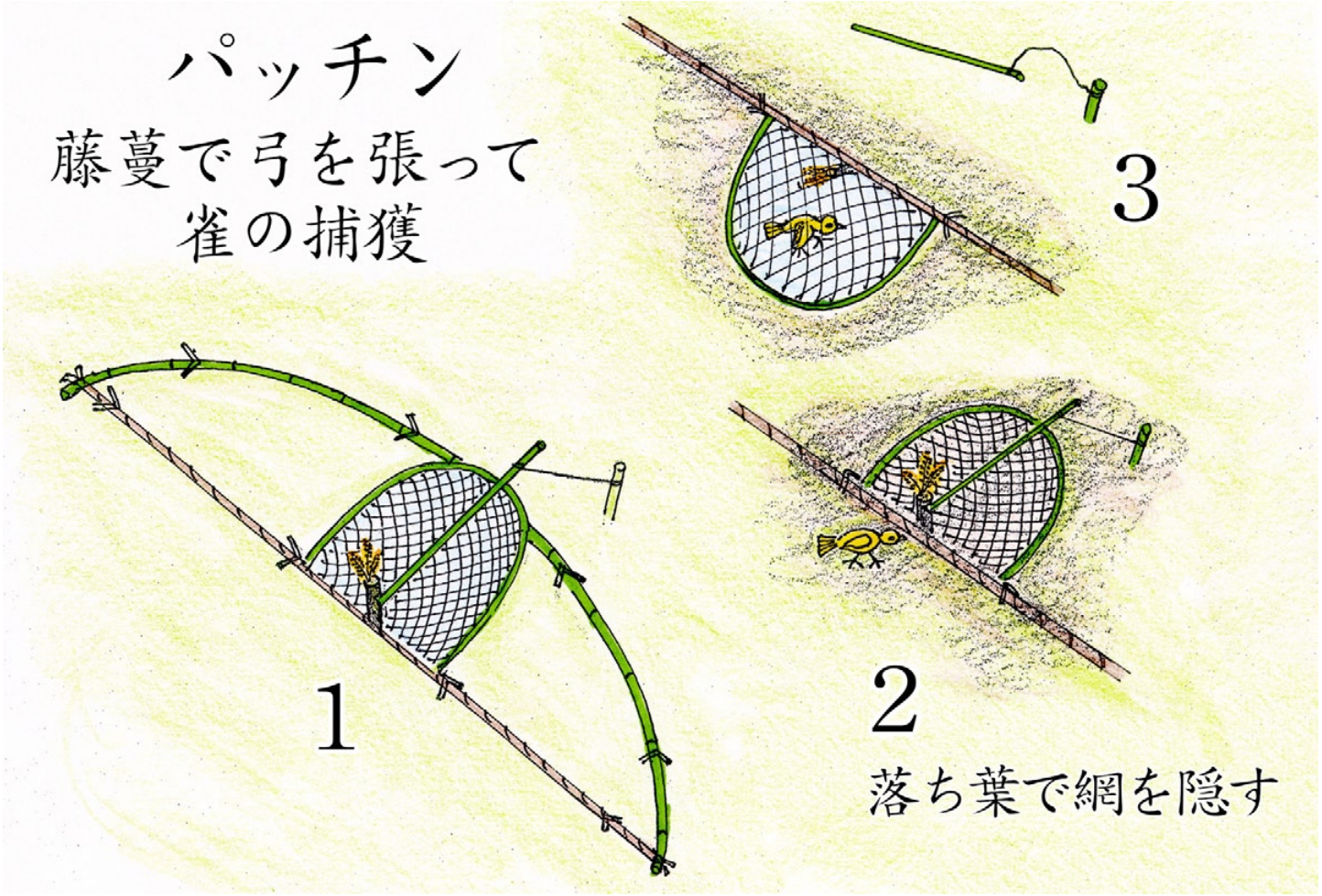
　男の子の活動的な遊びに対して、女の子はお手玉やキシャゴ（おはじき）など、静かなものが好まれました。

154

海老蟹捕り

今のニュータウンでもよく見かけるザリガニことを、以前この辺りでは海老蟹（エビガニ）といっていました。

春早い田圃では、冬眠から覚めた海老蟹が穴をあけて出ようと土を掘り起こします。土が盛り上がっているので、海老蟹がいることがわかります。その穴に手を入れて捕るのです。面白いほど捕れました。



155

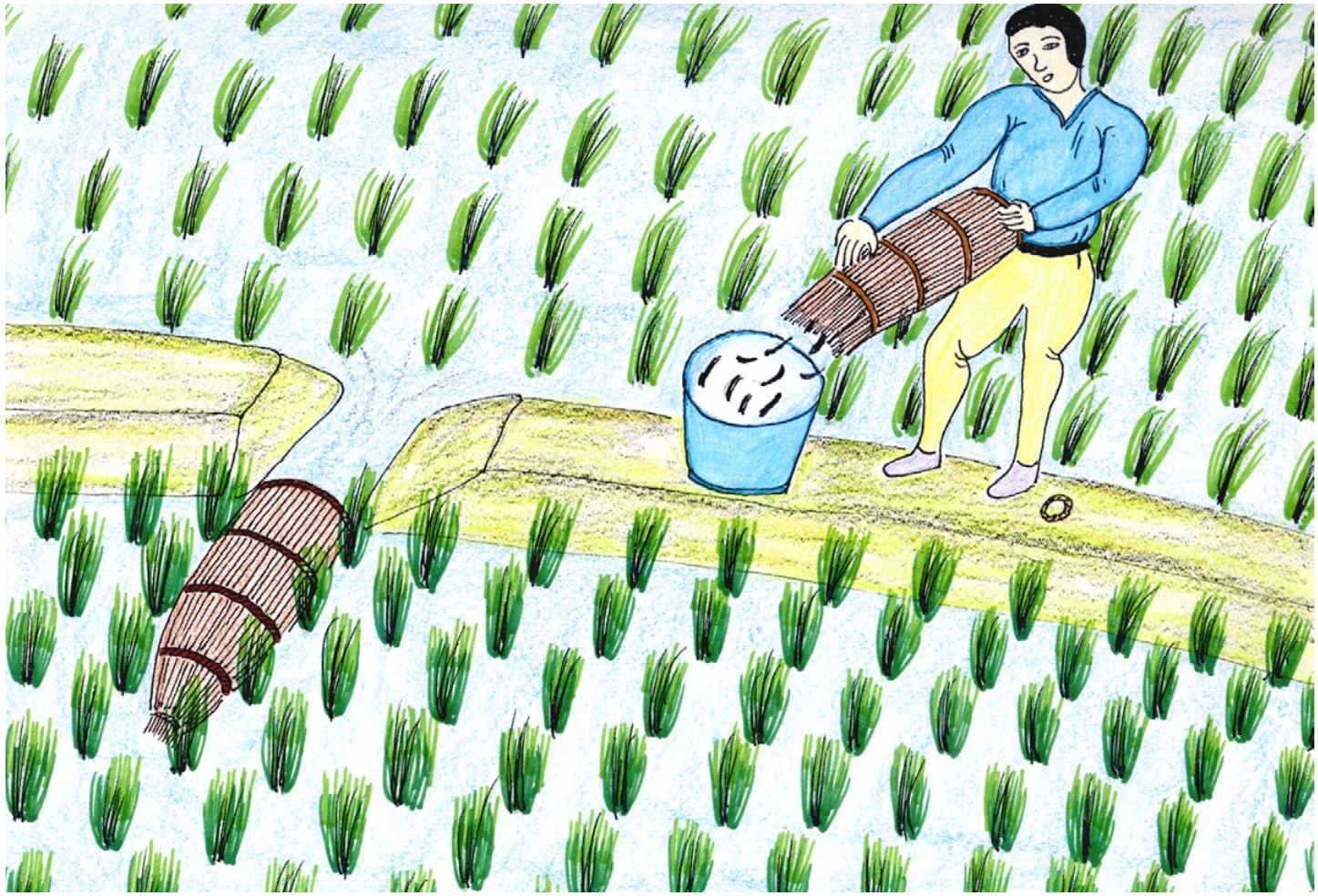
雀捕り道具―パッチン

雀捕りも子供たちの遊びでした。パッチンという罠を作って仕掛け、雀がかかるのを待ちます。パッチンは藤づるを弓のように張り、網をはったところに竹筒をつけ稲穂をさしておきます。雀が稲穂をつつくと、網が倒れる仕組みの道具です。

156

ざるで雀捕り

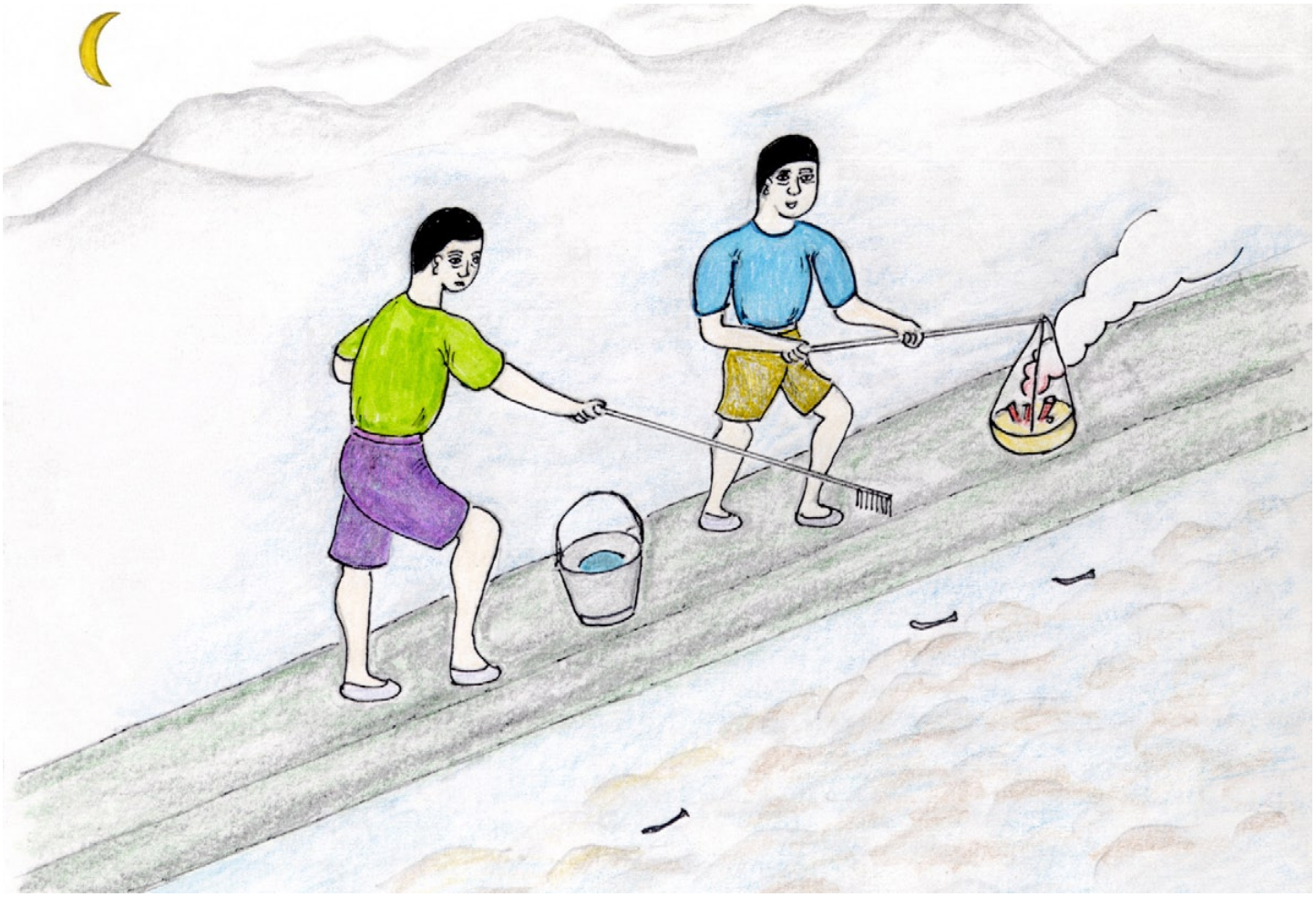
　ざるを使って仕掛けることもしました。ざるを立てた棒にひもをつけ、離れたところで雀がざるに入るのを待ちます。餌につられて入ったところをパッとひもを引くのです。



157

ドジョウ捕り

田植えも終えて稲がぐんぐん成長する頃、大雨の後はドジョウがたくさん捕れました。クロの切れ目にやなを仕掛けておくと、どこにこんなにたくさんのドジョウがいたのか、と思うほどかかっていました。ドジョウ汁などにして食べました。



158

夜のドジョウ捕り

夜のドジョウ捕りも面白いものでした。二人で出かけ、一人は灯りでドジョウを誘い出します。そーっと進むと泥の中から灯りに誘われてドジョウが出て来ます。後ろにいる人がすばやくドジョウブチという道具で突き刺して捕るのです。

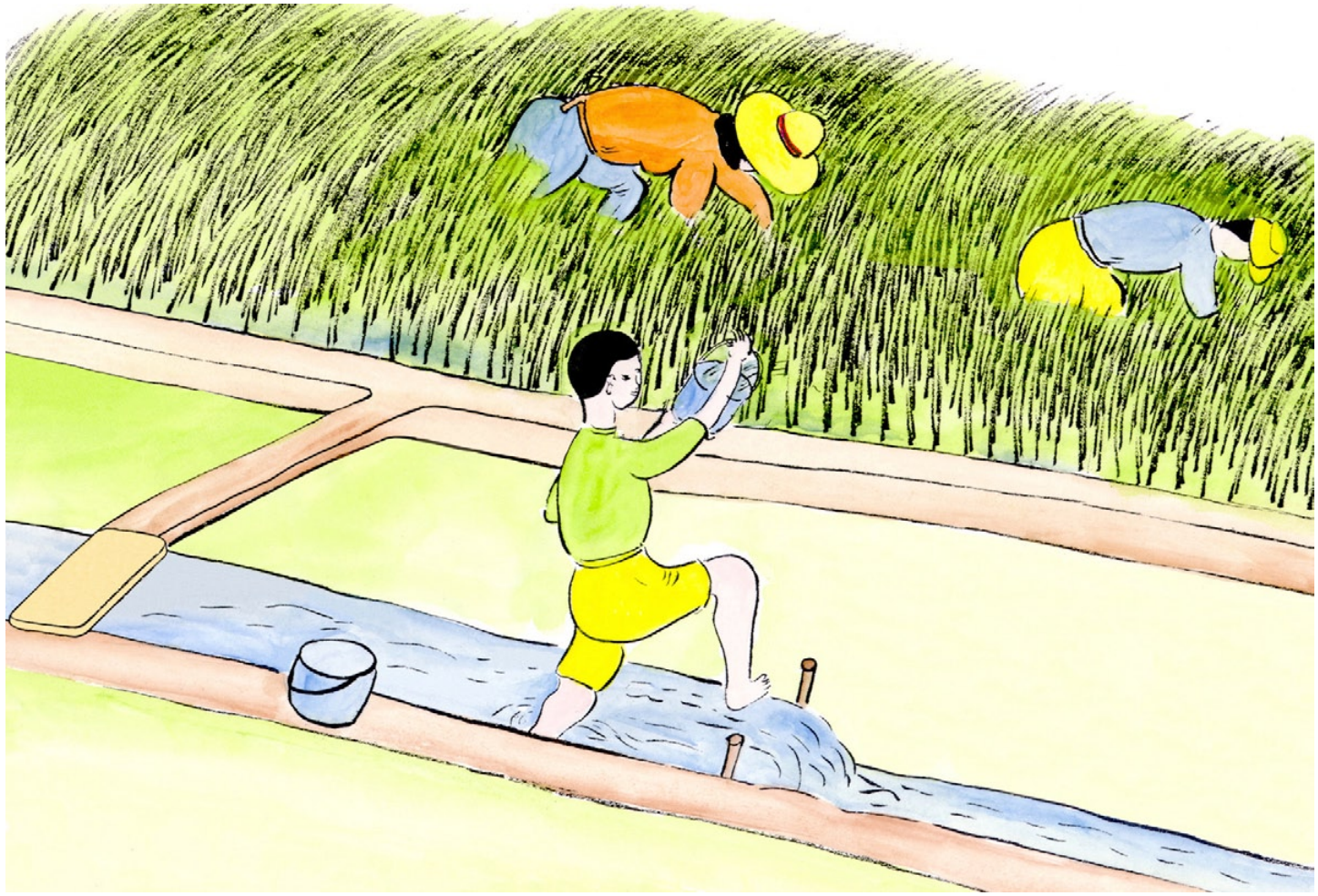
ドジョウブチは竹の先を二つに割り、間に針を挟んで麻ひもで固定した手づくりの簡単な道具です。

159

ウナギ捕り

昭和初期頃の鶴見川や支流の早渕川にはウナギが上ってきました。ウナギ捕りの道具は絵に描いたとおりで、単純な仕組みになっています。細長い網の中に餌を入れて誘い出して捕るのです。

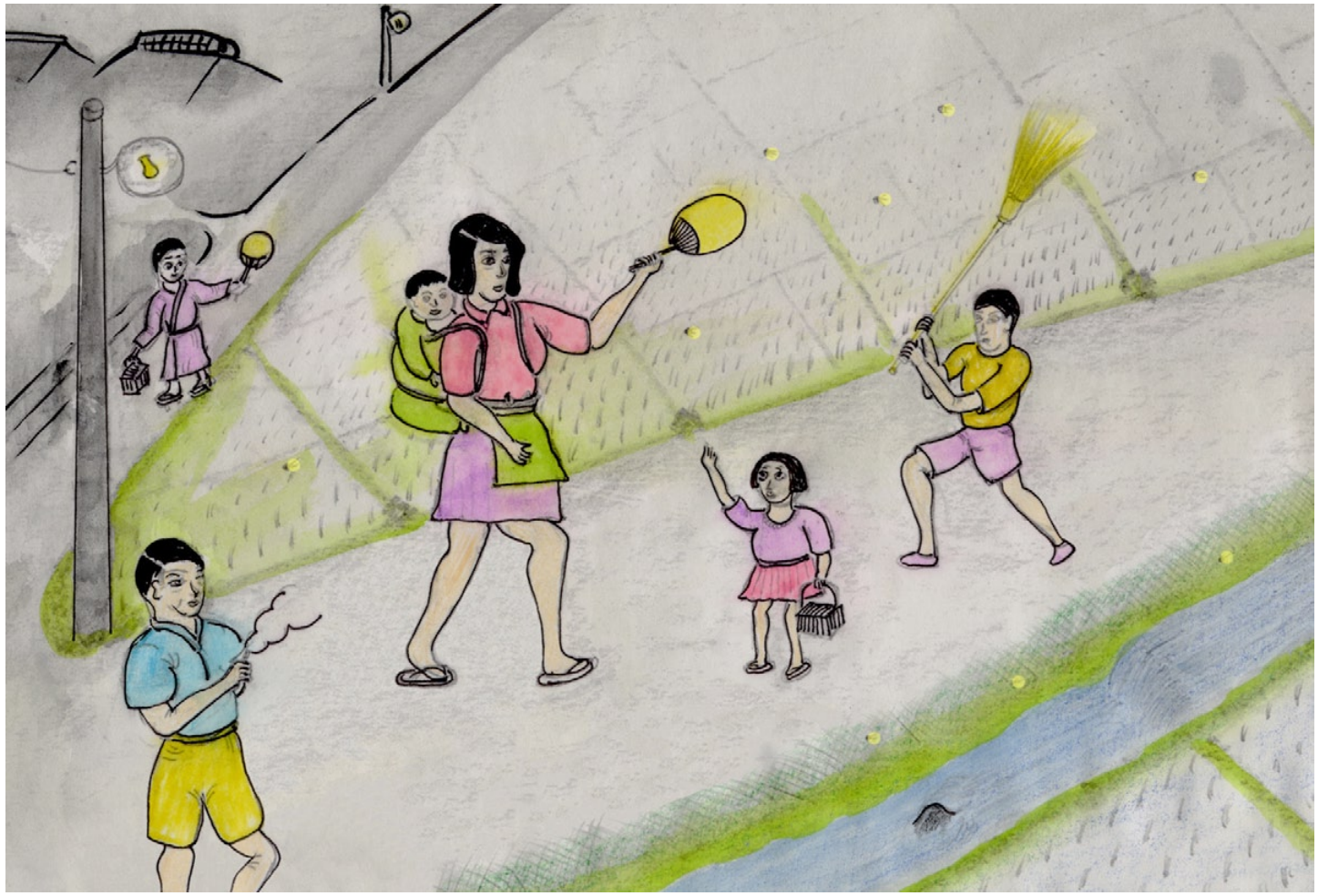
おじいさんと子供がウナギ捕りに出かけ、一生懸命おじいさんがウナギのいる場所を探しています。ウナギはたいへんなご馳走でした。



160

田圃の水汲み

　小学生ともなるとお手伝いもだんだん増えてきます。小川から田圃に水入れの仕事もよく言い付かりました。子供は遊びたい一心です。親から何回入れたら遊んでいいよ、と言われて一生懸命やりました。田圃では大人が田の草取りをしています。

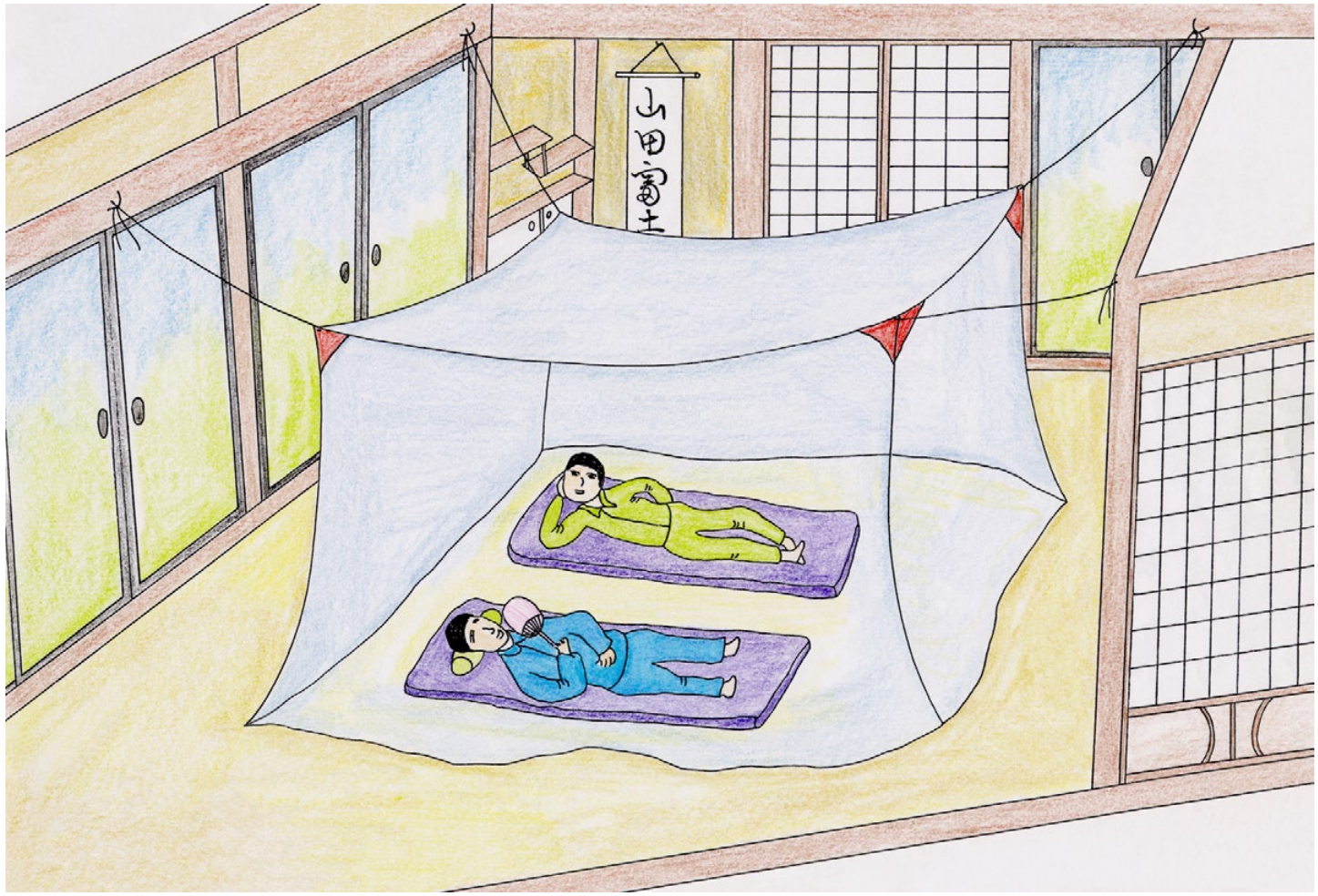


161

ホタル狩り

　初夏になるとホタルが出てきます。今の北山田交差点のあたりには、群れて光っていました。夕闇が辺りを覆いはじめると、子供たちはほうきやうちわを持ってホタル狩りに出てきます。

　捕ったホタルは虫篭に入れたり、家の中に放したりしました。



162

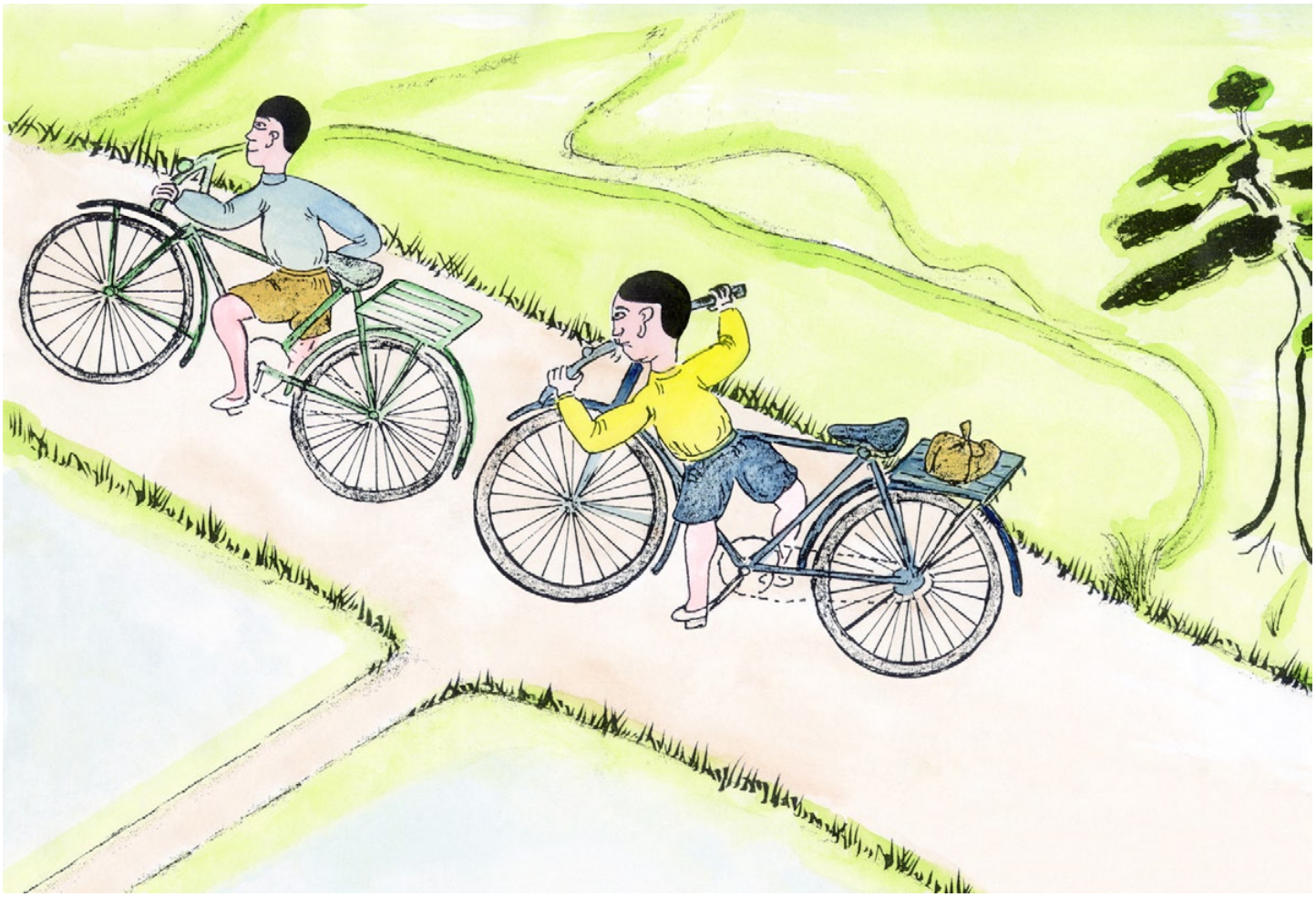
蚊帳（かや）

　ホタルが出る頃は蚊などの昆虫も出始め、夜は刺されて眠れません。そこで蚊帳をつって眠りました。蚊帳の中にホタルを放し、光の点滅を楽しみながら、兄弟で今日の出来事など話ながら何時の間にか眠りについたものです。

163

自転車の横乗り

　自転車は家族共同で使いました。子供用の自転車は買ってくれません。そこで子供は横乗りを覚えました。大人の自転車を乗れることは子供にとって得意なことでした。



164

自転車の三角乗り

　小さな子も三角乗りで乗りました。自転車が乗れるようになると、お使いや手伝いを自転車を使ってやりました。小さな子が横から足を入れギッタンバッタン半分づつペダルを踏んで走っています。

165

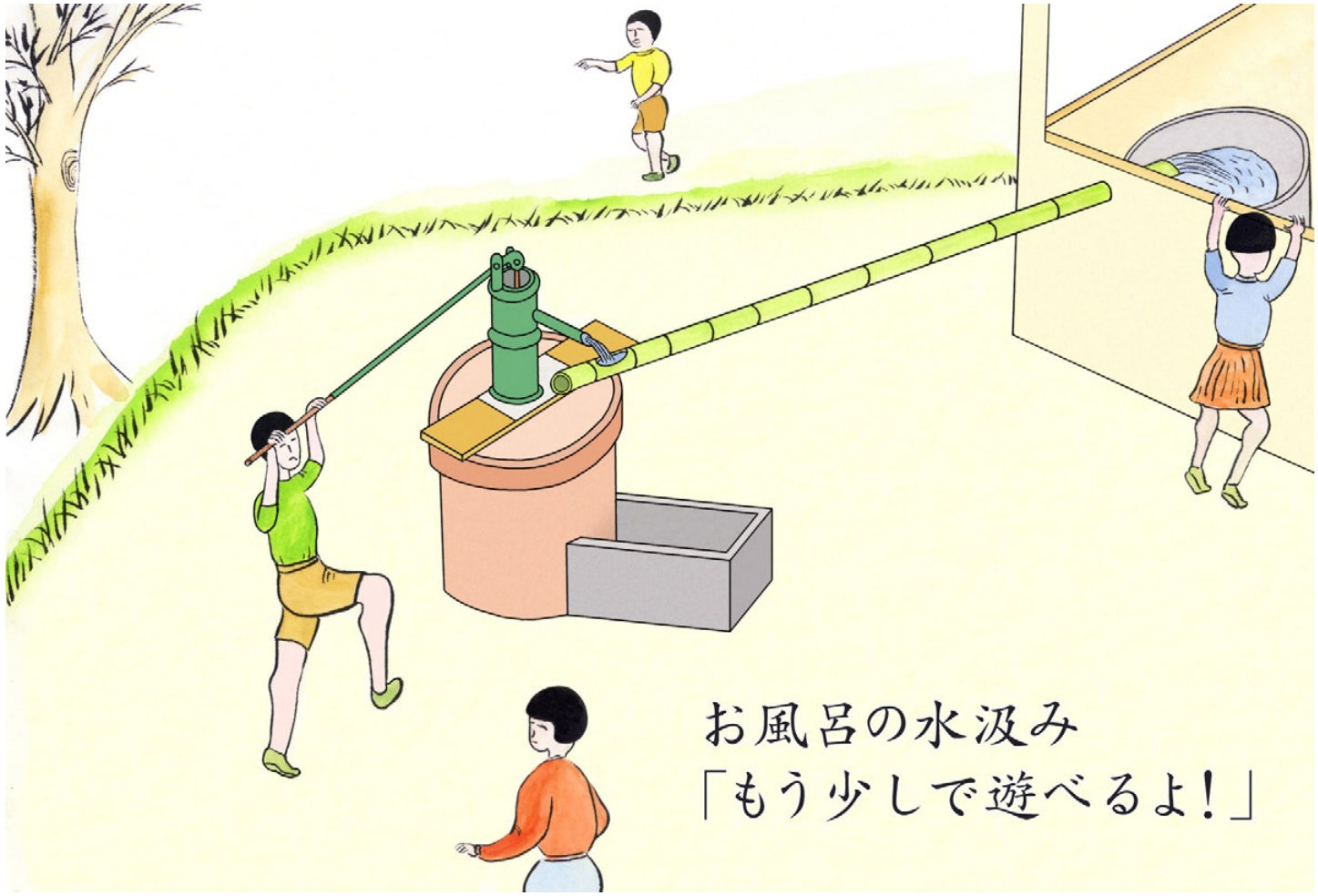
野良へお手伝い

　親は朝から晩まで野良で働いています。学校から帰ると畑に来るように言われています。篭を背負って大急ぎで畑に出かけるところです。小さな子はお茶の道具を持っています。

166

水汲みの手伝い

　井戸からお勝手の水桶に水を汲む仕事もありました。お母さんと一緒に水汲みをしています。重くて大変ですが、頑張ってやりました。



167

お風呂の水汲み

お風呂の水汲みも子供の仕事でした。手桶で汲んでいたものを、竹筒を使って汲んでいます。兄さんがポンプを上下し、妹が水加減を見ています。よその子が遊びに誘っていますが、もう少しであそべよと、一生懸命水汲みをしています。

168

風呂焚き

お風呂の水汲みがすむと、風呂焚きです。親が野良から帰る前に沸かさなければなりません。焚き口の係の女の子は薪をくべながら教科書を開いています。男の子は湯加減を見ています。

169

子守り

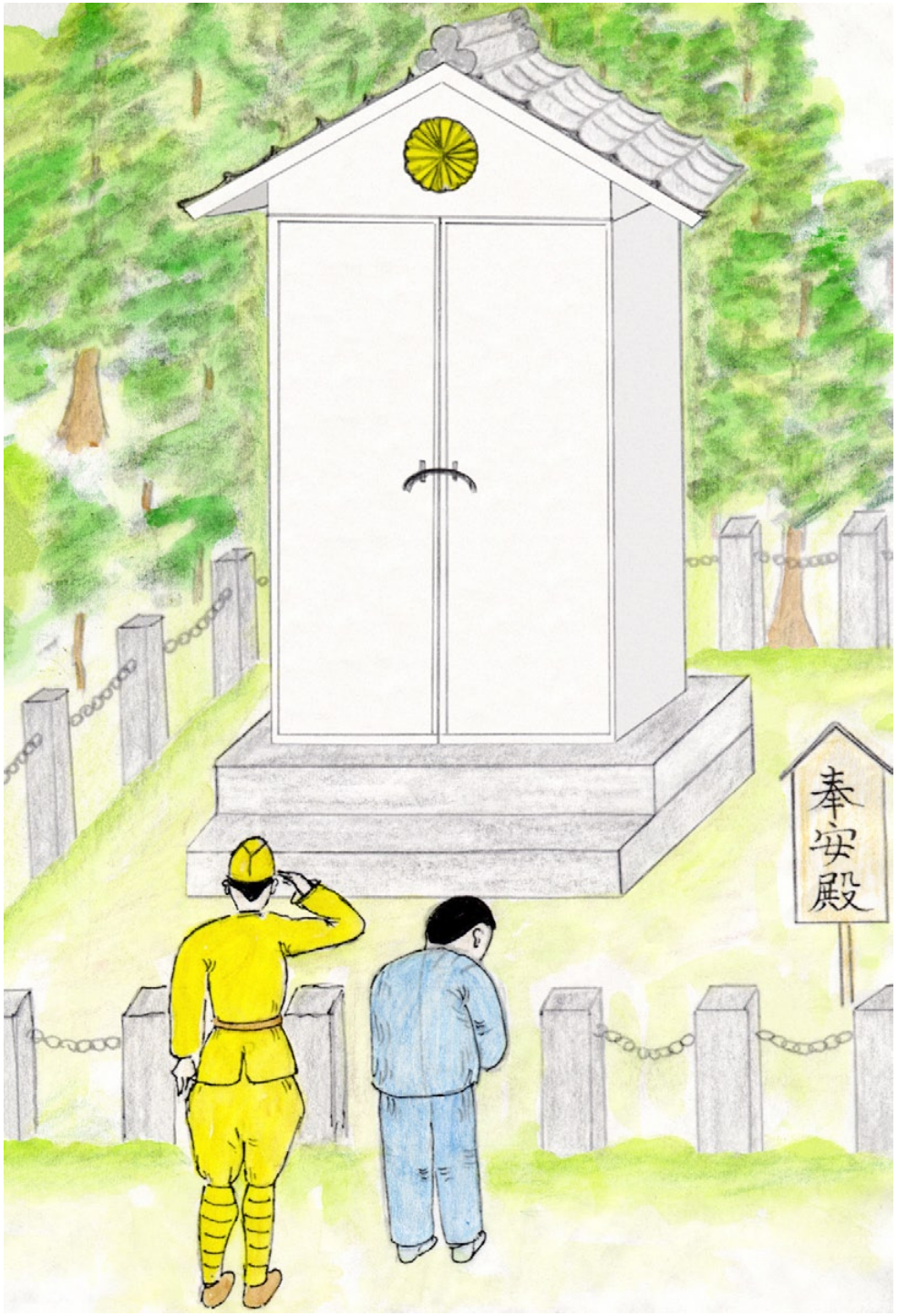
　大きな子は小さな子を見るのは当たり前でした。歩けない乳児はおんぶして、歩けるようになると一緒に遊んで子守りしました。勉強熱心な女の子は子供を見ながら教科書を読んでいます。

170

学校で奉仕

学校で、暗渠造りがありました。掘った溝に竹の棒を数本束ねた上に藁を敷き、踏み固める作業です。簡単な土木工事でした。

Ⅶ　戦 争 の 時 の 話



171

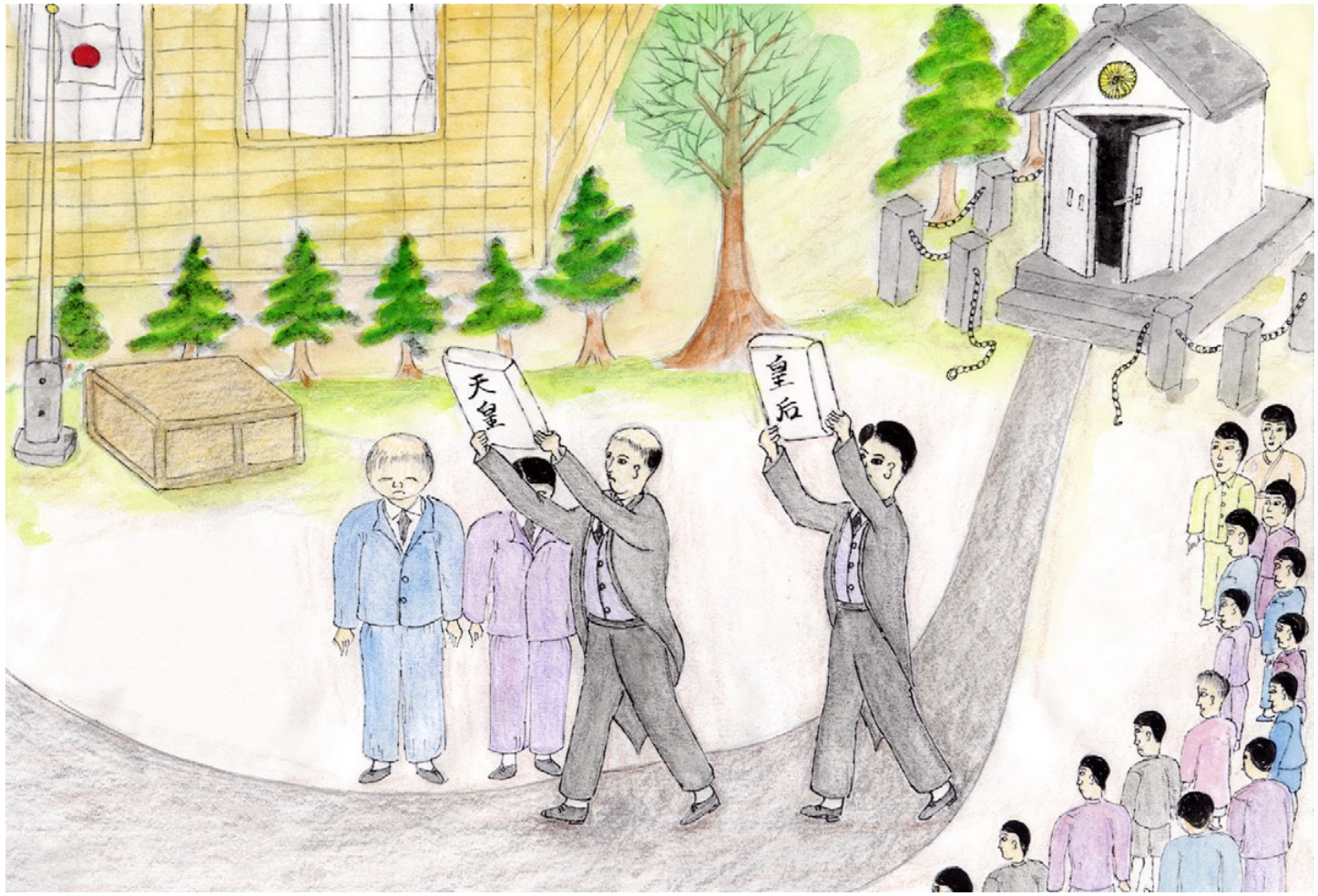
奉安殿の遥拝

戦争が始まると、生活は一変しました。学校の庭には奉安殿が建てられ、天皇・皇后の写真が安置され、前を通る時は深く礼拝しなければなりません。

172

小学校の朝礼

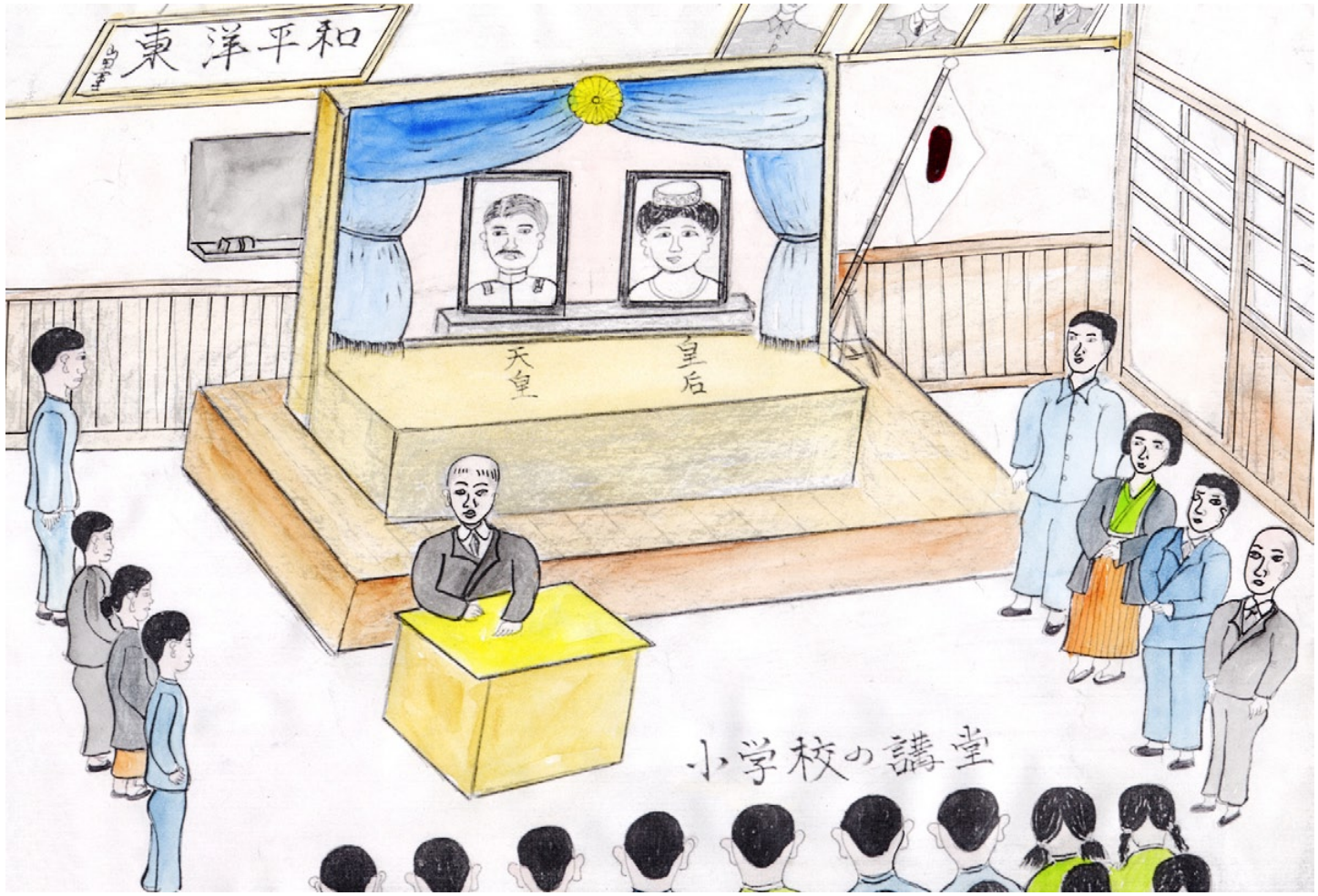
朝礼ではラッパを吹き、国旗をかかげました。これは上級生の仕事でした。



173

奉安殿より御真影

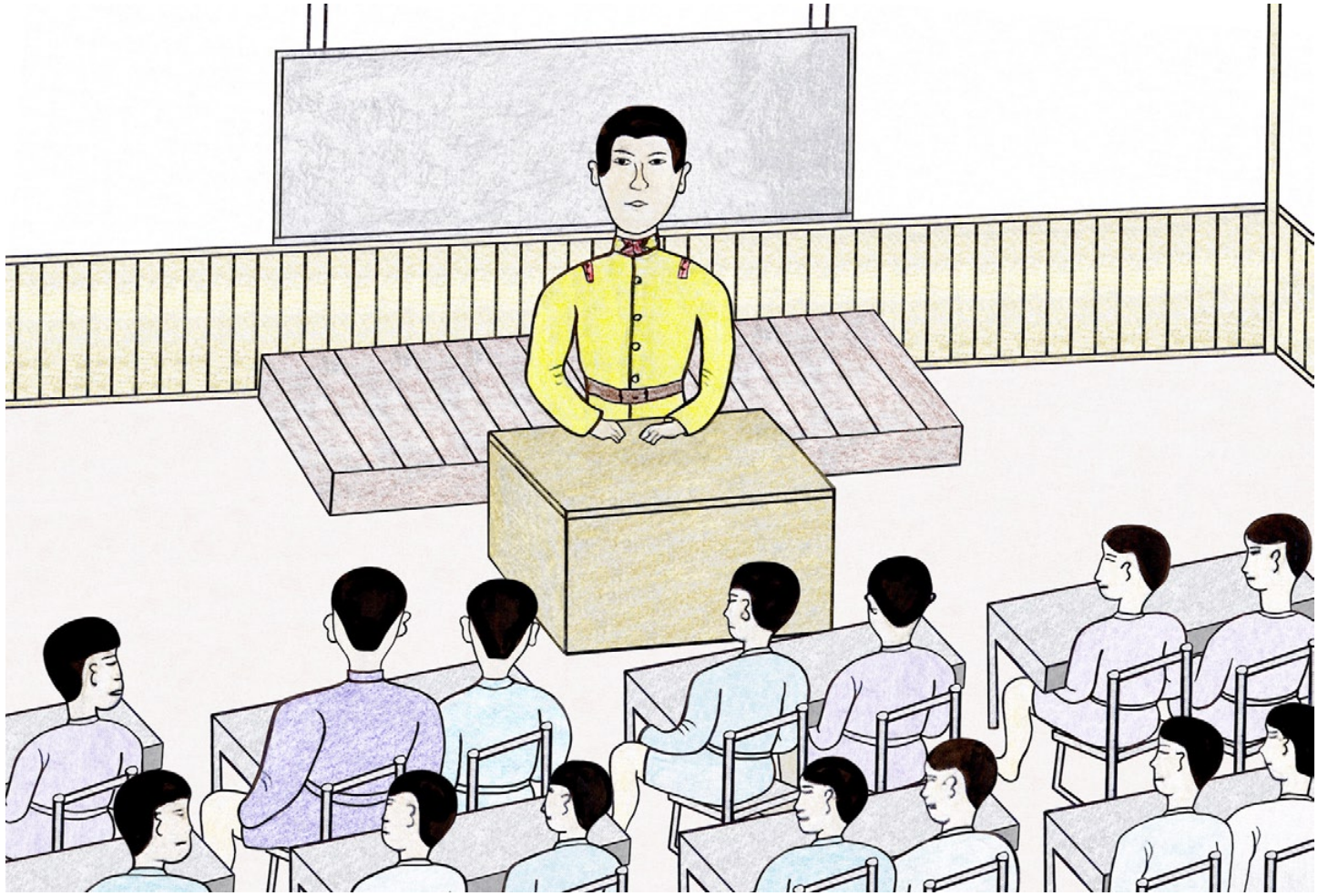
　奉安殿から天皇・皇后の写真を持ち出し、先生が高く掲げながら運びました。整列した生徒は頭を下げました。



174

講堂で式

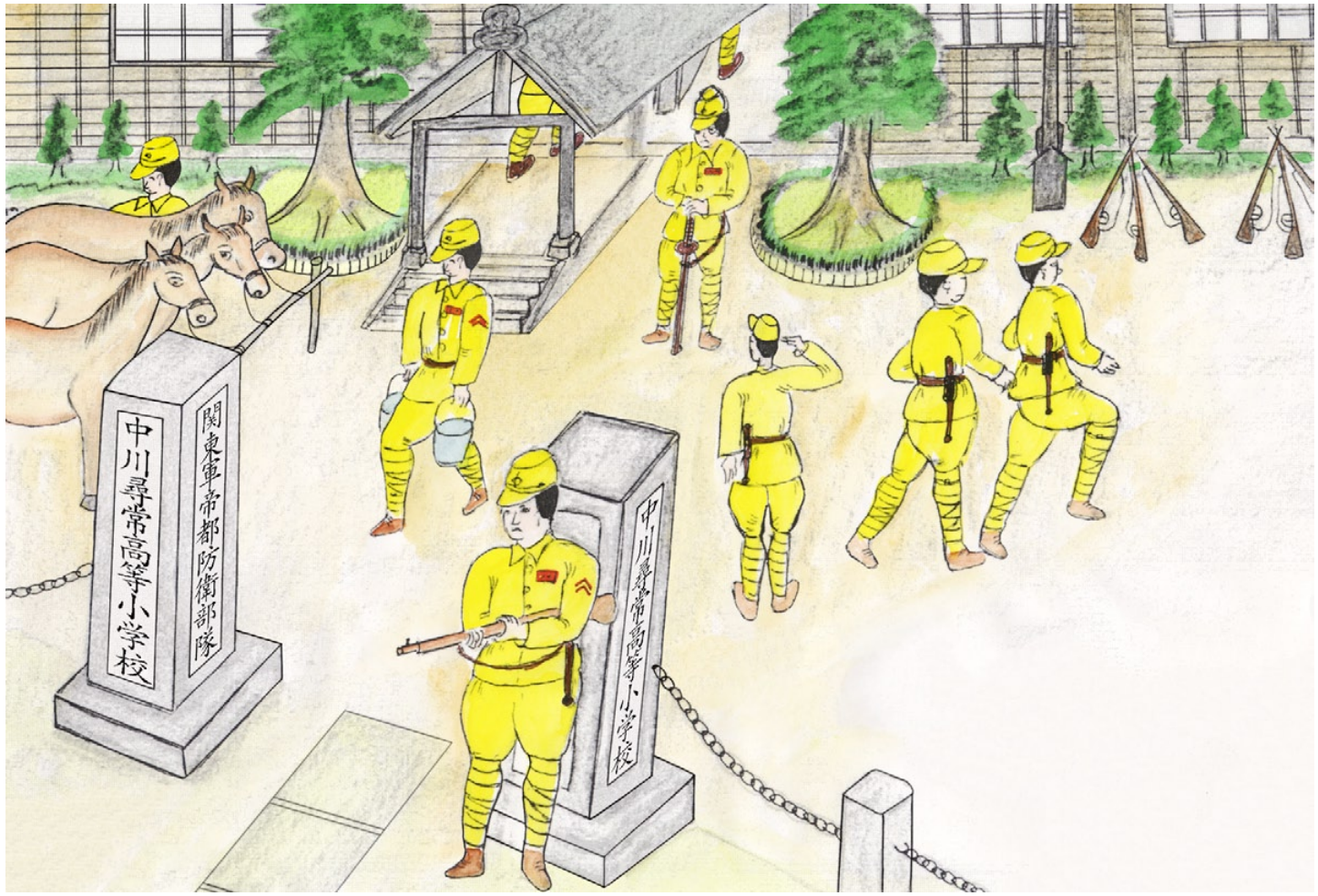
講堂の正面に天皇・皇后の写真を飾り、校長先生が講話をしています。



175

先生も召集

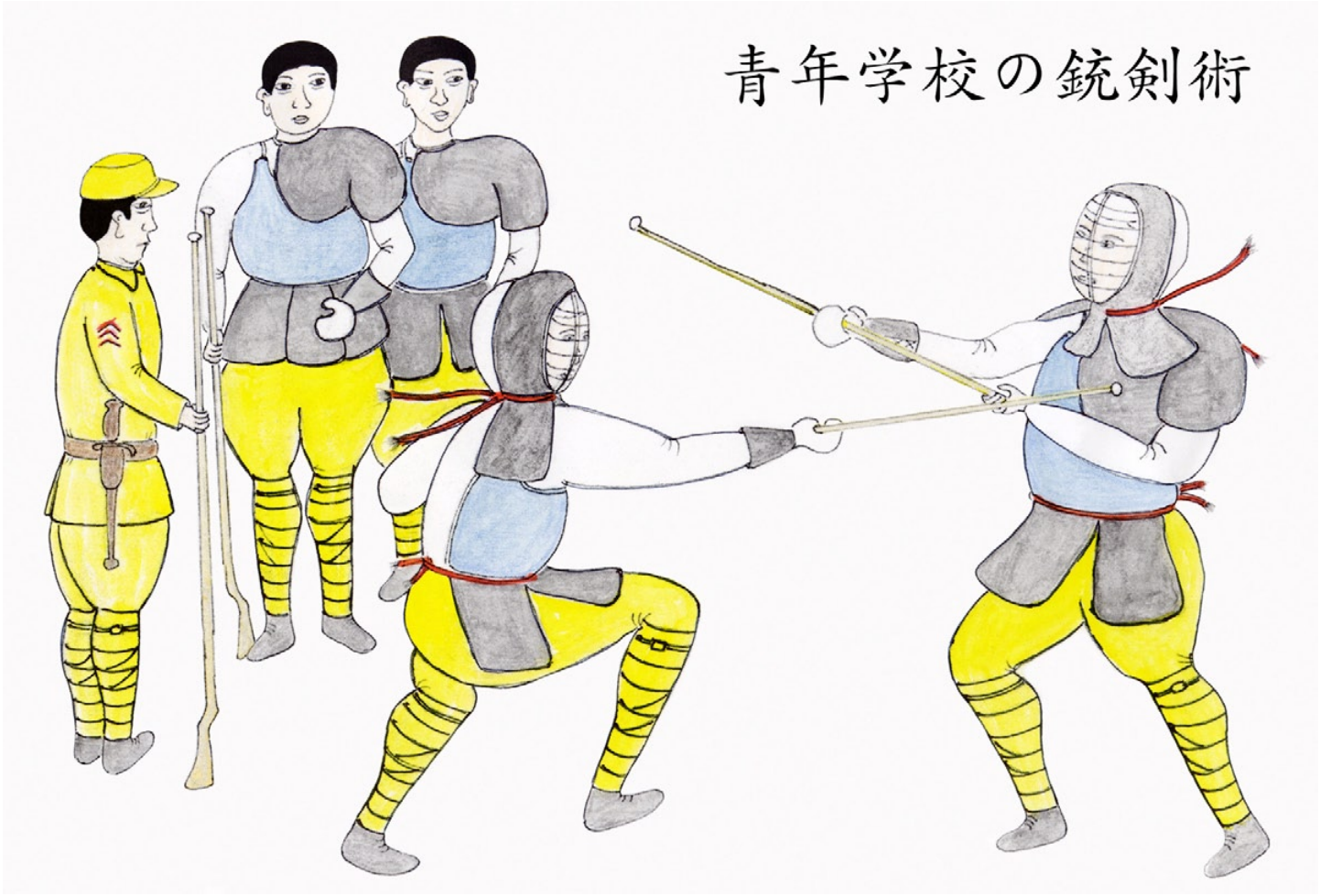
　若い先生は召集され、学校を去っていきました。



176

学校が陸軍兵舎に

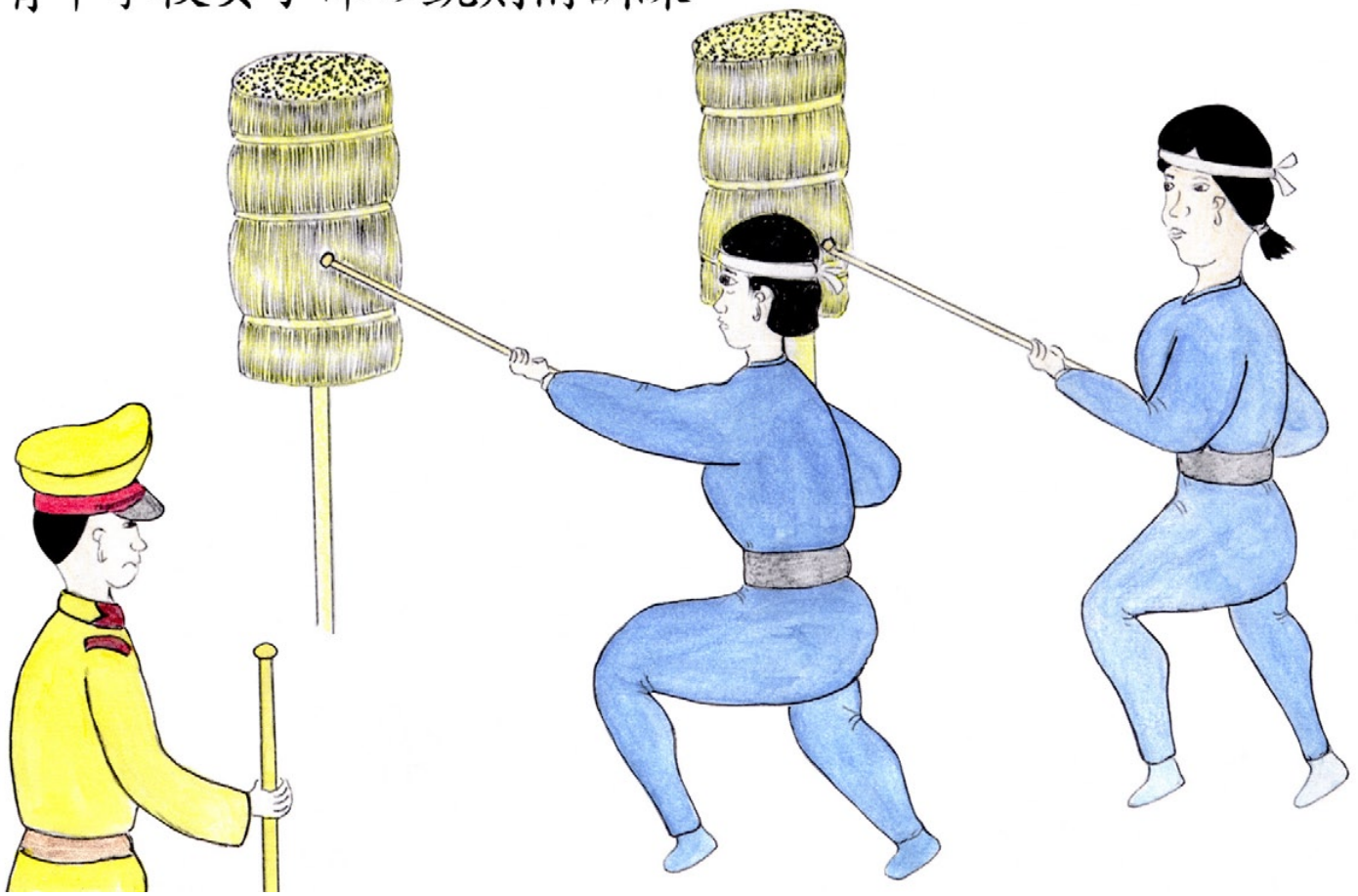
戦争が激しくなると、中川小学校も陸軍兵舎になり、生徒は寺や公民館などで勉強しました。



177

銃剣術

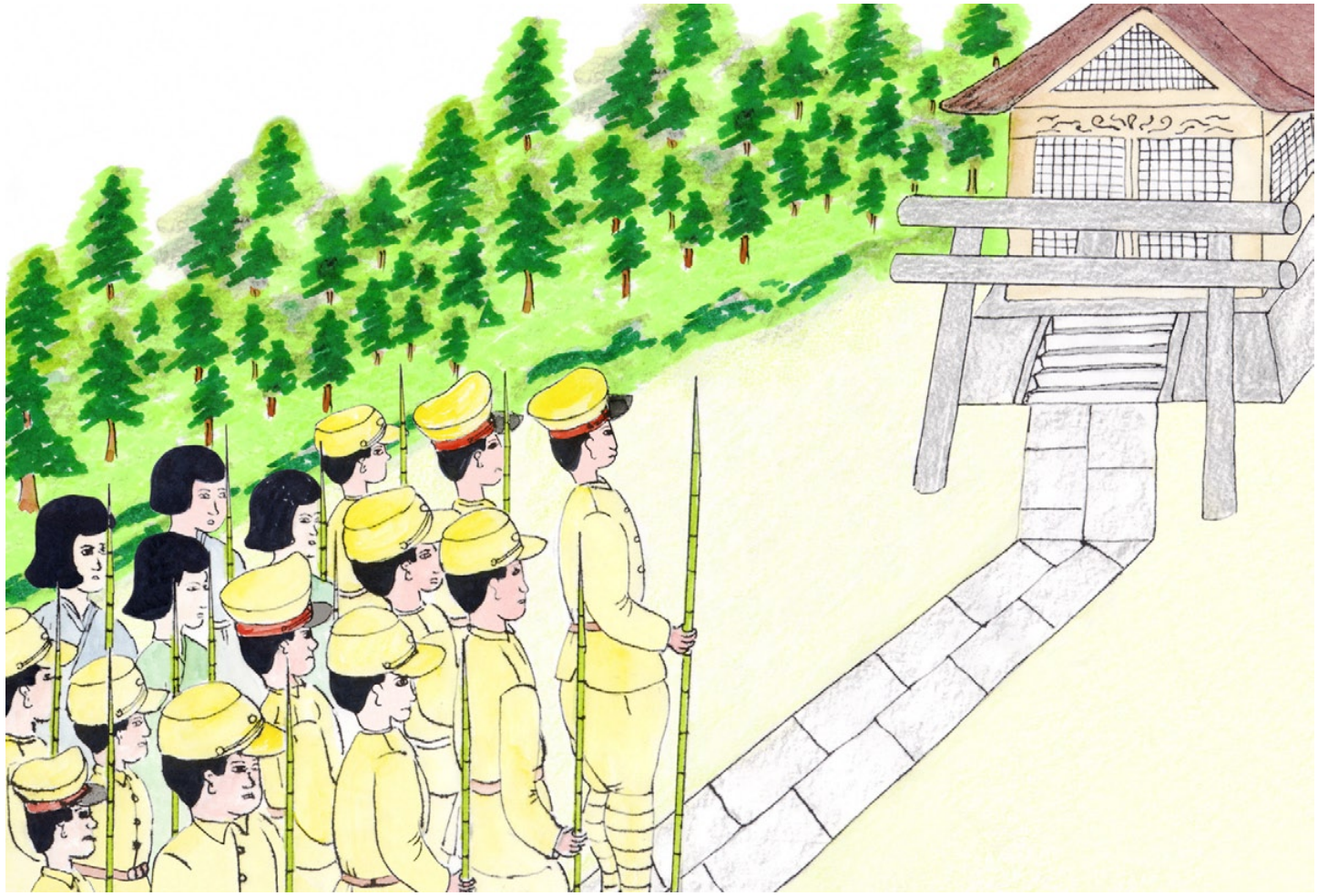
　青年学校では銃剣術を教えました。



178

女子部の銃剣術

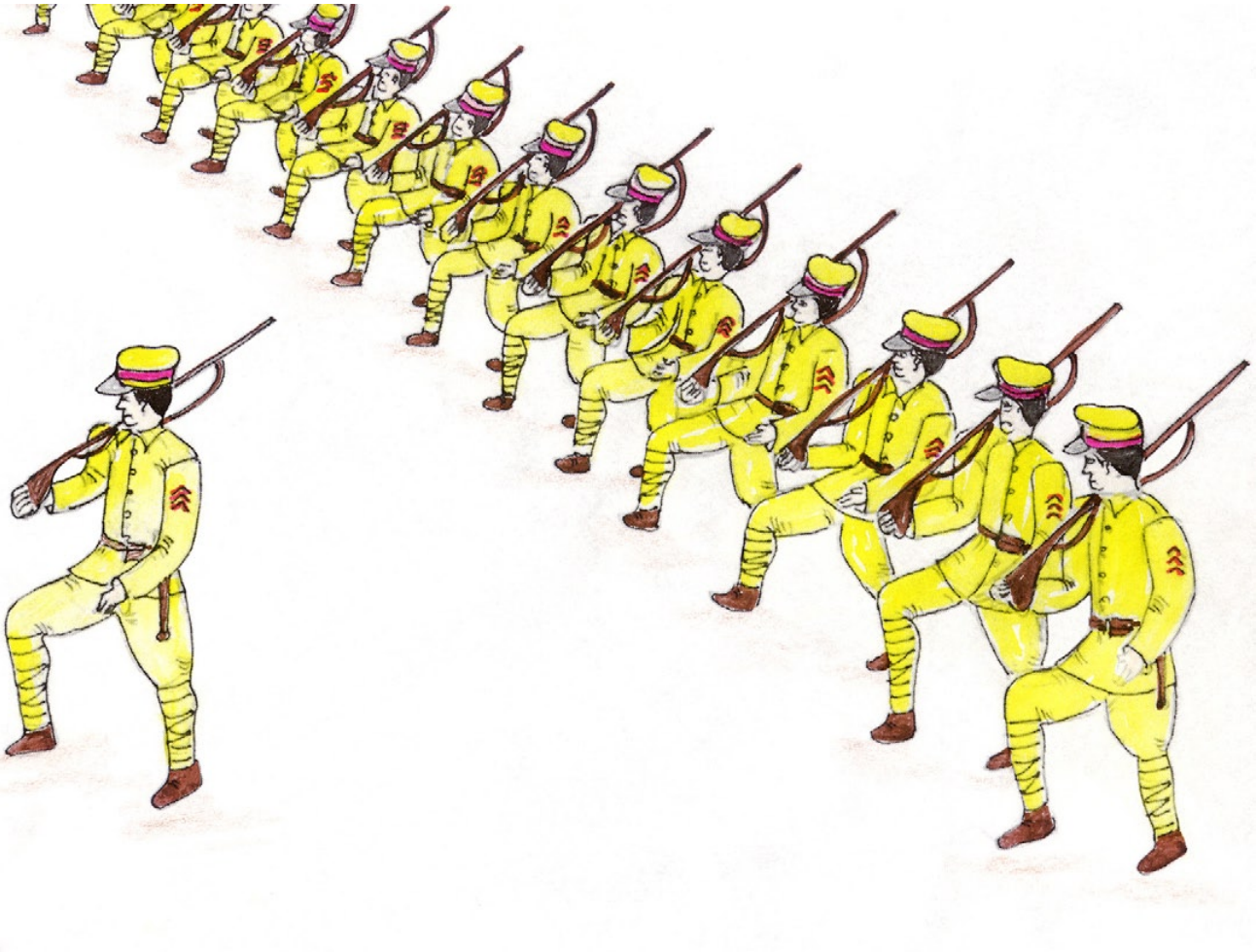
　青年学校の女子部でも銃剣術が教えられました。



179

暁天動員（ぎょうてん）

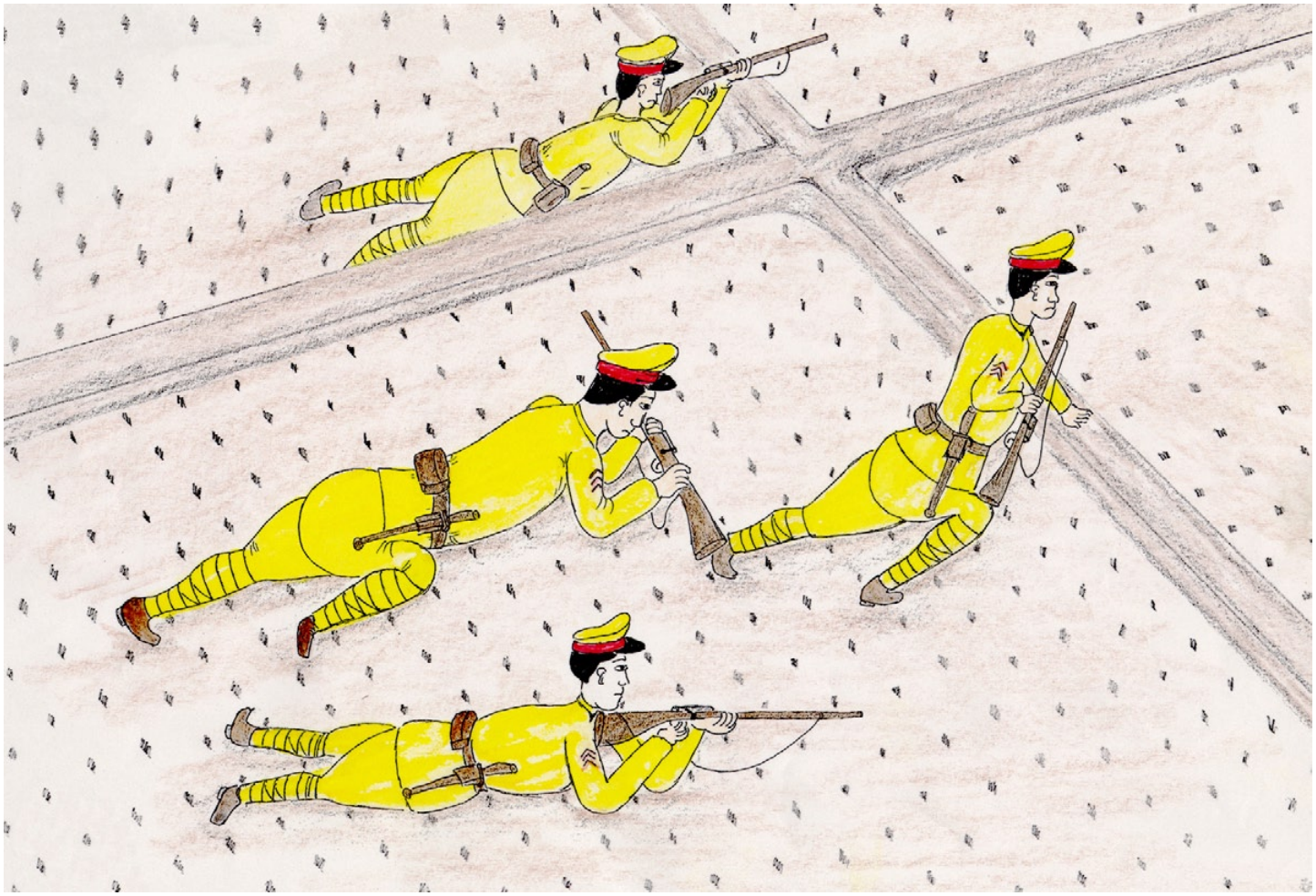
　青年学校に暁天動員がかかり、早朝、神社に集合しました。



180

分列行進

行進の練習をしています。



181

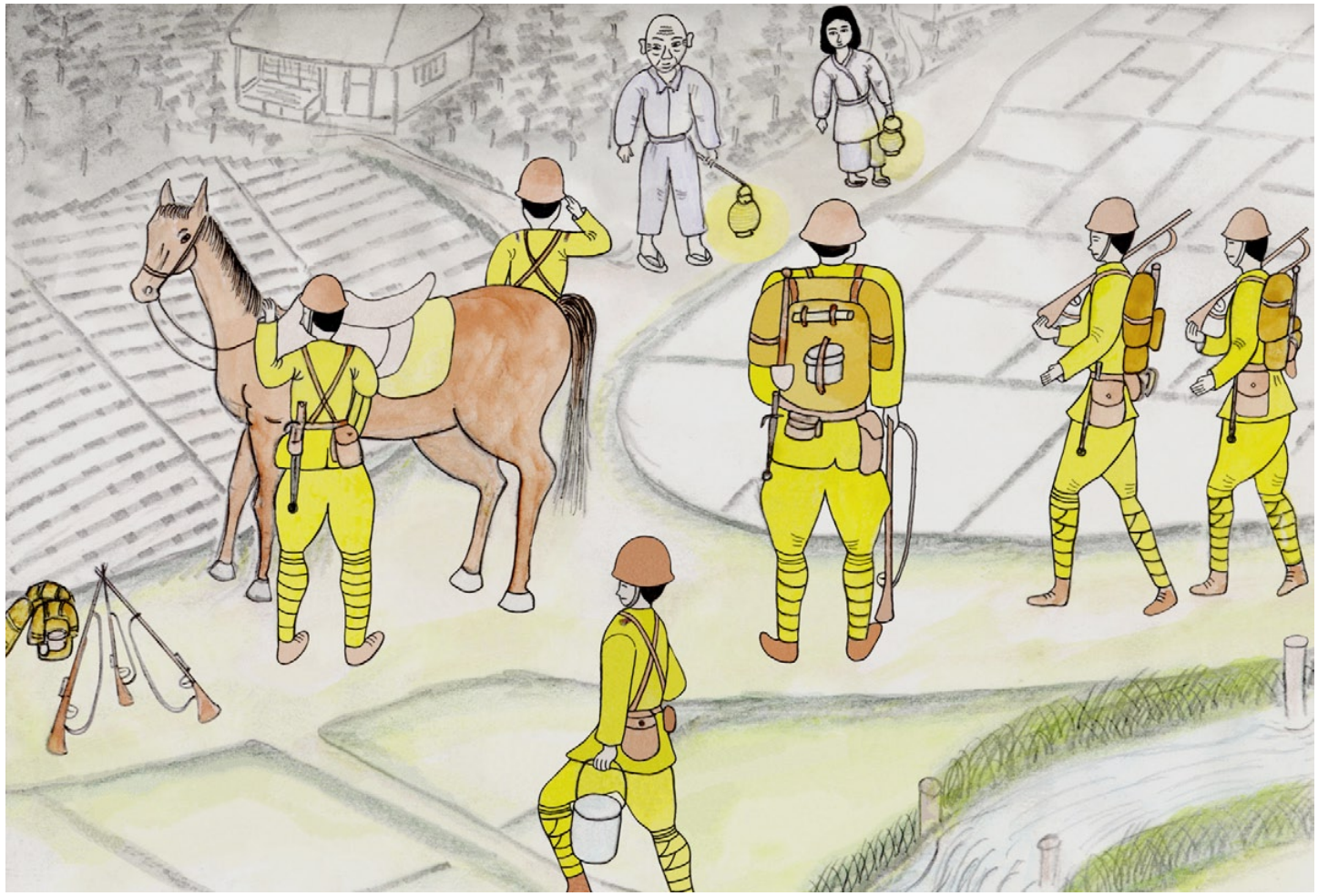
匍匐前進訓練

　中川小学校から早渕川までの田圃を使って匍匐（ほふく）行進の練習をしました。腹這いになって進み、銃を打つ訓練です。

182

山田富士での演習

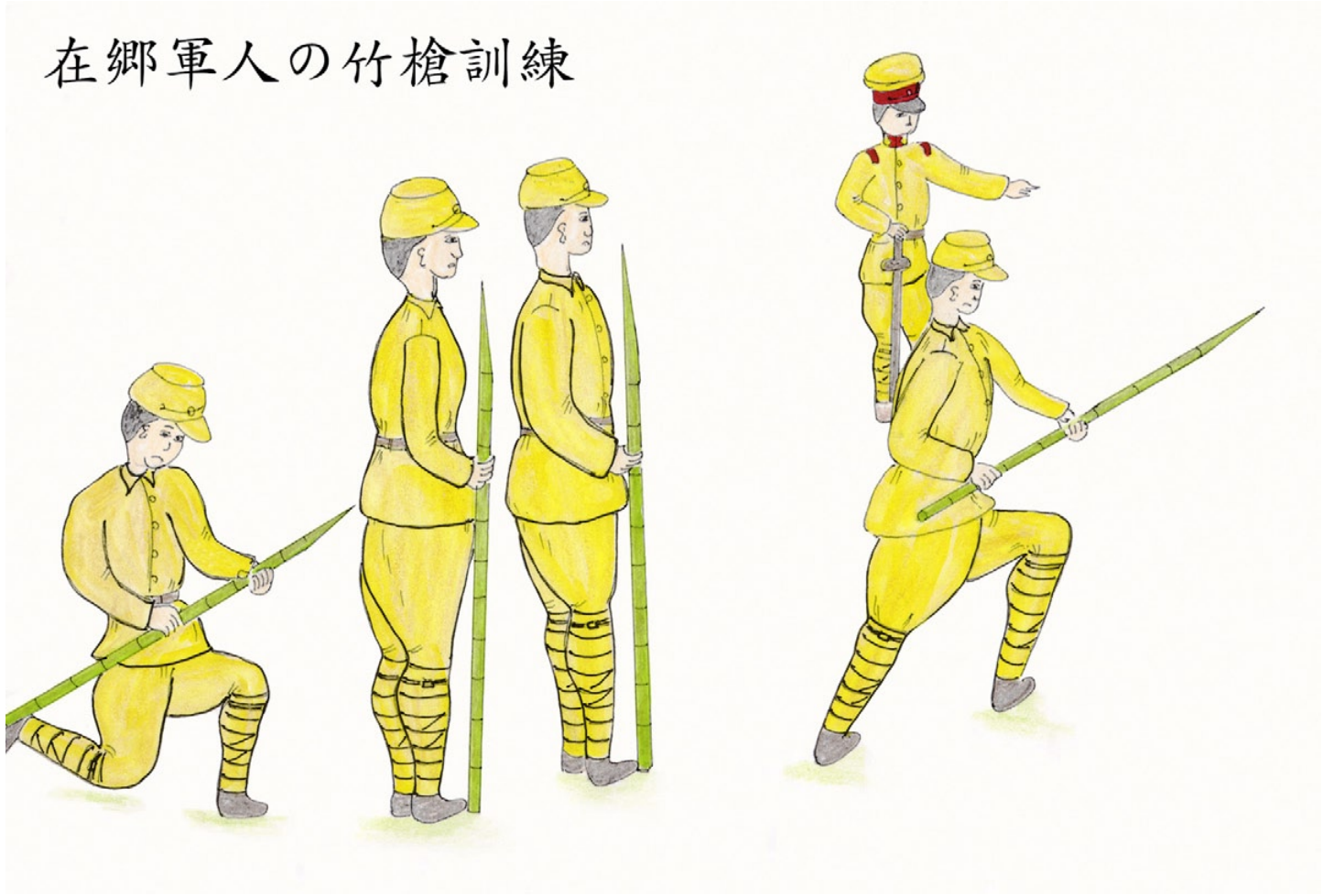
　山田富士山を舞台に訓練が行われました。



183

北山田に分宿

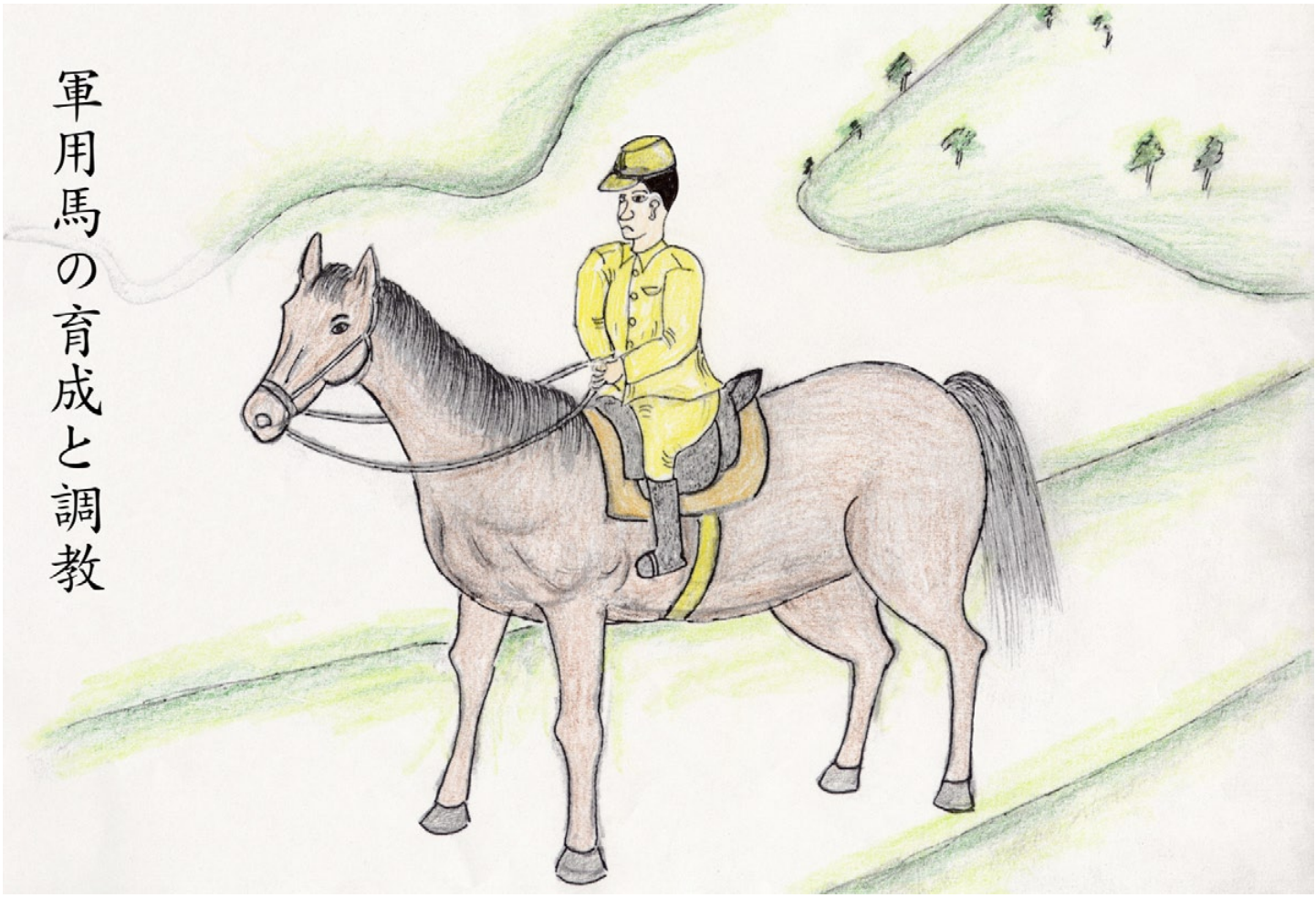
　陸軍の兵隊が北山田に来て分宿したことがありました。まだ暗い早朝、家族が灯りを持って見送っています。



184

竹槍訓練

　戦地に行かない在郷軍人は竹槍訓練をしました。



185

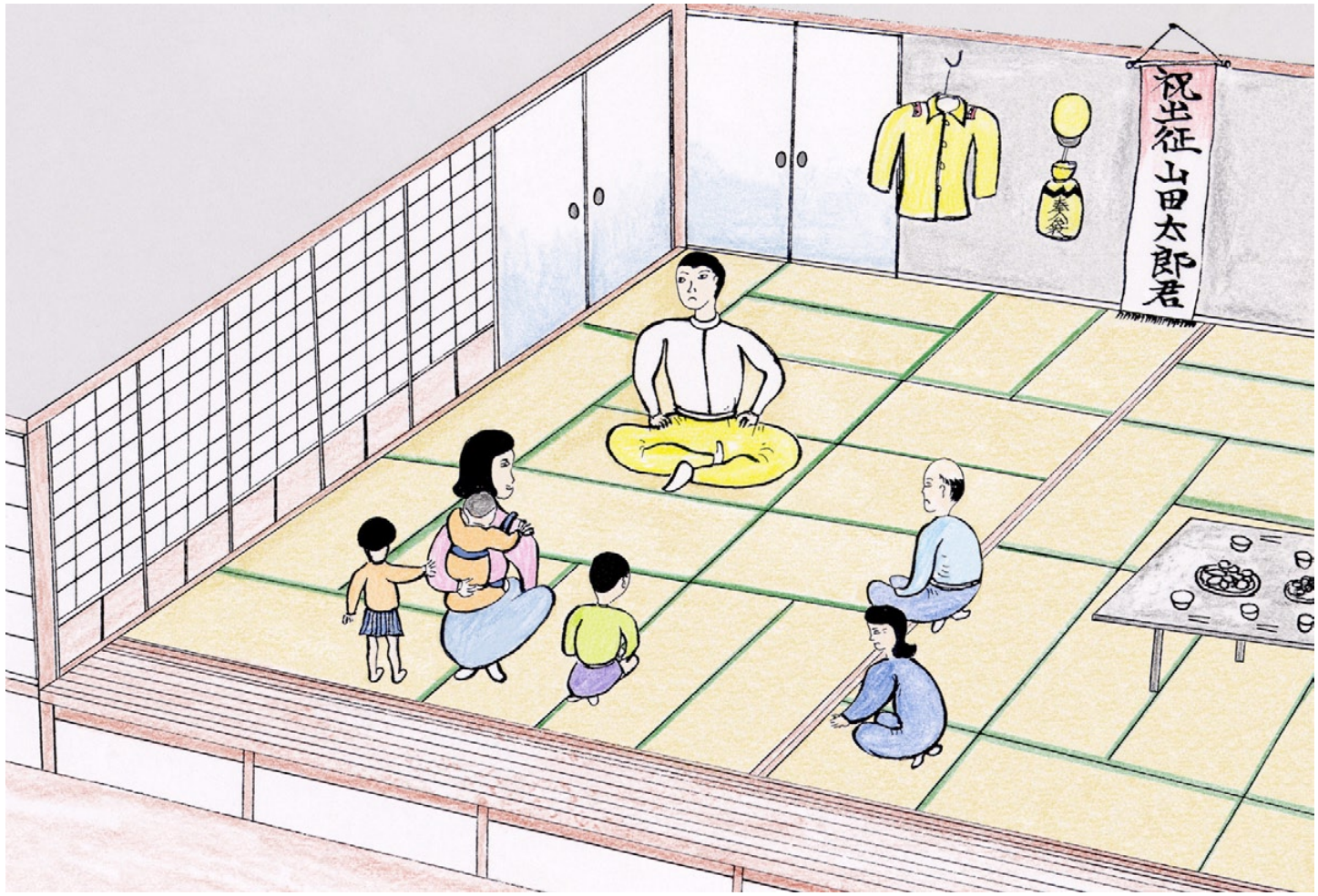
軍用馬の調教

　中川地区には軍用馬の育成と調教をしている農家があり、調教した馬は軍に納めていました。

186

蹄鉄掃除

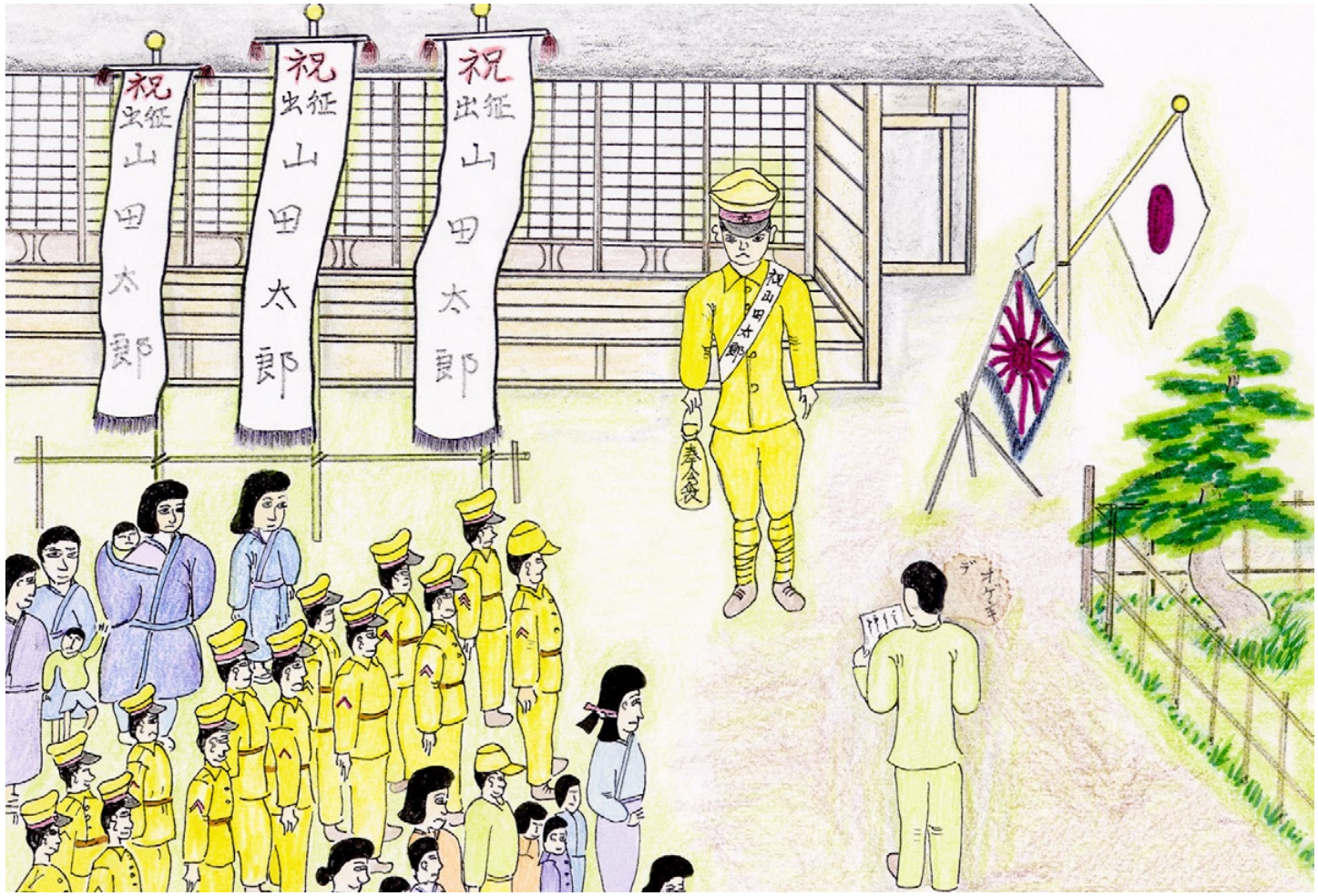
　馬の蹄鉄掃除は大切な仕事です。



187

出征前夜

　中川地区でも農家の若主人の出征がありました。召集令状を受取ると何を差し置いて入隊しなければなりません。家族でささやかな送別の会をして、妻や子供に訓戒をしてから家を後にしました。



188

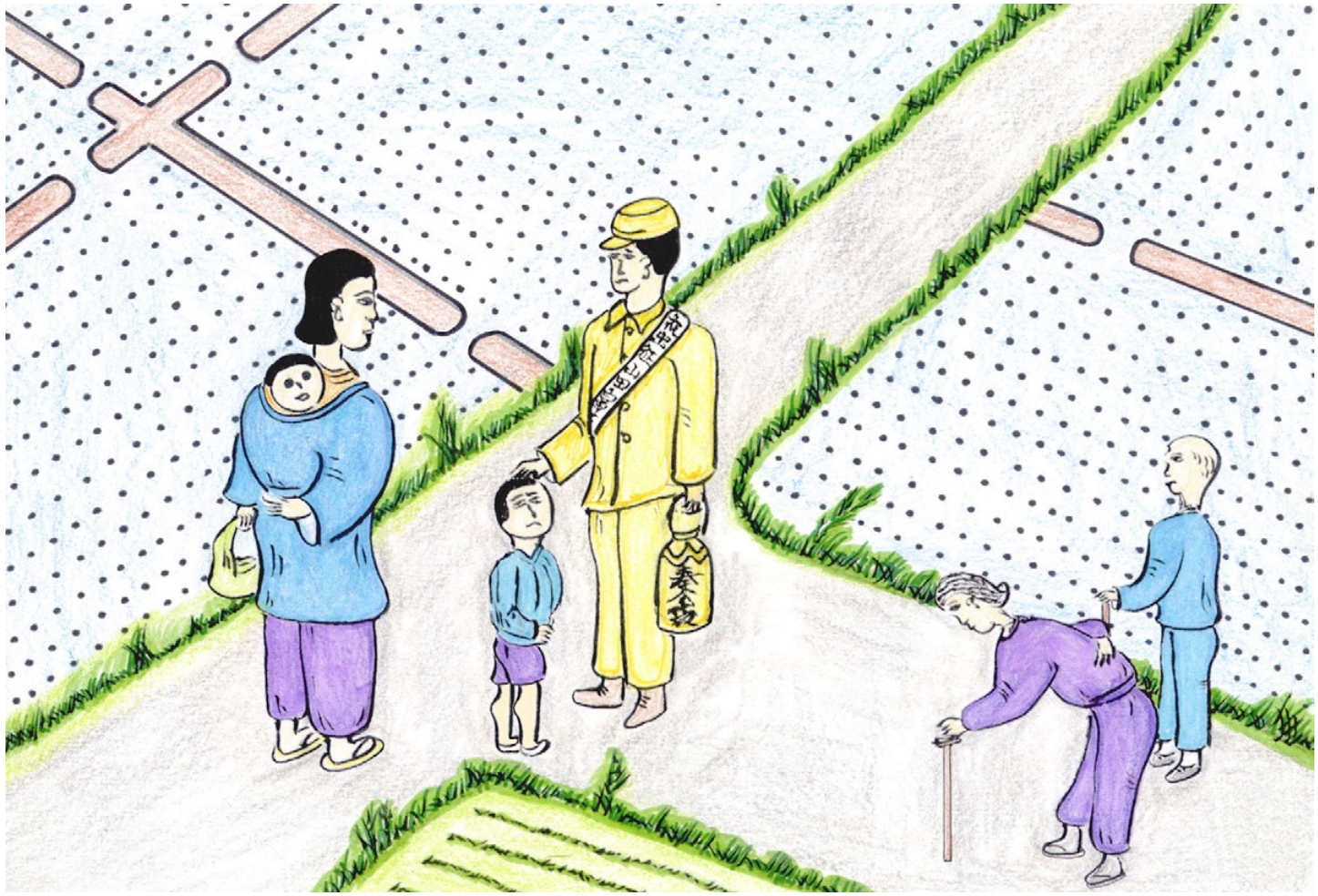
壮行会

　部落をあげて壮行会を開きました。国のために頑張ってくるようにとの励ましの声を背に仲間たちの見送りを受けました。

189

送別会

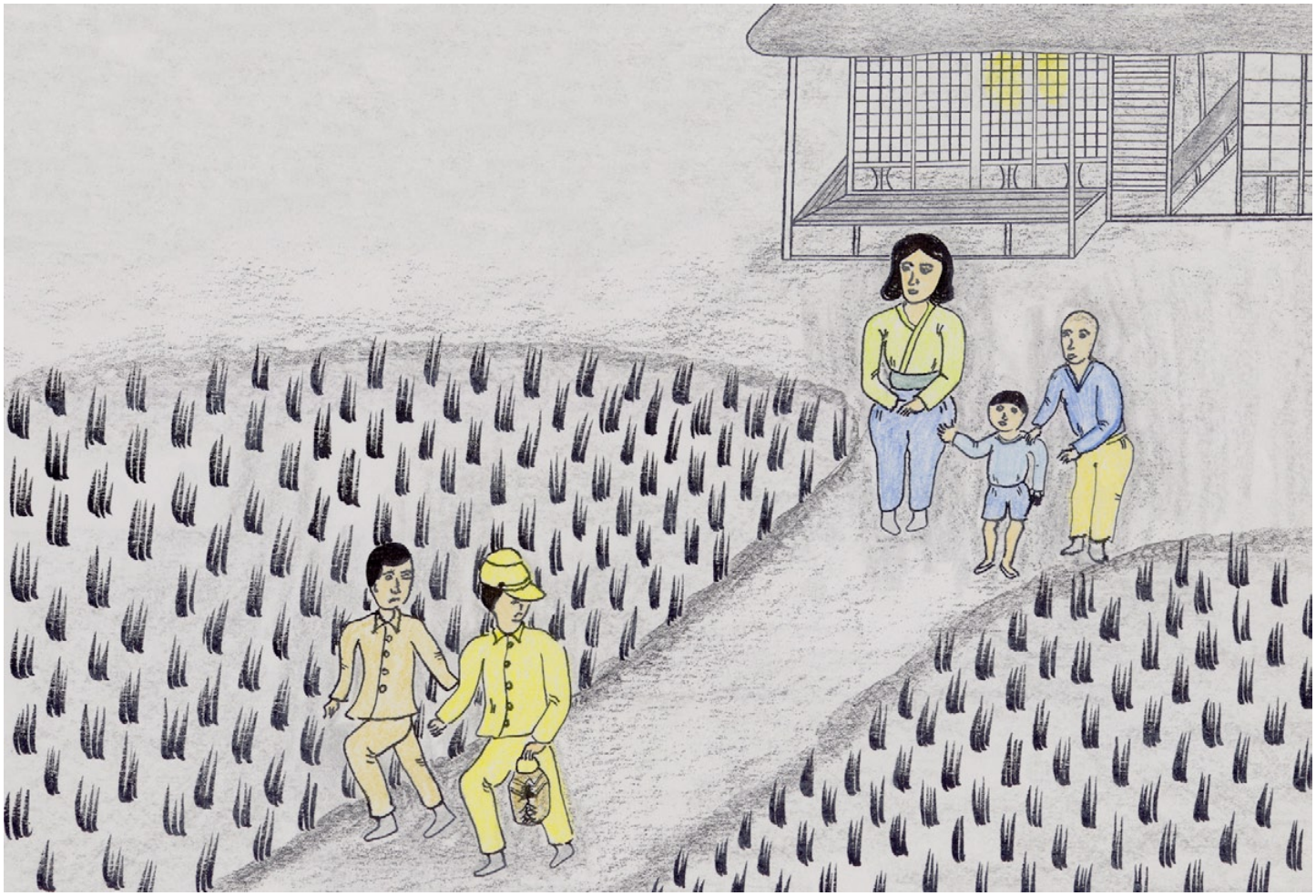
召集令状が来ると、青年団では公民館で送別会を開きました。



190

辻の別れ

家族との別れは何よりもつらいものでした。別れ難い家族は何処までもついてきます。



191

極秘の見送り

敗戦の色も濃くなると、大袈裟な見送りは禁じられました。夜こっそり家を後にする若者、見送る家族は暗闇の中を見つめます。

192

故郷を振り返る

　入隊の若者は振り返り振り返り故郷の風景を見ていきます。山田富士、田圃、家々を心に焼きつけていました。

193

離れ難い家族

青年団の見送りの後ろに家族がついてきます。離れ難い時です。青年団の人たちが先に進んでも後に残って家族に言い聞かせています。

194

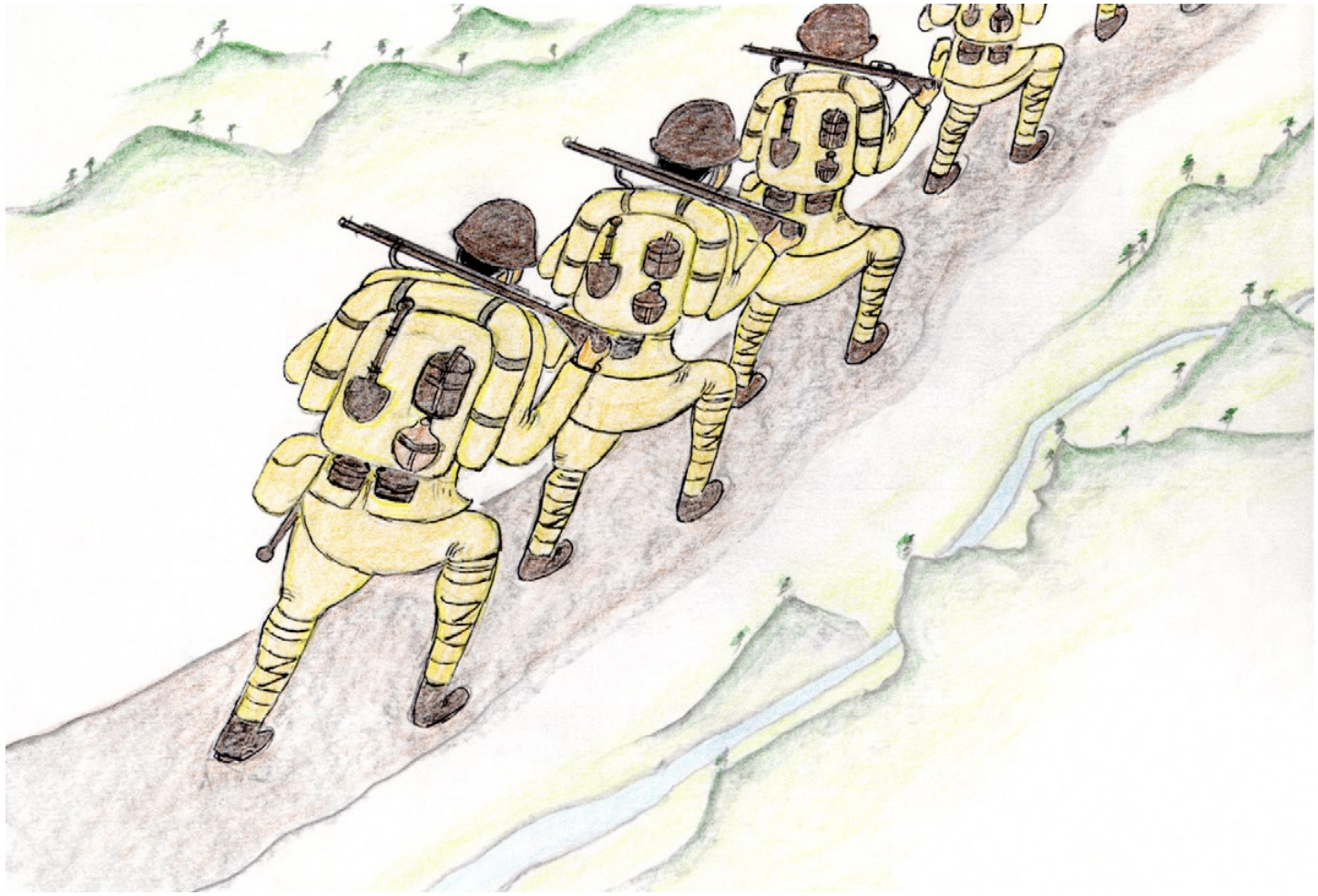
駅での見送り

　秘かな思いを寄せる人が出征していく電車を、柱に隠れて見送っています。

195

千人針

　残された妻や母親は千人針作りに奔走しました。千人針は寅年生まれの女性に年の数だけ赤い糸で結び目を作ってもらい、お守りとして戦地に送ったのです。夫や父親の無事を必死に祈っていました。



196

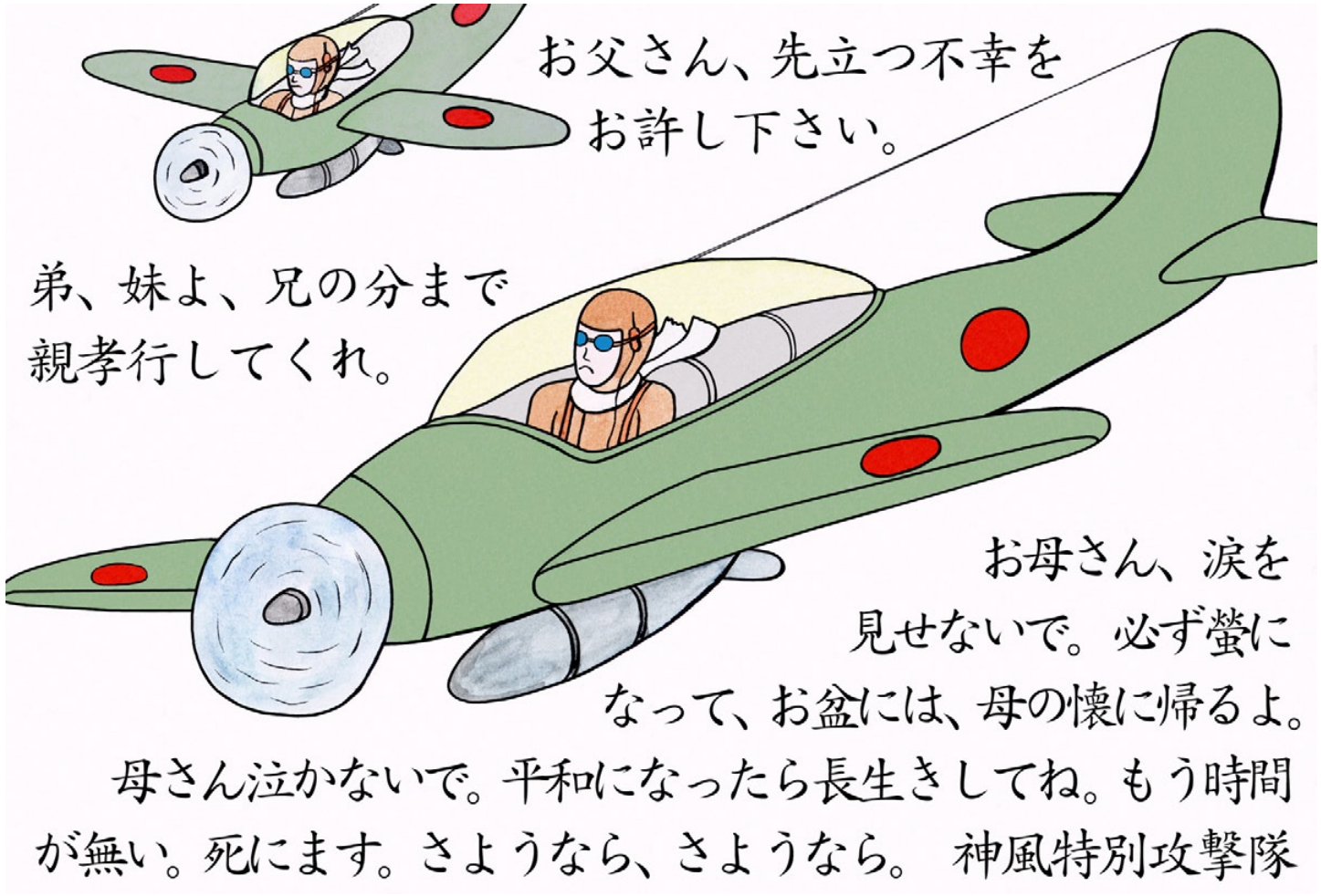
演習地への行軍

　戦地に送られる前、演習地へ行軍しているところです。

197

神風特攻隊－1

二十歳前後の若者たちが神風特攻隊として召集され、体当たりで命を捨てました。今で言う自爆テロです。



198

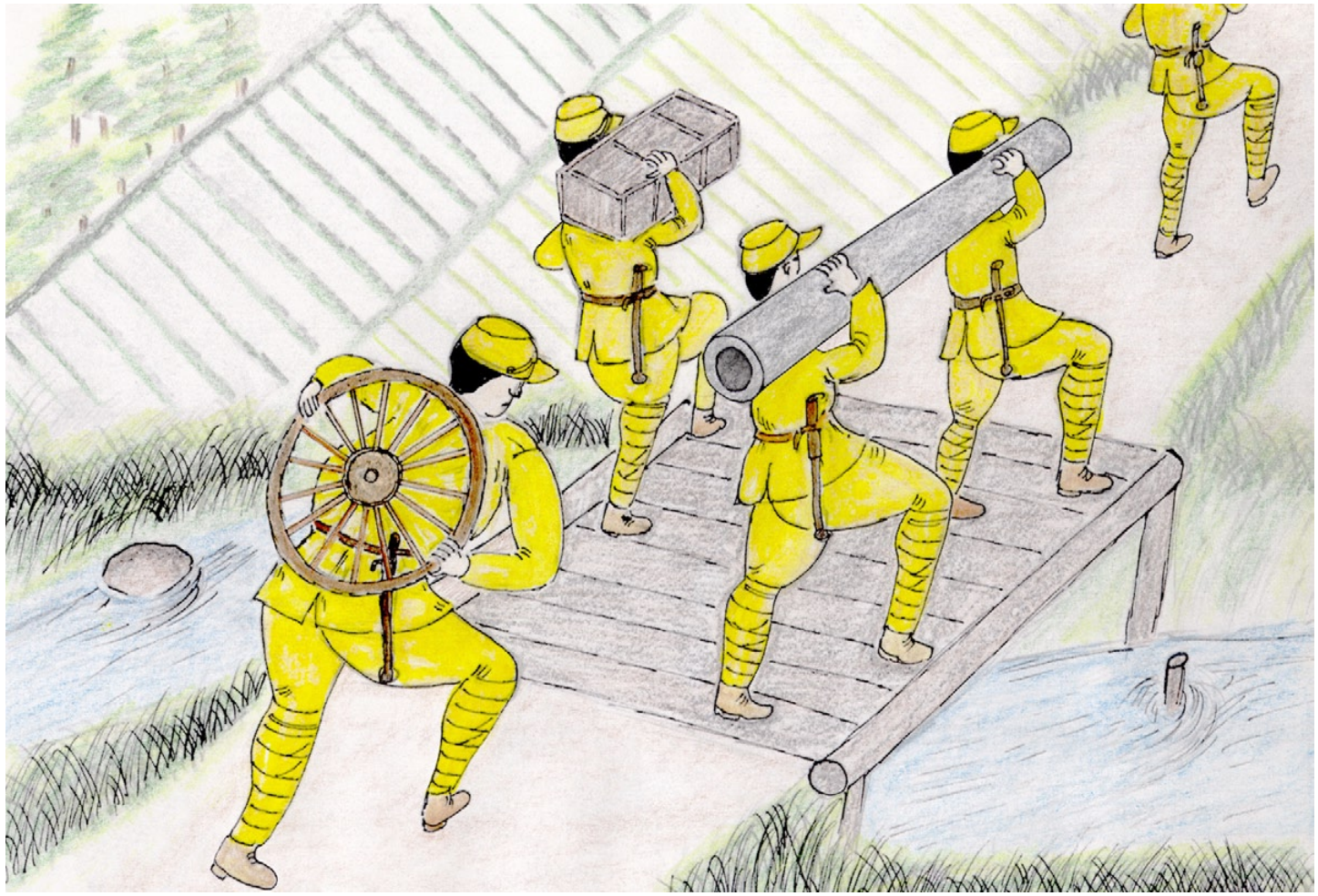
神風特攻隊－2

爆弾を積んだゼロ戦に乗って敵機に向かう若者たち。

199

慰問袋

戦地には家族の手紙や思いの品々の入った慰安袋が届けられました。遠く離れた家族への思いはつのるばかりでした。



200

砲兵隊の演習

　北山田で砲兵隊の演習が行われました。分解して持ち運び、着いたら組み立てて使う訓練です。

201

田奈部隊

今のこどもの国は田奈部隊の陣地でした。弾薬庫があり、厳重に警戒されていました。

202

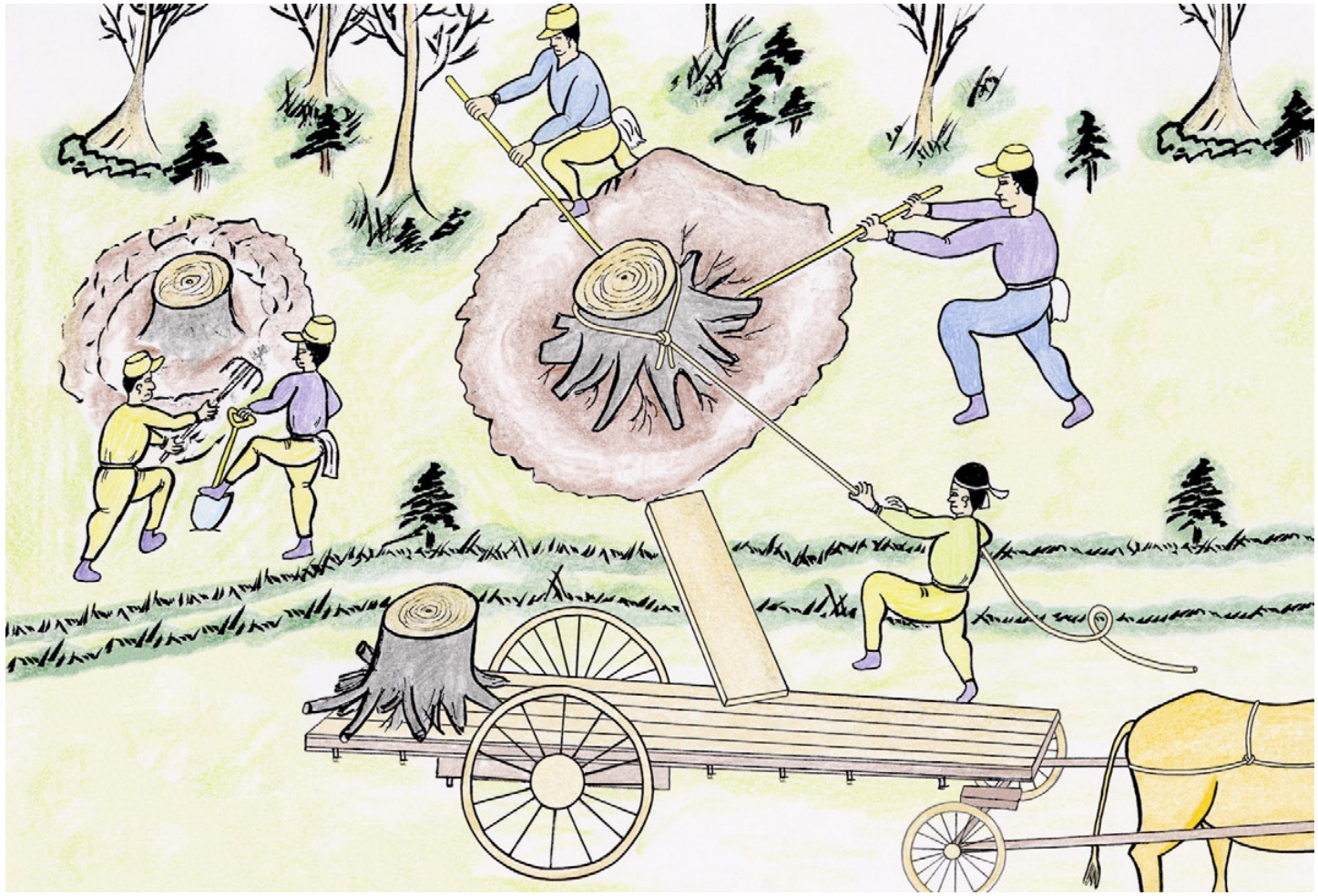
田奈弾薬庫

田奈部隊のある山にはトンネルが掘られ、弾薬が保管されていました。トンネルの入口は樹木に隠され分かりにくくなっていました。

203

陸軍照空隊

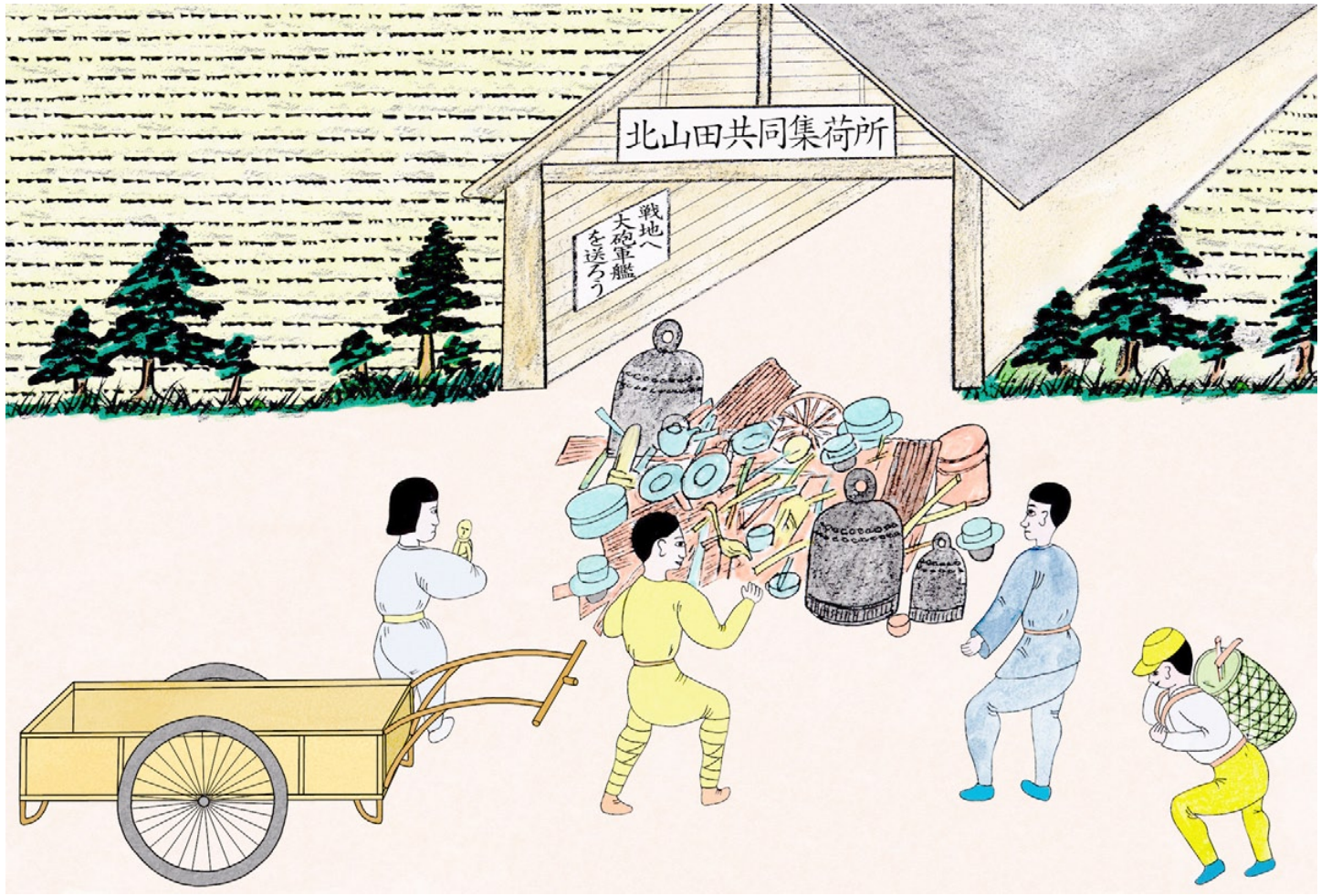
敵機が飛来してくるようになると、応戦しなければなりません。夜、敵機をとらえるために、山田小学校に陸軍照空分隊を置き、サーチライトで照らしていました。



204

松根油の採取

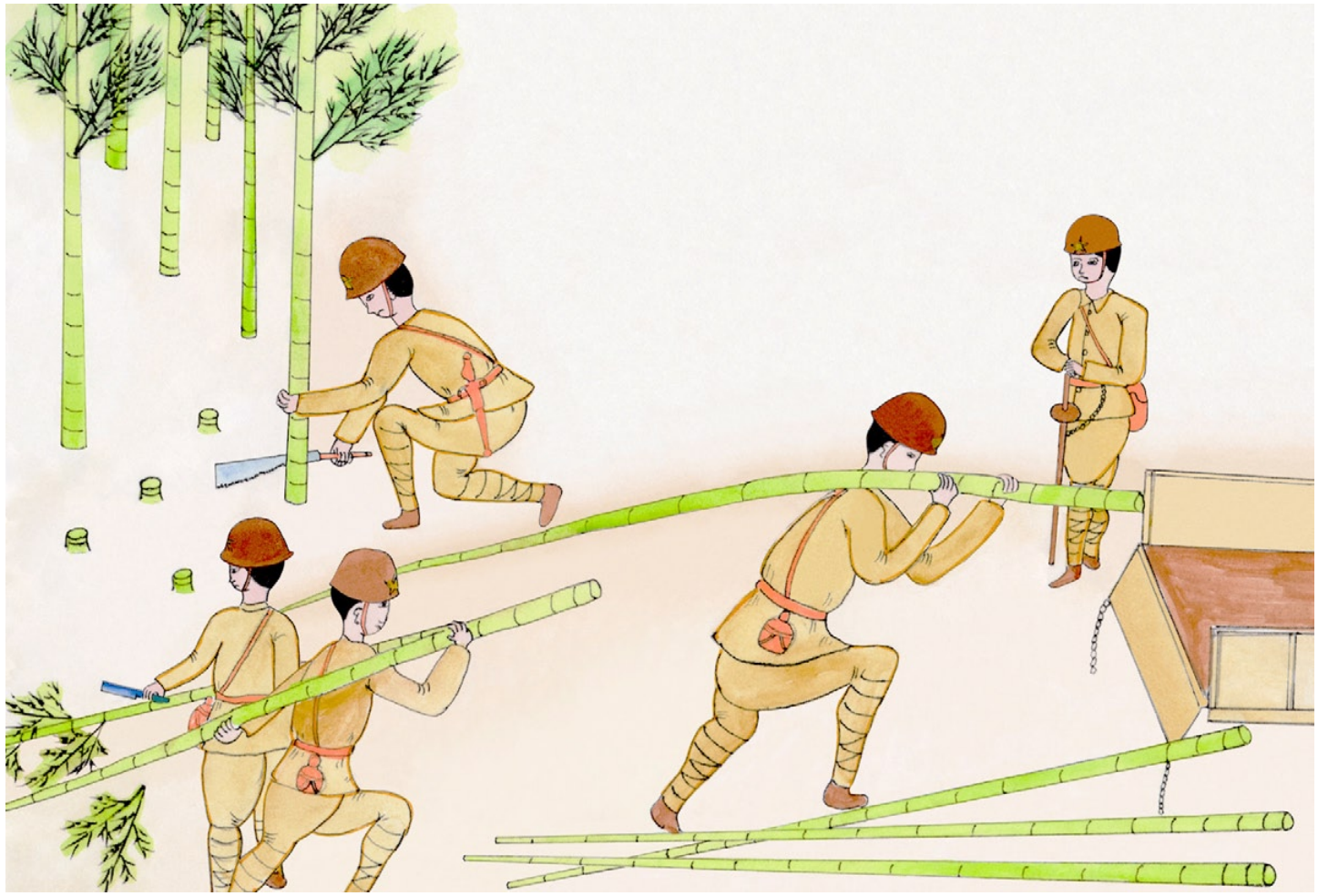
　日本は資源が乏しいため、それを補うための工夫をしました。ガソリンの代わりに松根油をとって使うことも試みられました。



205

鉄の供出

軍艦や飛行機の製造には鉄が必要です。日本中の家庭や寺院などから鉄の供出を促しました。鐘ろうや鉄瓶などあらゆる鉄製品を集めました。



206

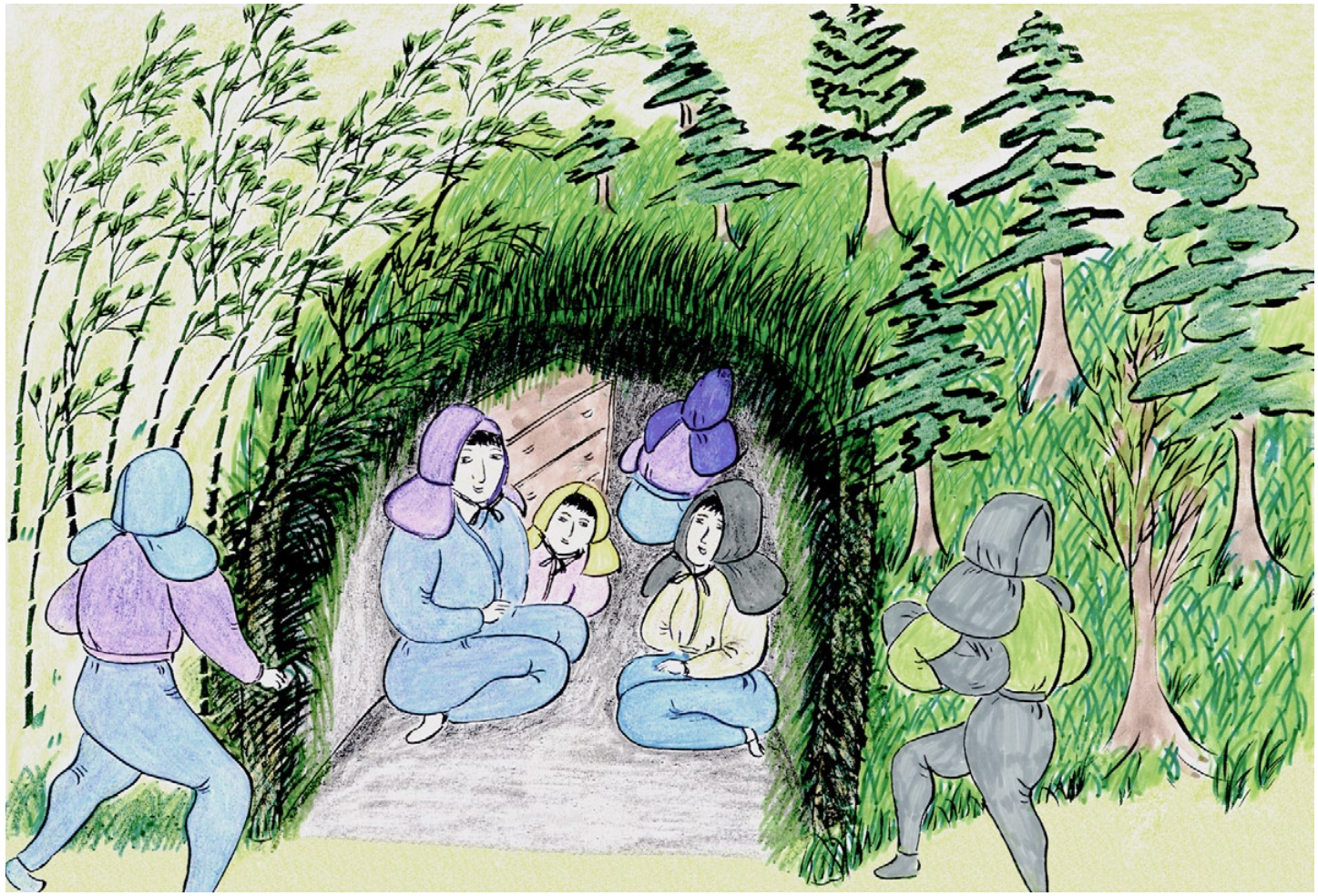
竹の利用

　竹の救命ボート作りもありました。いかだの代わりに竹を利用しようというのです。

207

早渕川沿いの戦車壕

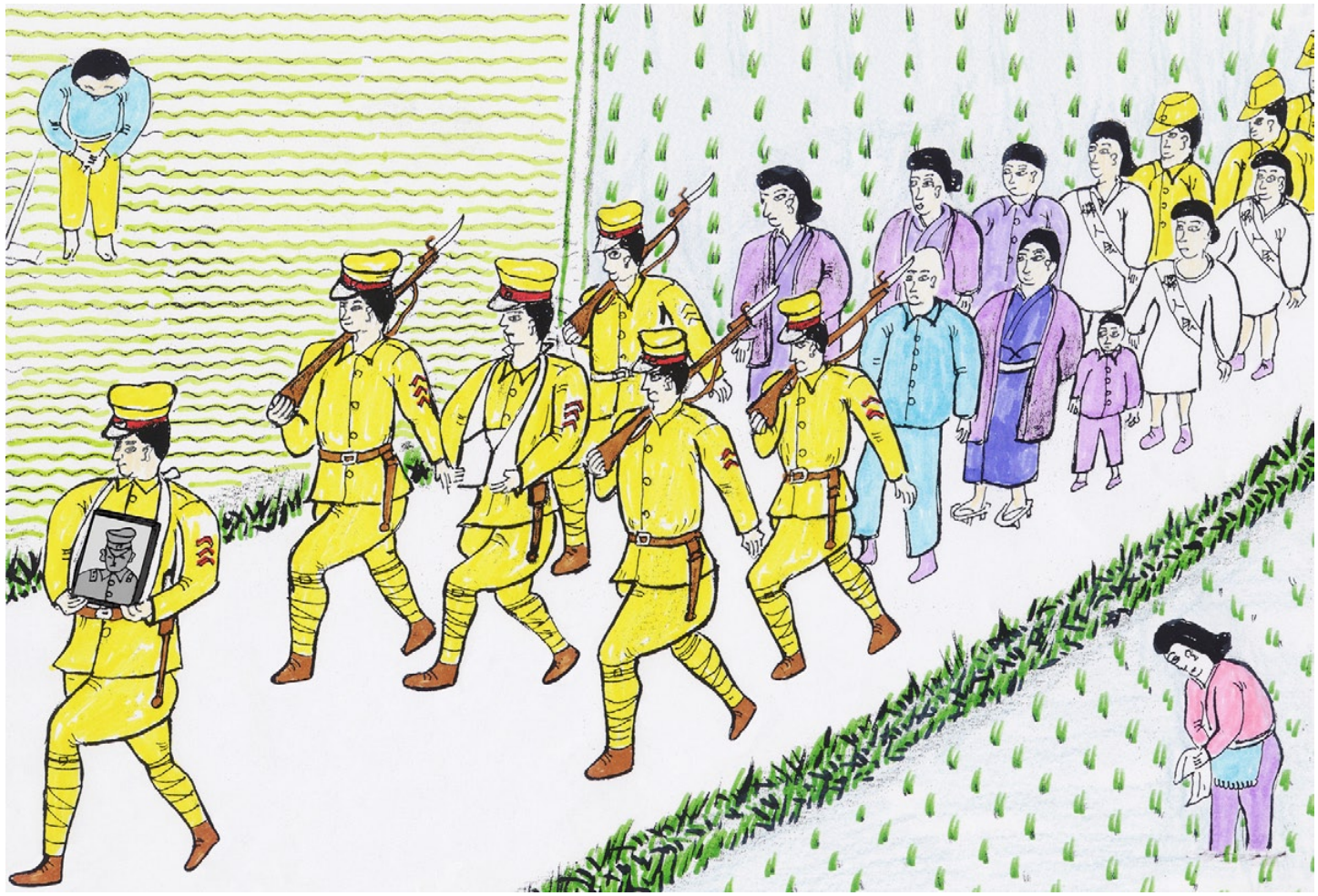
　早渕川沿いの山に戦車壕が造られました。青年たちが土を運び出しています。一台の戦車も来なかったといいます。



208

防空壕

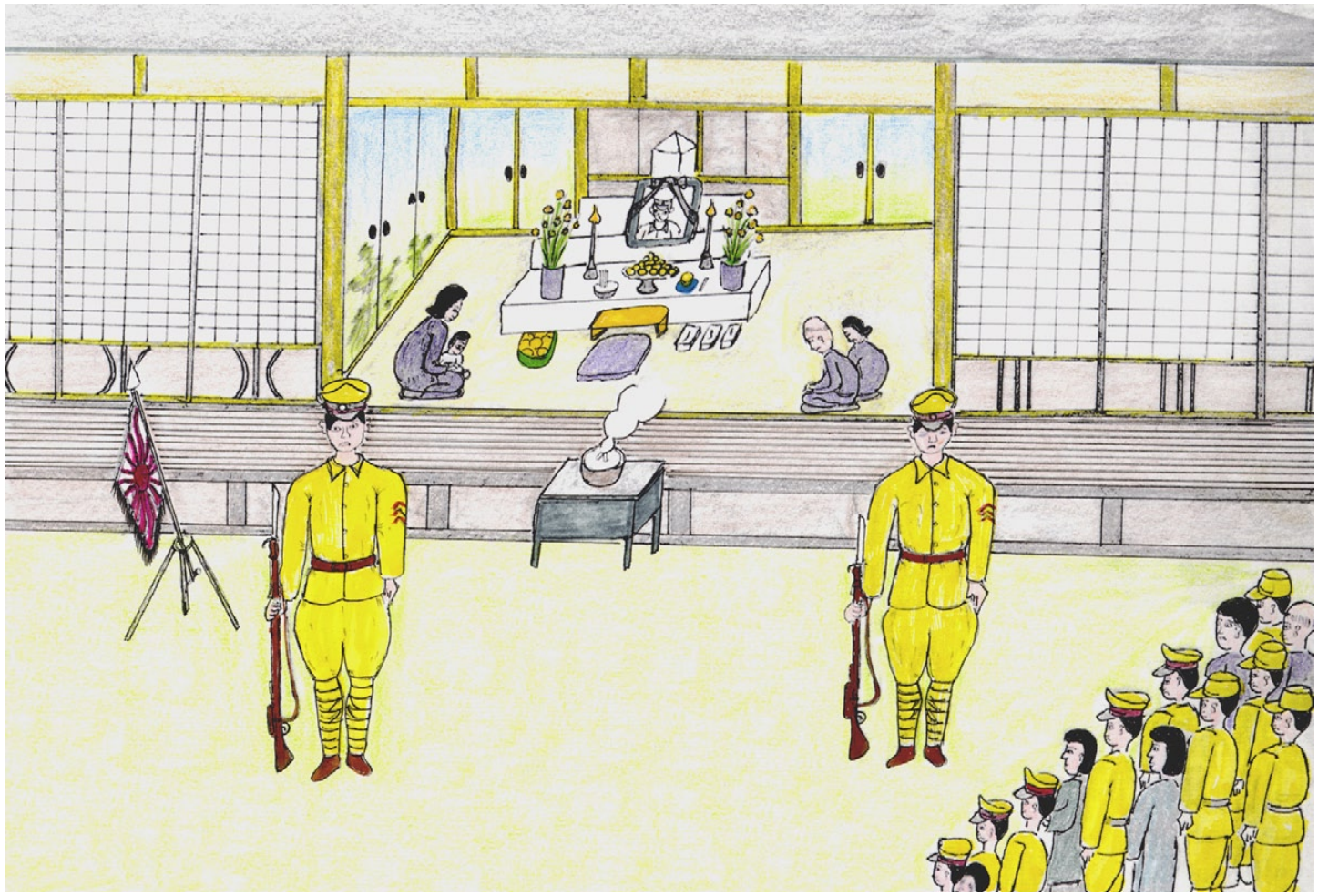
　次第に敵機の襲来が多くなり、いつ爆弾を落とされるか分からない状況になってきました。屋敷裏などに防空壕を掘り、タンスや家財道具をいれましたが、湿気でぼろぼろになってしまいました。空襲警報がなると、防空頭巾をかぶり、家族みんなで防空壕に入り避難しました。



209

戦没者の出迎え

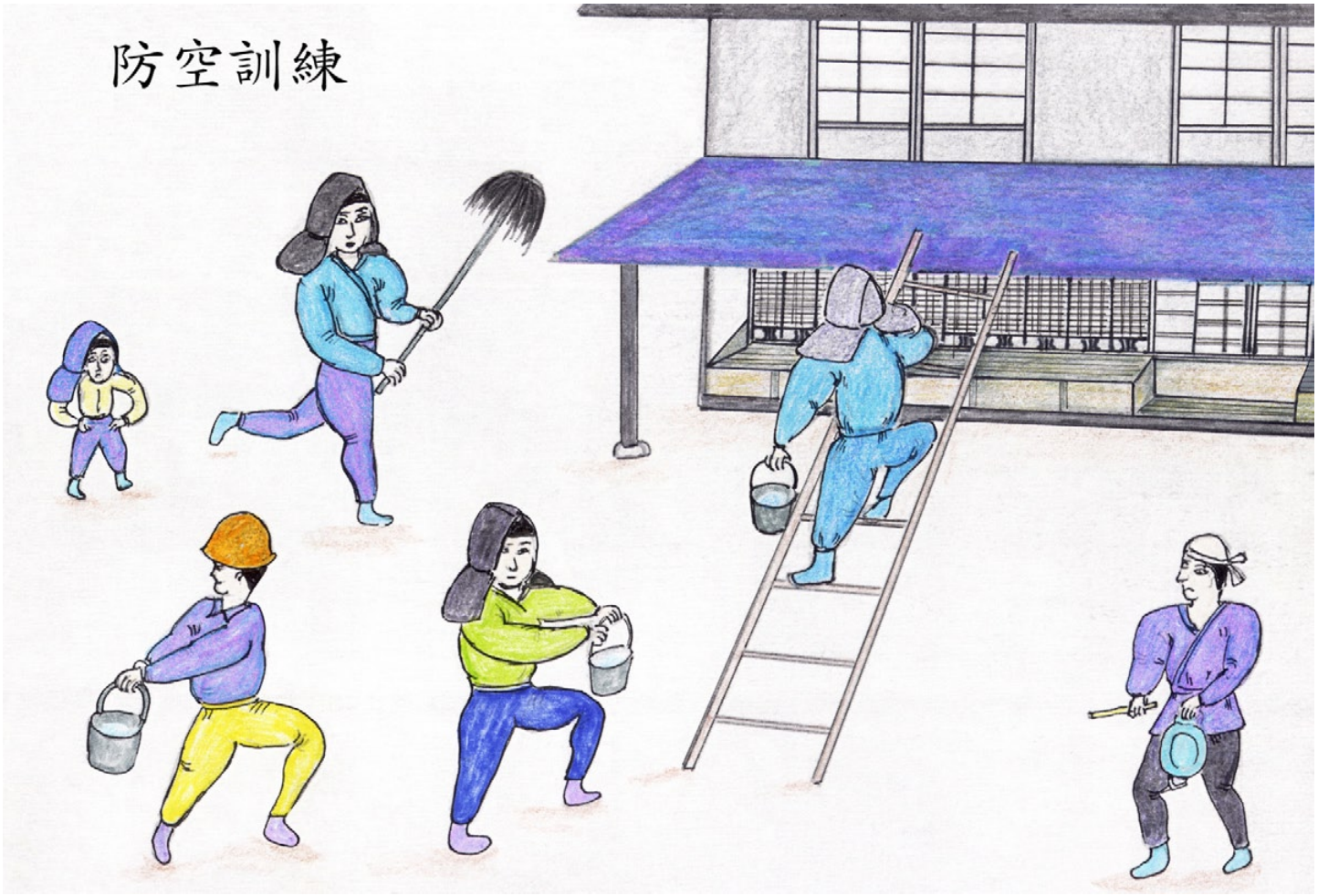
　敗戦の色が濃くなるにしたがって戦没者の帰国が続きました。遺骨もなく通知だけの人もいました。村の人は総出で迎えました。



210

無言の帰国

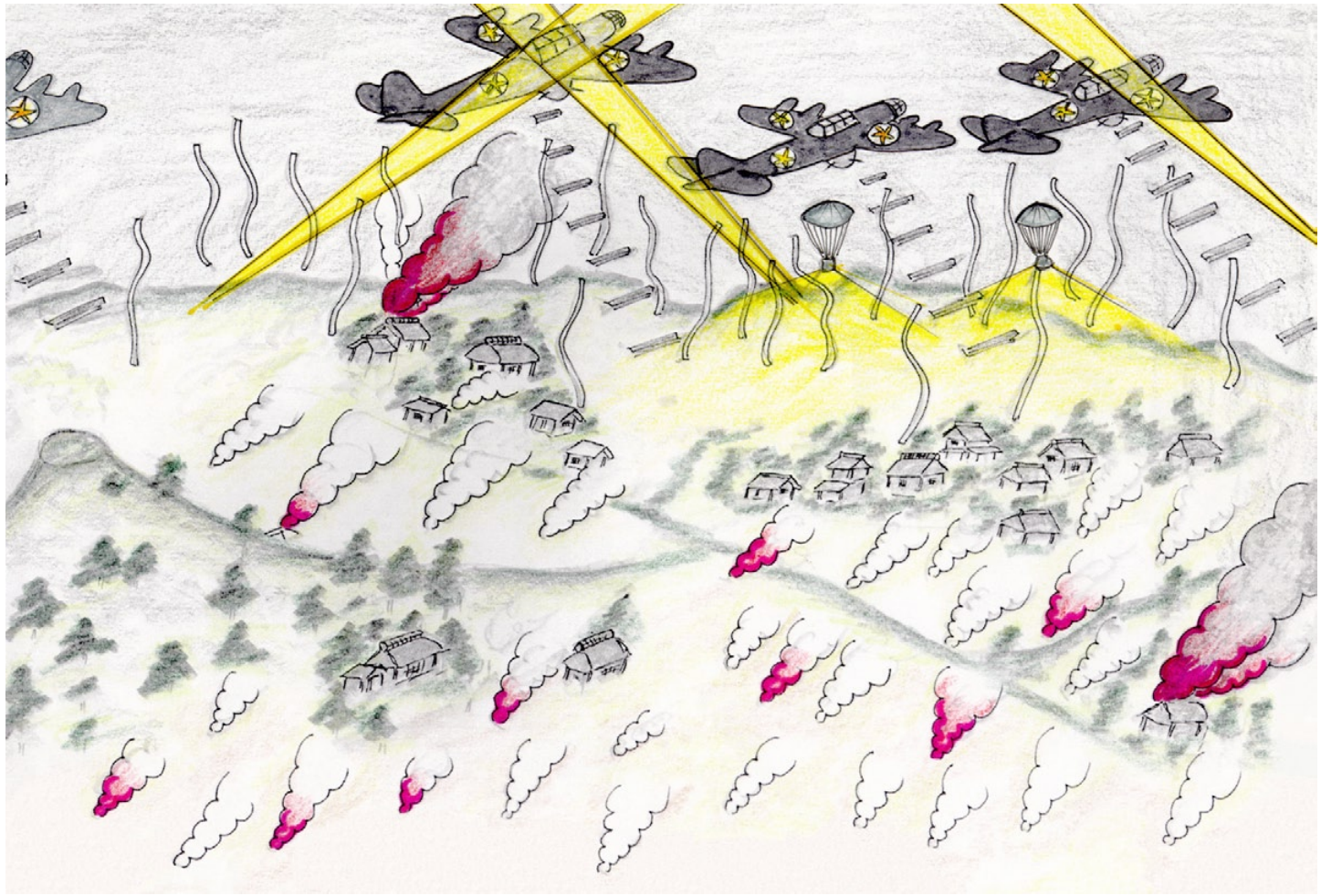
　無言の帰国をした人は仏壇に飾られ葬儀が行われました。



211

防空訓練

　空襲が激しくなると、隣近所で防空訓練が行われました。バケツリレーでの消火活動です。



212

北山田の空襲

昭和20年２月、終戦の年ですが、とうとう北山田にも空襲がありました。２戸全焼しました。絵の中のひらひらしたものは、爆弾と一緒に落とされた電波妨害用のアルミ箔です。

Ⅷ　都 市 開 発

213

開発前のすみれが丘

　開発前のすみれが丘です。中央の農道が今の商店街です。田圃や畑がよく耕され、のんびりと牛車が歩いています。開発前ののどかな農村風景です。

214

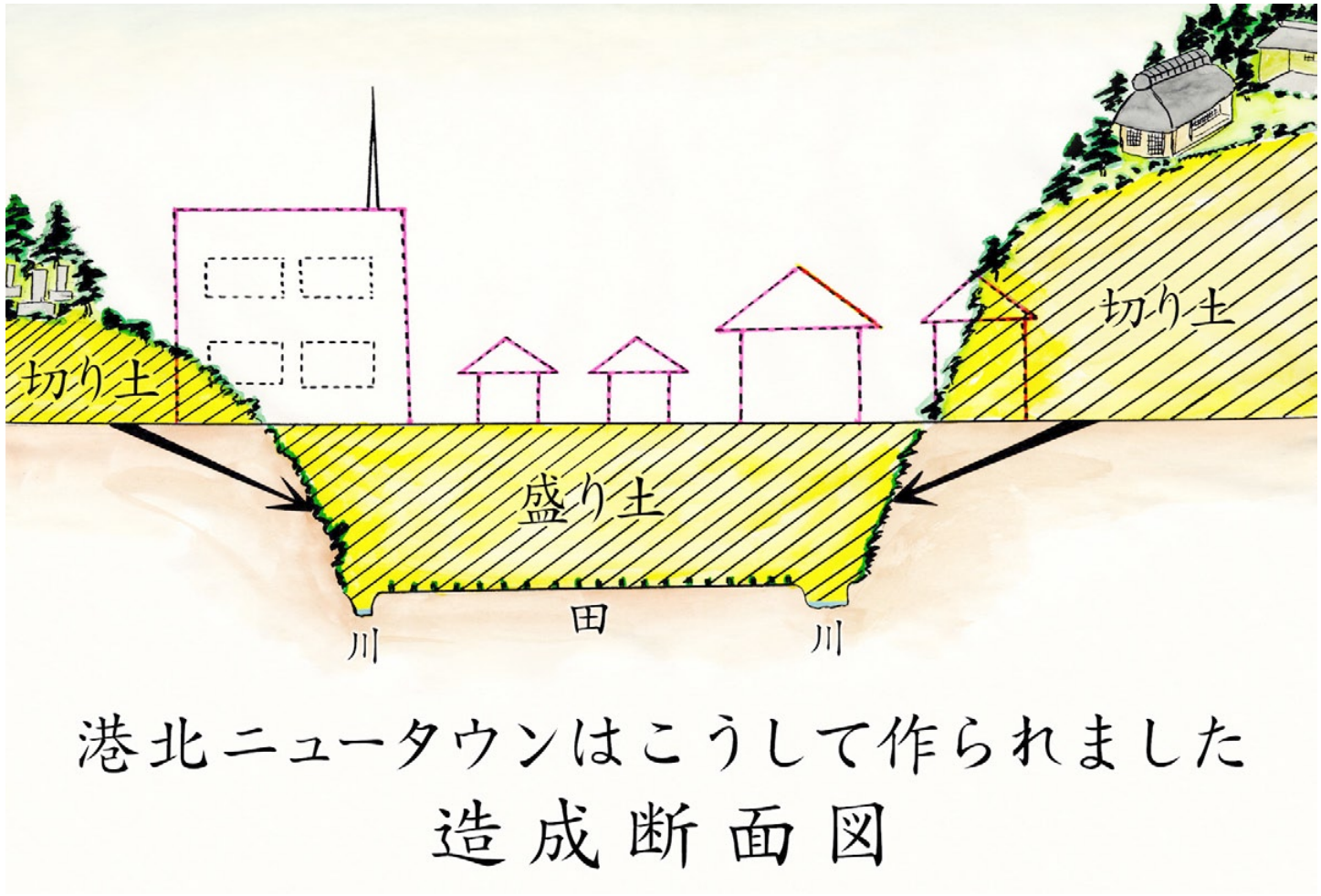
公団職員による移転交渉

開発の話が進むと公団職員が各家を廻り、移転交渉を進めました。

215

公民館での説明会

公民館での説明会です。激論を交わし、真剣に話合いました。

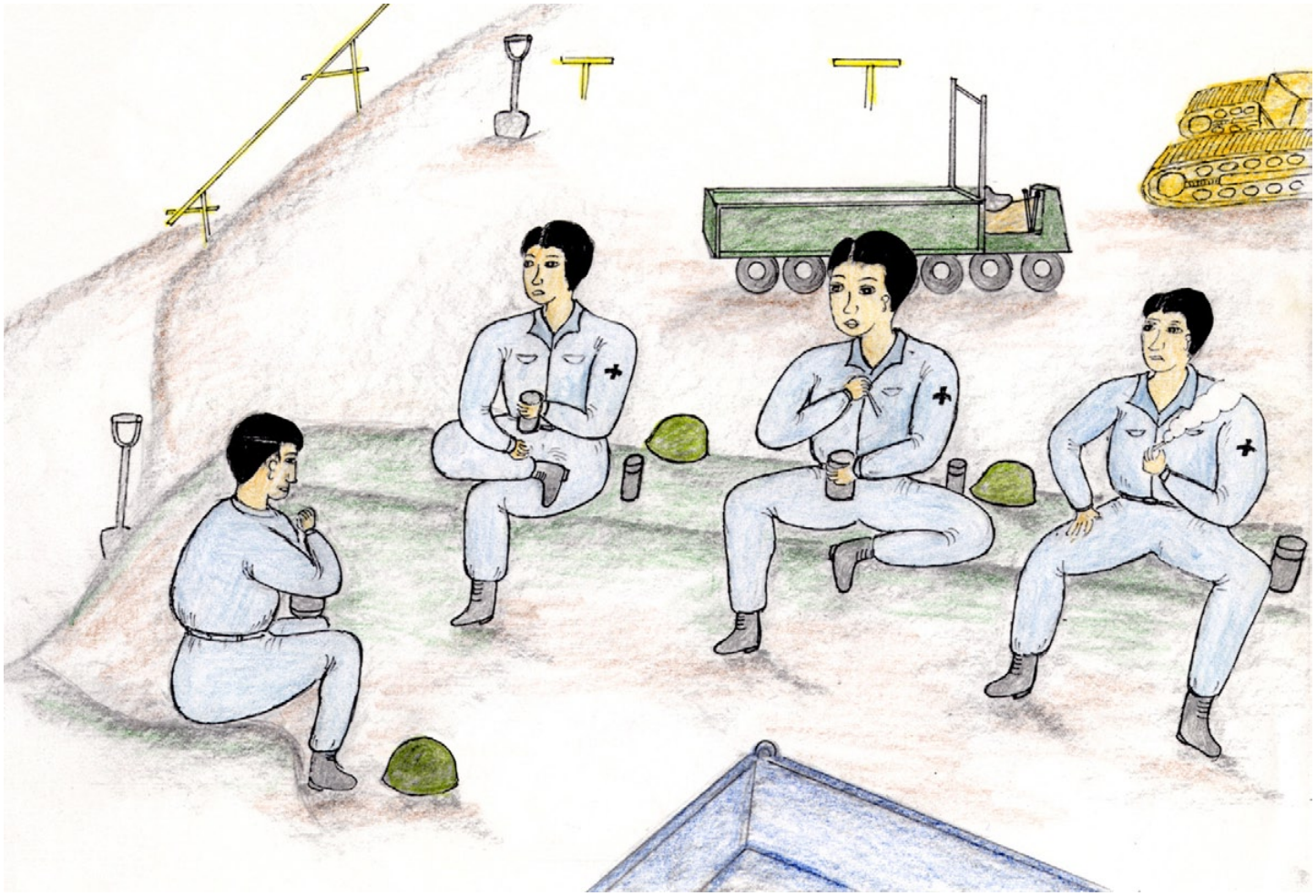


216

造成工事

北山田は田圃の低い所は山を削って埋め立て、元の田圃は約10メートルほど埋められました。

山を削り、全体を平らにして土地区画整理をしたのです。



217

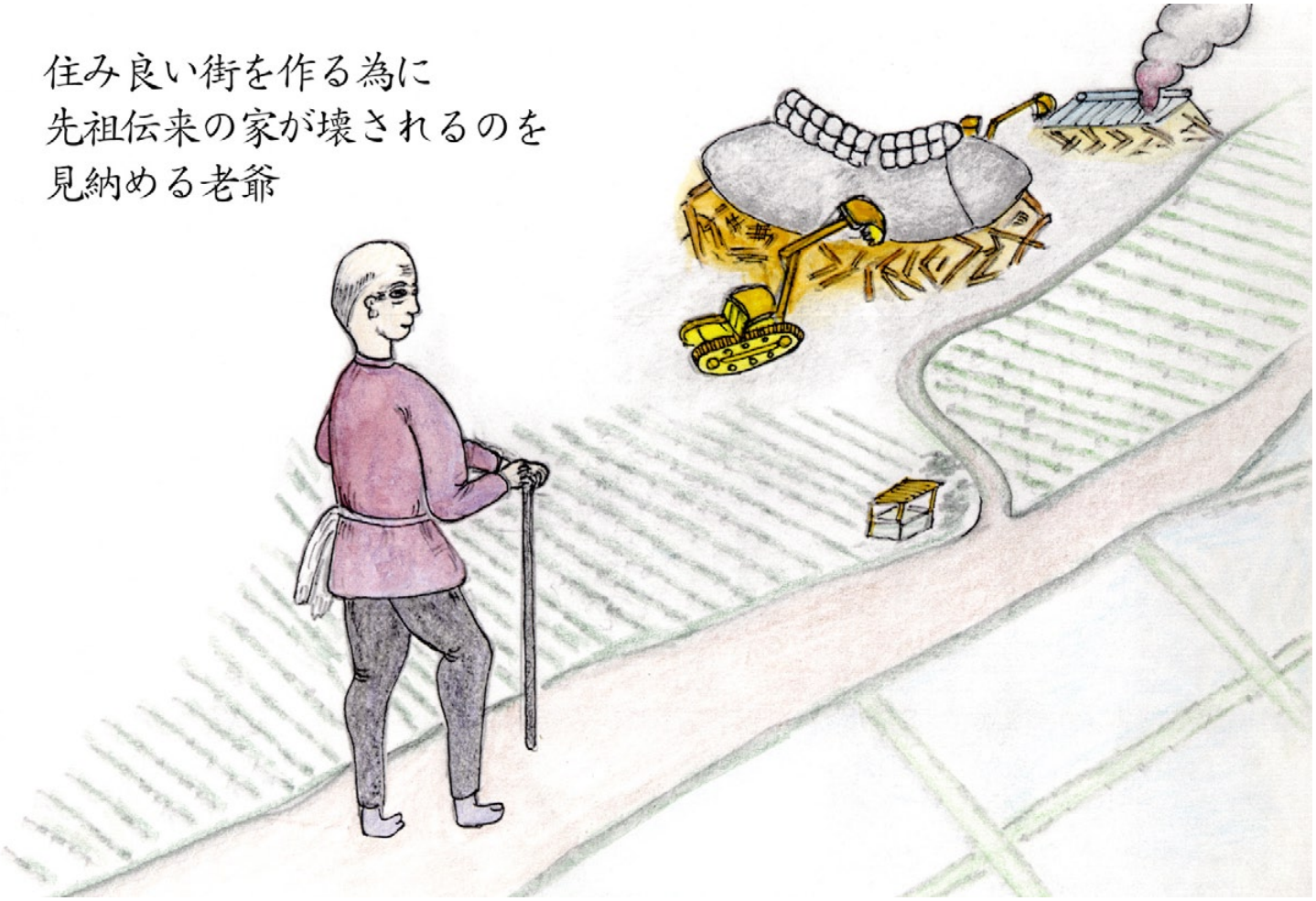
造成中の山田富士組

造成は地元設立の山田富士組も請け負い、工事をしました。

218

解体前の農家

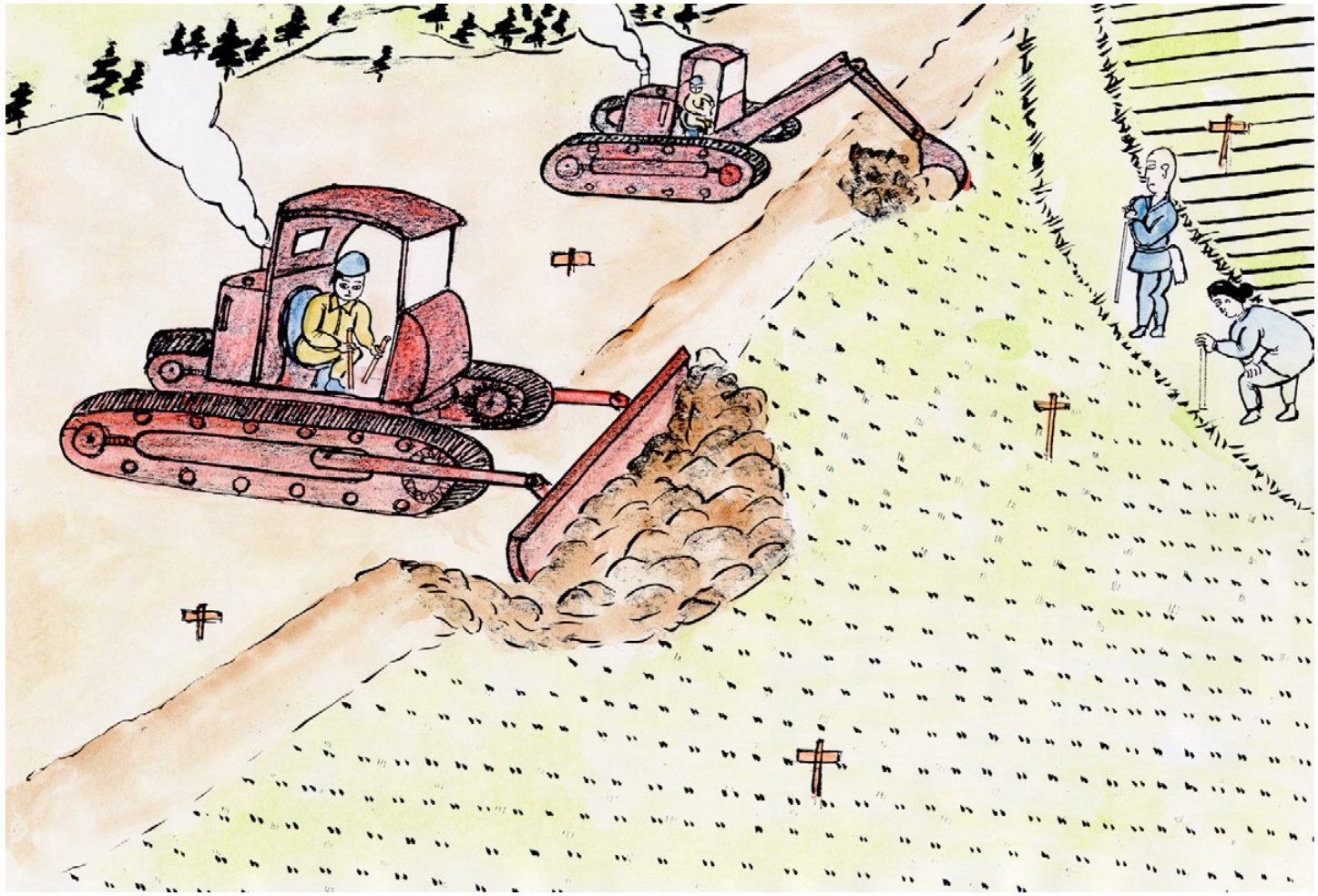
解体前の農家の屋敷です。



219

見納める老爺

　壊される自宅をじっと見つめる老爺。寂しそうです。



220

汗の染みた田畑が埋まる

　汗の染みた田畑が埋められていきます。腰の曲がった老夫婦、どんな思いで見つめたことでしょう。

221

墓地の移転

屋敷内にあった墓地を掘り起こして遺骨は新墓地に埋葬しました。墓を倒し、掘り出した遺骨をきれいにして火葬し、新しい墓地の墓に納めたのです。

222

新しい街をつくるために

　壊される家を眺めることは辛いことですが、新しい街をつくるための大きな犠牲でした。